
湖畔の殺人

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湖畔の殺人

【Nコード】

N7902E

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

大学に入学した私神村律子は、何となく入会してしまった推理小説同好会の新生歓迎旅行に参加した。それが恐るべき事件の幕開けとなるのも知らずに。同好会に私と同日に入会した中津法子は、推理マニアであるばかりでなく、自身も優れた洞察力と推理力の持ち主。法子の推理が事件の真相を解明していく。被害者の言い遺した「マガク」の意味するものとは？

プロローグ 彼女との出会い（前書き）

中津法子最初の事件。私神村律子との出会いから物語は始まります。

ブローグ 彼女との出会い

大学なんて来るんじゃないかな……。今の私の心の中にある、ホントに正直な思いである。何故かと言えば、バブル崩壊に始まったこの長く暗く救いようのない不景気。

特に私達女子大生には「超」がつくほどの就職氷河期だ。私が卒業するまでにそれが解消されて引く手数多になる可能性はほとんどゼロに近い。

悲しいよねエ。

あつ、そうか。ごめんなさい。自己紹介もせずに勝手なこと喋りまくっちゃって。

私ってば、ホントに気が動転してるわね。友達にもよく言われるの、あんたは話が横道にそれやすくてへたなにブーメランみたいに元に戻らないことが多いって。

えっ？ 言ってるそばからそれてるって？ あら、ホントだ。えーと、あつ、そうそう。自己紹介ね。

私の名前は神村律子。「かみむらりつこ」と読むのよ。よく「名前負けしてる」って言われるけど、大きなお世話よね。そして大学の一年生。今年の春、死ぬ気で勉強して、何とか念願叶って、第一志望の某私立大学法学部法律学科に合格したのよね。喜んだのは私だけで、田舎の両親は悲しんだみたい。学費は高いし、アパート代は高いし、おまけに家財道具一式、もう一組買わなくちゃいけないし。こんな親不孝な私を、どーかお許し下さい、お父様、お母様。てなわけで、無事入学を済ませ、私の大学生活はスタートした。一年生は教養課程がほとんどなので、高校の延長みたいな気がするが、まア、何よりいいのは、大学のキャンパスがすつごく広くて、開放的なところだ。

私が通っている大学は八王子市のはずれ、日野市との隣接地域にあるのだが、山一つそっくりキャンパスっていう感じで毎日がピク

ニツク気分である。その分、遊ぶところが遠いのだが。

そんなキャンパスの中で、新入生を歓迎する催しがいろいろ行われ、同好会や愛好会や何やらが、様々な立て看板を出し、まるで夜の街の呼び込みのようにキャンパスを歩く新入生と思しき人達に声をかけまくっていた。

私も何か同好会のようなものに入り、早く新しい友人を作ろうと考え、同好会の勧誘コーナーに足を向けた。その多くは、テニス愛好会、アニメ研究会、マンガ同好会といった、所謂定番モノであったが、私の目をひときわ惹いたのは、推理小説同好会の人達の、コスプレ姿だった。

私はそれほど推理小説に詳しくないのだが、そこに立っている人達の姿には皆見覚えがあった。

パイプをくわえ、季節外れのコートを着込み、大きな天眼鏡を持つている人。

たぶんこの人は、シャーロック・ホームズのつもりなのだろう。その横で椅子に座っているのは、女性なのだが、黒のスリーピースに蝶ネクタイを着け、ピンととがった口ひげに、黒の山高帽をかぶっている。

この女はエルキュール・ポアロのつもりか。

さらにその横に立っているのは、モジャモジャの長髪にヨレヨレの着物姿。

紛れもなく、金田一耕助だ。この人も女性らしい。よオやるわ。

そのコーナーには、全部で9人の男女（男3人女6人）がいたが、コスプレ姿は以上の三人の男女のみで、他の6人はごく普通の服装だった。

「その貴女、推理小説に興味がありますか？」

ホームズ姿の男の人が私に話しかけて来た。私はビクツとしてその人を見上げた。あっ、結構いい男だ。

「はい？」

思わずスットンキョウな声で応えてしまった。するとその人は微

笑んで、

「失礼。私、この推理小説同好会の代表を務めます、法学部法律学科4年の藤堂守と言います」

「は、はい、どうも」

私って、女子高生活で男に縁がない上、こんないい男に声をかけられたのなんて生まれて初めてだったので、すっかり舞いを舞ってしまったっていた。

「どうぞ、おかけ下さい」

私は言われるままに、椅子に腰を下ろしてしまった。その時、もう一人の女の子が隣の椅子に座っているのに気づいた。私はチラッとその娘の横顔を見た。

（わっ、美人だア…）

女の私が言うのも何だが、その娘は　その娘も新入生らしいのだが　まるであどけない顔をしているのに、何かとても知的な感じのする瞳をしており、口元もすっきりしていて、最近流行りのダラダラ口調なんて絶対しやうにない。とにかく、惚れ惚れする顔なのだ。髪は天然なのか、フワフワツツとカールしており、それをあまり派手でないリボンで結び上げ、ポニーテールにしていた。服装は落ち着いた淡いベージュのスリーピースで、スカートではなくスラックスを履いている。靴もパンプスではなく、革靴。普通なら高くとまっているイヤな女になりそうだが、そういう雰囲気は全くないのは、あのまるで少女のような無邪気そうな顔と、彼女の人柄なのだろう。

「あの、何か？」

あまり私がジッと見つめていたので彼女がその視線に気づき、こちらを見た。その時の彼女の笑顔は、まさにゾクツとするほど素敵だった。私はすっかり焦って、

「ご、ごめんなさい、初対面なのにジロジロ見ちゃって。別に何も無いんです」

と慌てて応えた。するとその娘は、

「こちらこそ、ごめんなさい。何か、貴女を驚かしてしまったみたいで」

と右手を差し出した。私はハッとしてその手に右手を出し、握手した。彼女は再びニッコリして、

「私、中津法子と言います。よろしくね」

「よ、よろしく。私、神村律子です」

私は少々顔をひきつらせて作り笑いをして言った。恐らく危ない顔になっていたろうなア。

これが私の現在の大親友、中津法子との最初の出会いであった。こうして私達は、推理小説同好会に同じ日に入会した。思えばこれが、あの惨劇への出発点だったのかも知れない。

大学生活は楽しくそれなりに辛く、そして新しい友人もたくさんできて、毎日が充実していたので、前期の授業はあつと言う間、というほどではないが、たちまち終わってしまったような気がした。ただし私は推理小説同好会に関してはほとんど幽霊会員状態だったが。

夏休みに入り多くの学友は実家に帰って行ったが、あまり裕福でない家庭に生まれた私は家には帰らずに、バイトに精を出していた。
(田舎に帰ってもバイトできるところが限られているからなの！)

そんなバイト先とアパートとの往復という単調な生活を始めて一月ほど経った頃、一通の手紙が私のところに届いた。それは推理小説同好会代表の藤堂さんからのものだった。

オッチョコチョイの私は変な思い込みをして、ドキドキしながら封を開いた。ところがそれは、前々から言われていた新入生歓迎旅行のことについてのおくまで事務的な内容のものであった。ああ、私のバカバカバカ…。

「新入生歓迎旅行は、群馬県の榛名湖畔にある大学の保養所で一泊

して、あたりを観光することに決定しました。費用はわずか一万円、食費その他は別です。ぜひぜひ御参加を」

そんなような内容だった。私はどうでもいいと考えていたので、大してよく読まなかったのだ。そして、返事を書く返信用のハガキにも気づかず、そのままレターケースの中に投げ入れてしまった。

そして何日かが過ぎ、バイトの汗をシャワーで流し、エアコンのスイッチを入れて、暮れかけた外の様子を窓から眺めながら、机に頬杖をつき、ぼんやりしていた時、中津法子から電話がかかって来た。

「忙しい、神村さん？」

受話器の向こうから、彼女の澄んだ声が聞こえた。まだ私達は親友とまではいかずお互いを名字で呼び合う程度だった。

「そんなことないよ。どうしたの？」

私は携帯を顔と肩の間にはさみ、爪を切りながら応えた。すると中津法子は、

「藤堂さんからの手紙、届いたでしょ？」

「うん」

「あれ、どうするつもり？」

彼女にそう言われて、返事を出していないことを思い出した。私はドキッとして、

「確か、ハガキ入ってたよね？」

と尋ね返した。すると中津法子は、

「そうね。私、まだ出していないの。神村さんは？」

「ハハ、私も実はね。でも、私のバアイ、忘れてたって言う方が、正しいかもね」

電話の向こうで、彼女の笑い声が、かすかに聞こえた。

「それでどうするの？ 行くの？ 行かないの？」

「うーん。私、同好会に入っただのは成り行きだし、推理小説なんて読んだことないし、興味ないなア。それに、バイトだってあるし……」

「そっか…」

その時の彼女の声は、私の胸をギュツと締めつけるに足りるくらい寂しそうだった。私は何かとんでもないことを言ってしまったようない感じがして、

「で、でもさ、中津さんが行くんだったら、行こうかなアなんて思ってるんだけど、どう？」

と実に軽いノリで言っただけ。また彼女のクスクス笑う声が、受話器から聞こえた。

「神村さんて、面白い女ね^{ひと}」

「そ、そう？ 私、ゴク普通の女の子だよ」

結局お人好しを三次元立体映像化したような私は、彼女と共に歓迎旅行に参加することになった。あんなことが起こるなんて、夢にも思わなかったのだ…。

第一章 第一日目朝

8月31日 午前9時

眠い…。その一言に尽きる。

私達推理小説同好会のメンバー総勢11名は、明け方に上野駅を出発し（ご丁寧なことに各駅停車で）、朝早く群馬県の高崎駅に到着した。どうして新幹線を使わないんだろうと思ったけど、予算の都合で仕方ないのよね。でも眠い方が辛いよオ。

高崎駅で電車を降りた私達は、藤堂さんの親戚の人が運転するマイクロバスに乗り、榛名湖に向かった。

まア、一口に榛名湖と言ってしまったが、この湖は火山の噴火によつてできた所謂カルデラ湖の一種で、その湖水に影を落とす榛名富士は、その名が示す通り姿が富士山に似ている。全国各地に富士の名を戴く山は数多くあるけど、榛名富士はホントに形がきれいで、まるで巨大なプリンのようなのである。（例えば食べ物になつてしまふのが、私の教養の薄っぺらなところを如実に表してるよなア…）

一行の乗るマイクロバスが湖畔にある大学の保養所に着いたのは、午前 9 時頃。普通だったらやつと起き出す時間である。

「フワア…」

私は場所柄もわきまえず、バスから降りた途端、拳がスッポリ入つてしまふんじゃないかというぐらい大きな口で欠伸をしてしまった。当然、他の全員の目が私に注がれた。私は耳まで赤くなって、

「ご、ごめんなさい、不謹慎でした！」

と深々と頭を下げた。しかし、反応がない。変に思つて顔を上げると、皆さんまるで流行り病にかかったかのように欠伸をしていた。要するに、私がいいきっかけと口実を与えたのだ。何か、謝つて損しちやつたな…。

「確かに朝早いのは辛いよねエ」

藤堂さんがさわやかな笑顔で言ってくれた。今日の藤堂さんはゴルフに行く人が着ていそうなポロシャツに、チェック地のスラックスを履いている。やつぱりかっこいいよなア。何でこんなかっこいい人が推理小説なんか好きなんだろ…。ゲツ。今の発言、誤解招くかな。

「そうだよ、もう少し遅く出たって良かったんじゃないの、藤堂さん」と口をはさんだのは、3年生の武^{たけ}尊通^{たかみち}さん。この人、Tシャツ、ジーンズという、これ以上軽装はできないという格好をしているけど、実はそこそこイイトコの坊ちゃん、結構女の子にも人気があるらしい。確かにそれなりにいい男ではあるけれど、私はやつぱり藤堂さんだな（バカ…）。

「ま、いいじゃないのさ。眠くなったらいつでも寝てかまわないんだからさ」

^{すめらぎみのる}

さらに口を出したのが、皇^{すめらぎみのる}実さん。この人も3年生で、父親が弁護士、そして母親が税理士で、その父親が弁護士という超エリート^{すめらぎみのる}の家庭に育った人である。自分も現役で司法試験に合格するつもりらしく、いつも六法全書を持ち歩いているらしい。今は手にしていないようだが、そんなに勉強が好きなら旅行になんか来ないで、家で勉強していればいいのに。この人もやはりゴルフ好きなのか、服装がそれっぽいものだ。なかなか凛々しい顔立ちなのだが、ちよい、マザコンが入ってるかもね。

「とにかく、中に入りませんか？　ここでずっと立ち話をしているも、仕方ないでしょう？」

と言ったのは、推理小説同好会の発起人でもあり、法学部男子のマドンナ的存在である、朝比奈裕子先輩である。彼女は財界の雄、朝比奈グループ総帥の娘で、武さんなんかとは比べものにならないほどのお金持ちなのだが、そんな素振りは全然なく、逆にとても控えめな服装だ。アイボリーホワイトのツーピースを着て、長く美しい髪を白いヘアバンドで留めている。何とも言えない、気品に溢れた人だ。憧れちゃうなア。

「そうだね。そうしよう。みんな荷物重そうだし」

藤堂さんが同意したので、一同は保養所の中に入った。

この保養所は今から30年ほど前、当時理事長をしていた藤堂さんのお祖父様が建てたもので、外壁は白で統一されており、外観はどことなくアメリカのホワイトハウスに似ている。

正面玄関はドッシリとした造りの木製の扉で、所謂観音開きになっている。中に入ると、まず広いロビーがあり、大型のソファが何脚か置かれていてその間には巨大なガラステーブルがあった。

保養所の中は外とはガラリと変わって木目を巧みに利用した柱と階段、そしてその色に合わせたかのようなブラウン系の壁。そして床は深いワインレッドの絨毯が敷き詰められ、見事なコントラストである。

このセンスは、藤堂さんのお祖父様のものだろうか、それとも設計士のものだろうか。

「まア、すごい保養所ね。まるで大富豪のお屋敷みたい」

と言ったのは、同好会では私より一週間ほど先輩の草薙静枝。彼女は文学部の一年生で、アメリカ文学を勉強するために大学に入ったのだそうだ。明朗活発、その上、人並み以上の美人。服装のセンスも抜群で、ジーンズ地のスカートに白いノースリーブのサマーセーターを着て、ジーンズ地のブルゾンをその上にはおっている。靴はアングルブーツで、色合いも形も可愛らしく、彼女をひときわきれいに見せている。脚も細いし、足首もはつきりしてる。もう、うらやましいとこだらけだ。これだけの容姿だから、男子学生に当然もてている。現に武さんときき合っているようだし。積極的なところが私とはまるで正反対である。

「大富豪か。確かにそうかもな」

武さんは意味ありげに裕子先輩をチラッと見てから、ごく自然に静枝の肩に手を回した。裕子先輩は武さんの視線に気づき、スッと目を背けた。

「あーあ、もうあてられちゃって、やってられないわ」

と大きな声で言ったのは、大和美砂江という娘である。彼女は私と同じ法律学科なので、中津法子について私が比較的よく知っている娘だ。かなり多めの髪をショートカットにし、ややつり上がり気味の大きな目をさらに強調するような眉やアイラインは、美砂江のきつい性格を表しているのだろうか。彼女も結構ファッショナブルで、レザーのミニスカートに、ニーハイブーツを履き、黒のハイネックセーターを着ている。当然のことながら、ミニを履くくらいだから彼女の脚も、うらやましい限りのきれいなものだ。そして、美砂江は無類のポアロ好き、クリスティー好きで、あの時ポアロの格好をしていたのが彼女なのである。

「と、とにかく、部屋割りをしようか」

藤堂さんが場を和ませようとして言った。すると裕子先輩も、「そうですね。見取り図か何かありますか？」

「ああ、もちろん」

藤堂さんはバッグの中から折り畳みである紙を取り出し、ロビールのガラステーブルの上に広げた。私達はテーブルを取り囲むようにして見取り図を覗き込んだ。藤堂さんは周りにいる人達を見渡して、「部屋は全て二階にある。1号室から、18号室まであるんだ。ただし、4、9、13は存在しないから、全部で15室になる。つまり一人一部屋で大丈夫だから、いびきや歯ぎしりが心配な人も、気にせずに眠れるって訳さ」

と冗談まじりに話した。すると、美砂江がケラケラ笑って、

「やだア、藤堂さん、オヤジみたいなこと言わないで下さいよ」

と言った。藤堂さんは苦笑いをして、

「そうか、オヤジ入ってたか」

と応えた。一同はお愛想のように笑い、部屋割りの相談を始めた。

やがて部屋割りが決まった。

藤堂さんが1号室、武さんが2号室、皇さんが3号室、裕子先輩

が5号室。そして6号室には、吾妻須美恵あづますみえという法律学科の2年生の人が入り、7号室には、同じく2年生の音華子おと はなこという人が入った。この二人については、後で詳しく紹介するので、乞う御期待！その隣の8号室には私神村律子が、そして10号室には中津法子、11号室には草薙静枝、12号室には大和美砂江が入った。そして14号室には草薙静枝とは小学校以来の同級生という戸塚行子とつかゆきこが入った。彼女はとてもおとなしい女の子で、明るくて活動的な静枝とどうして馬が合うのか、とても仲がいいらしい。好きな作家もエラリー・クイーンで一致しており、かなりのマニアのようだ。彼女も静枝と同じく、文学部の1年生である。

私は荷物を部屋に置き、パンプスを脱いでサンダルに履き替え（オバサン入ってるかな）、早速隣の中津法子の部屋に行った。「どうぞ」

ノックの音に応えて、彼女の声がした。私がドアを開くと中津法子は髪をまとめて、ポニーテールを作り直しているところだった。

彼女は、最初に会った時は正装という感じの服を着ていたし、大学ではいつもスーツ系を着ており、スカートではなくてスラックスだったが、今日は全く違う。白のTシャツに、ジーパン、そしてスニーカーである。ここまで極端なのは珍しいが、学業と遊びをはっきり区分けしているのだろう。彼女らしいと言えば、彼女らしいか。そして、今日初めて気がついたのだが、彼女、見かけによらず巨乳かも知れない。ああ、それに比べて、私の胸の貧弱さよ…。

「ひと休みしたら、湖まで行ってボートに乗るらしいけど、乗ったことある？」

と私は尋ねてみた。すると中津法子――あーっ、もうかつたらい、法子にしちゃおっと――は、

「ええ、あるわよ」

と応え、窓に近づき、外を見た。私も彼女に近づき、窓の外に目をやった。木々の間から榛名富士と榛名湖が見える。彼女は窓の留め

金を外して、ボタンと開いた。涼しい風が部屋の中に入って来た。それと同時に、法子の髪に残るシャンプーのいい香りが私の鼻をくすぐった。

「この保養所、設備が行き届いてるわね」

彼女は外を見たままで言った。私はキョトンとした。すると法子は私を見て、

「部屋ごとにバスタイレ付きで、電話も直接部屋からかけられるし、部屋同士の通話も可能でしょ。それにロビーの奥には、リネン室とボイラー室があつて、管理人さんもいるようね」

と話してくれた。私はすっかり驚いてしまった。彼女は一体いつそれほどの観察をしていたのだろう？ ひょっとしてこの娘、前に一度ここに来たことがあるんじゃない？。するとその考えを見透かすかのように、

「いいえ、私は初めて来たのよ。前に来たことなんてないわ」

と応えた。私はますますびっくりして、彼女を見つめた。

「ど、どうして私が訊こうとしたことがわかったの？」

私の声は、すっかり裏返っていた。法子はニコツとして、

「だって、そんなに驚いた顔をするんですもの。誰にだって、貴女が何を聞こうとしたかわかるわよ」

と応えた。私はそれでも、

「で、でも、どうして奥にリネン室とボイラー室があるのがわかったの？」

「匂いね」

法子はこともなげに言った。私は、

「匂い？」

とオウム返しに尋ねた。法子はコクンと頷いて、

「クリーニング屋さんに入った時、独特の匂いがするでしょ。アイロンを湿った布に当てた時のような。あの匂いがしたのよ。それと、ボイラーの稼動音も聞こえたわ」

「へえ、私全然わからなかった」

私はすっかり感心すると共に、法子がとてつもない推理小説マニアだと感じた。まるでシャーロック・ホームズだ。するとまた彼女は、

「私の言ったこと、ホームズみたいだっと思ってるんでしょ？」と私の心を覗いたようなことを言つてのけた。私は再び仰天した。

「ど、どうしてそんなことがわかるの？」

法子は私があまりにもおおげさに驚くのでしばし微笑んでいたが、やがて、

「今のは推理でも読心術でもないのよ。経験則なの」

「ケイケンソク？」

また私はオウム返し。全く、ボキャブラリーのない奴…。

「そう。私がか何か気づいたことを言うと、相手がそれに気づいていない時に見せる反応にパターンがあるの。神村さんの場合、私と同じ推理小説同好会に所属していてこの旅行は同好会の人達で来ているものでしょ？ となれば、貴女の推理小説に対する知識から考えて、ホームズのことを思い浮かべたろうなって思ったのよ」

「なるほど…」

わかつてみれば大したことはないのだが、やはりそれには鋭敏な感覚が要求されるはずだ。この娘、すごい。

「あつ、先輩方、外に出ているみたいよ。私達も行きましょう」

法子は窓の外をチラリと見てから、私の方を見た。私は少し呆然としたまま、

「あつ、うん、そうね」

と応えた。

私達は保養所を出ると、徒歩で湖畔にいくつもある貸しボート屋に向かい、大型のボートを一艘借りて全員で乗り込んだ。

漕ぎ手はもちろん男性陣で、私達女性陣は「ガンバレ！」とか言いながら、湖面を渡るさざ波に目をやっていた。

「何か、退屈だな。誰か話題提供してよ」

オールを動かしていた手を休めて、武さんが言った。すると美砂江が、

「ハイハイ！」

と手を挙げた。藤堂さんも手を休めて、

「何かな、大和さん？」

と尋ねた。美砂江は大きな目をクリクリさせながら、

「自分の中の世界の名探偵ベストワンは誰か言って、それについて議論しようよ」

と発言した。武さんがニヤツとして、

「そいつはいいな。やりましょうよ、藤堂さん」

と賛意を示した。藤堂さんも頷いて、

「そうだね。会のメンバーが全員揃ったのは久しぶりだから、推理小説同好会らしい話題がいいね」

と同意した。今の言葉、幽霊会員である私の耳にはとても痛い。

「はい！」

また美砂江が手を挙げた。藤堂さんはちょっと面喰らったような顔をして、

「はい、大和さん」

と指名した。美砂江はニコニコして、

「私にとって世界の名探偵ベストワンは、誰が何と言おうと、エルキュール・ポアロです。彼は数々の難事件に出会い、それをことごとく解決し、その推理の鮮やかなことと言ったら、他の探偵の比で

はありません。彼こそ、まさにベストオブディテイクティヴです」

と自信満々の口調で言った。すると武さんが斜に美砂江を見て、

「そうかなア。ポアロの登場する事件には、オリエント急行殺人事件のような不合理きわまりないものや、三幕の殺人のような詐欺的事件もあるぜ」

と口をはさんだ。美砂江はムツとして武さんを睨みつけ、

「そんなことはありません！ どちらも論理的で、合理的に犯人がわかるものです。それは武さんの偏見というものでしょ」

と反論した。しかし武さんはヘラヘラ笑いながら、

「そうかねエ……」

ととばけた返事をした。美砂江はプーツと頬をふくらませて、そっぽを向いてしまった。藤堂さんは苦笑いをして、

「まア、あまり過激なことは言いつこなしにしようよ。ボートの上でケンカになったら、湖に落ちてしまうから」

と美砂江をなだめるように言った。そして今度は静枝を見て、

「草薙さんは、誰がベストワンだと思う？」

と尋ねた。静枝は待っていたかのように得意満面の顔で、

「もっちゃん、エラリー・クイーンです。その推理が論理的で不合理でないところ、さらに読者への挑戦という実に面白い試みを考え出したところなど、作品の完成度が高い上に主人公エラリーの明快な推理は、すばらしいの一語に尽きます」

と応えた。するとまたしても武さんが、

「でもさア、結局のところエラリー・クイーンで、その前に出て来たヴァン・ダインのモノマネなんだよね。作風も似通っているけど、エラリーもヴァン・ダインのファイロ・ヴァンスの焼き直しに過ぎないしさ」

とチャチャを入れた。この人、ホントに嫌な性格だな。何でこんな人がもてるんだろ？ 当然静枝は怒り出して、

「何よ、尊通さん、美砂江はともかく私にまでそんなこと言うの！
？」

と武さんに食ってかかった。彼女が一步前に踏み出したせいでボートが少し揺れ、私はギョツとして縁にしがみついた。

「美砂江はともかくって何よ？」

美砂江までが大声を出し始めた。静枝は怒りの鉾先を美砂江に変えて、

「何よ、何か文句あるの！？」

「あるわよ！！」

二人がケンカを始めてしまったので、張本人の武さんはシラけたように空を見上げていた。

「まアまア、そう熱くならないで。武君、そこまで言うなら君のベストワンは誰なんだい？」

藤堂さんが割って入って、話を元に戻してくれた。一同の視線が武さんに注がれた。すると武さんは空を見上げたままで、

「俺が最高だと思っているのは、もちろん、ヴァン・ダインの創作した、ファイロ・ヴァンスですよ。あの高慢ちきなところが、何とも言えずいいんですよエ」

とせせら笑うようにして応えた。すると美砂江がフフンと鼻で笑って、

「でもヴァンスがあんまり自分の知識や教養をひけらかすので、犯人を捕まえるのが遅くなっているんじゃないかっていう説もありますよね」

と反撃に転じた。今度は武さんがムツとする番だった。しかし彼は美砂江の挑発には乗らず、彼女をチラツと見てバカにしたような笑みを一瞬見ただけだった。さっすが、ファイロ・ヴァンスの信奉者だ。とんでもないひねくれ者なのかも知れない。

「そう言えば、戸塚さんもエラリー・クイーンが好きよね。何かご意見は？」

裕子先輩が言った。戸塚行子はずっと下を向いたままで、ここに来てからまだ一言も発言していない。と言うか、私、彼女の声を聞いたことがない。顔からとてもおとなしいという印象を受ける。

男の子には好かれる可愛い顔立ちで、髪型も少女マンガの主人公みたいな、セミロングのフワフワしたものが、ちよつとイジワルな女子にはいじめられそうなタイプだ。服装も少女趣味というか、女子大生というより、女子中学生といった感じの白のブラウスに紺の巻きスカートを履いていて、靴は静枝と同じアンクルブーツだが、ちよつと大きめのリボンが着いている。

「あの…」

行子が顔を上げて喋りかけた時、静枝が、

「神村さんはどうなの？」

といきなり私にふって来た。行子はホツとしたような顔をしてまた下を向いた。

「わ、私は…」

どうしよう…？ 私、推理小説同好会に入っただけで全くの成り行きだし、今まで読んだことのある推理小説なんてただの一冊もなく、もっぱら名探偵事典とか、世界推理小説大全とかいうような、所謂読みかじりしかできない人達専用の本しか読んだことがないのだ。だから、今まで出て来た探偵の名前と性格くらいは知っているが、彼等が解決した事件など全然知らないのである。

「あら、貴女、無口な人だっけ？」

とイジワルなことを言ったのは、須美恵先輩だ。彼女は江戸川乱歩のファンで、明智小五郎の出て来る作品は全て読んでいる。どちらかというと、オドロオドロしい作品が好ましい。ショートカットの髪をボリウムを持たせてセットしている顔は女性裁判官というのが一番当たっている表現だろう。いかにも法学部法律学科で司法試験を目指していますって感じた。しかし、服の趣味はそれとは違って変わって、グレーのベルト付きのブラウススーツを着ている。光沢のある素材なので、後ろから見ると「イケイケのネエちゃん」という雰囲気だ。

「いえ、あのその、私、そんなにいろいろ読んでいないので、誰が一番かなんて…」

私がやつと口に出して言うと、今度は、

「そういうのって、ヒキヨウよね。ちゃんと自分の意見を述べるべきよ」

と言われた。華子先輩だった。この人もオドロオドロが大好きらしいが、須美恵先輩とは違って横溝正史の大ファンである。それ故金田一モノは全て読んでいる。この前、大学で耕助の格好をしていたのはこの人だ。長い髪を後ろで束ねて三つ編みにし、丸い大きなメガネをかけていて一見優しそうだが、結構きつい人だ。服装は親友である須美恵先輩と違って、ココアブラウンのワイドパンツを履き、白地に黒のノースリーブのボーダーTシャツを着ている。

「で、でも…」

私は困ってしまって法子に救いを求めて目を向けた。すると法子はすぐに私の思いに気づいてくれて、小さく頷いてから口を開いた。「神村さんより先に私が話していいですか？」

「ええ、いいですよ」

藤堂さんも、私の目がウルウルしているのに気づいたらしくそう言ってくれた。須美恵先輩と華子先輩は顔を見合わせて肩をすくめ、次に射るような目で法子を見た。彼女が何と言うのか聞いて、やり込めてやろうという敵意が見え見えた。それは静枝と美砂江、そして武さんも同じだった。優しい視線を向けているのは、藤堂さんと裕子先輩のみ。行子はまだ下を向いていたし。皇さんは敵意こそ見せていなかったが、ニヤニヤしながら法子が話すのを待っていた。「その前に、ボートを降りませんか。戸塚さんが船酔いしています。それに武さんも少し気分が悪いのではないですか？」

と法子は言った。一同はポカンとしたが、私はハッとして行子に目をやった。よく見ると彼女は額に脂汗をかいており、息遣いも苦しそうだつた。

「大丈夫、戸塚さん？」

私は行子に近づき背中をさすってあげた。彼女はかすかに頷き、少しだけ微笑んでみせた。

「俺は気分なんか悪くないぜ」

武さんが言った。しかし法子はニツコリして、

「いいえ、そんなはずはありません。貴方はさっきから全然湖面を見ていません。水が苦手だからです。でもそんなことは口にできないから、わざと尊大ぶって上を見たまま話をしたのです」

と言つてのけた。すると武さんは口を開きかけたまま何も言えなくなつてしまった。恐らく凶星なのだ。藤堂さんが、

「はア、こいつは驚いた。まるで…」

と言いかけると、法子は藤堂さんを見て、

「まるでホームズみたいだ、ですか？」

と言った。まただ。当然のことながら、私と行子を除く人達は、仰天して法子を見つめた。

私達のボートは棧橋に戻った。行子は私と法子が肩を貸してボートから降ろした。武さんも最初は強がつていたが、降りる時にボートが大きく揺れたのですっかり気が動転し、藤堂さんと皇さんに助けられて降りた。

「さすがね。世田谷にすごい女子高生がいるっていう噂を父の会社の人に聞いたことがあるの」

保養所に戻る道すがら、裕子先輩が法子に話しかけた。法子は少し驚いたような顔をして、

「恥ずかしいなア。どんな女子高生だと思われてたのかな」

とポニーテールを触りながら呟いた。この仕草、後で知つたのだが、彼女が照れている時のクセらしい。

「私の父の会社の一つが警視庁に出入りしているのよ。刑事調査官（俗に言う検死官）をなさっている方が、中津さんの実家の近所におられるんでしょ？」

裕子先輩がそう言うと、法子は苦笑いをして、

「そんなことまで御存じなんですか。びっくりしました」

と応えた。なアるほどオ。法子が推理小説好きで、ホームズばり

の観察眼を見せているのは、その辺に答えがありそうだ。

「でも、それはあくまで貴女の知識面を補う程度のものであって、戸塚さんや武君のことに気づいたのは、やはり貴女の感性の鋭さなのよね」

裕子先輩は感心したように話した。法子はますますポニーテールをクルクル回すように触りながら、

「そんなことないですよ。私、人の動きを観察するクセがあるので、たまたま気づいただけです」

「まア、そういうことにしておきましょうか」

裕子先輩はにこやかに言った。

それから私達は保養所の庭先にあるカフェテラスのような趣のあるところで、それぞれ白い木製の椅子に座り、これまた白い大きな円卓を囲んでさっきの続きを始めるべく、法子の話し出すのを待った。

「さてと。仕返しをしてやりたいから、早いとこ君のベストワンの探偵を言ってみなよ」

武さんが脚と腕をそれぞれ組んで言い放った。法子は武さんを見て、

「わかりました。私が最高の名探偵と思っているのは、やっぱり推理小説の始祖であるエドガー・アラン・ポオが生み出した、C・オーギュスト・デュパンですね」

と答えた。すると武さんが早速ニヤリとして、

「ほオ。世界で最初の推理小説に登場したデュパンを選ぶとは、なかなか手堅いな。しかし、後にドイルがホームズに指摘させているように、デュパンのやり方は『見栄を張った浅薄なやり方』だよ。名探偵かどうかははかりかねるね」

と反論した。そして当然のように藤堂さんも、

「武君に賛成だな。デュパンはホームズに比べれば、ずっと劣っていると思う」

とシャーロキアンを自ら標榜する人らしく、意見を述べた。藤堂さんにしてみれば、「ホームズみたいだ」と誉めたのに、デュパンを選んだ法子に納得しかねるものがあるのだらう。ところが法子の再反撃は、世界中のシャーロキアンを激怒させるようなものだった。「それはドイルがホームズの口を借りて言った、単なる負け惜しみです」

全く、この娘、何てこと言うの？ あの穏やかな藤堂さんの顔が一瞬だけひどく険しくなったわよ。

「人は自分に似ているもの、あるいは真似たものを自分とは違うと言いたがるものです。でないと、自分の存在を否定されてしまうと思うからです。ドイルがデュパンのやり方を非難させたのは、ホームズがデュパンの借り物であるからに他なりません」

法子は全く反撃の手を緩めなかった。藤堂さんは顔は笑っていたが目が笑っていないかった。

「し、しかしね、知名度から言えばホームズの方がずっと上だし、世界中の人に愛され、読まれているよ」

藤堂さんの声は、少々うわずっていた。そのくらい、彼は感情が高ぶっていたのだ。これに対して法子は実に冷静に、

「知名度と名探偵の能力と、何か関係があるのですか？」

と尋ねた。藤堂さんはグツとつまり、うつむいてしまった。すると武さんが愉快そうに大声で笑い出し、

「すごいね、新人生の君。シャーロキアンの藤堂さんを相手に、ここまでホームズをこきおろせるとはね」

と手を叩いた。しかし法子は武さんを見て、

「別にホームズをこきおろしたわけではありません。デュパンに対する正当な評価をドイルがしていないことを指摘しただけです」

と応えた。今度は華子先輩がメガネをクイツと上げて、

「中津さんの言う通りですよ、藤堂さん。ドイルは後に、ホームズのモデルは恩師の教授だと言っていたようですが、それはポオの模倣と言われたくないから考え出した作り話だって、横溝正史も書い

てますよ」

と口をはさんだ。さらに追い討ちをかけるように、

「そうね。それ、結構有名よね。だってさ、デュパンには『私』というどうやらポオの分身らしい人が語り手として一緒に暮らしているし、ホームズにも『ワトソン』というドイルの分身らしい人がついている。話の進め方も一人称で似ているし、ボケとツツコミのような関係もよく似てる。むしろ、ホームズがモノマネだと誰も言わないのが不思議なくらいよね」

と須美恵先輩が言い立てた。藤堂さんは必死に感情を抑えているらしく、手を震わせていた。

「そうなんですか。知らなかったわ。その点、ポアロはデュパンとは全然似ていないし、語り手のヘイスティングスは出て来ないこともあるから、デュパンの呪縛からかなり解放されているわよね」

美砂江までがよせばいいのに火に油を注ぐようなことを言い出す。皇さんがそれに輪をかけて、

「僕はペリー・メイスン物が好きで、今までに40冊以上読んでいくけど、作者のE・S・ガードナーは、その呪縛から最も遠いところにいると思うよ。何しろボケとツツコミ役はいないし、一人称モノは一冊もないし、ホームズのような超人的推理はしないし。すごく現実的で、論理的な作品ばかりさ」

と言い出す始末だ。もうどうしようもない。すると藤堂さんの「異変」に気づいた武さんが、

「モノマネと言えば、金田一耕助のモジャモジャ頭とヨレヨレの着物姿だって、初期の明智小五郎にそっくりなんだぜ。横溝正史もドイルのことなんか言える立場かってとこだな」

と藤堂さんの援護をした。今度は華子先輩がムツとして、

「フーンだ！！」

と武さんに向かって舌を出した。それを見ていた須美恵先輩が、

「あつ、そう言えばそうね。金田一って、明智小五郎のモノマネなんだア」

と面白そうに言った。華子先輩は、キツとして須美恵先輩を睨み、
「何よ、裏切り者！ 親友だと思ってたのに…」

「何言い出すのよ、華子。大袈裟よ、ちよっと」

須美恵先輩はやや呆れ気味に言った。しかし華子先輩はツンとして須美恵先輩から顔を背けてしまった。

「みんな、ちよっと熱くなり過ぎよ。これは議論なの。ケンカじゃないんだから」

裕子先輩がたまりかねたように大声で言った。そして、

「じゃあ、私が自分の探偵のベストワンを言います」

と話しかけると、藤堂さんが、

「いや、もうやめよう。僕は部屋に戻って少し休むよ」

と立ち上がり、さっさと保養所の中に入って行ってしまった。武さんがそれを見送りながら小声で、

「全く、ホームズをけなされたもんだからすっかり本性を表して感情的になっちまったな。あの人の悪いところだ」

「武君、そういう言い方は良くないと思うけど」

裕子先輩が武さんをたしなめた。武さんは肩をすくめて、

「そりやどうも悪うございました」

と言った。全然反省の色なしだな、この人。

「私、謝って来ます。藤堂さんが怒ったのは、私のせいですから」

法子が立ち上がった。すると裕子先輩は、

「いいのよ。藤堂さんも、ちよっと大人げないのだから。放っておいた方がいいわ」

「そうですか…？」

法子は保養所の玄関に目をやったままで呟いた。

座がすっかりシラけてしまったので、私達もそれぞれ、保養所に戻ることにした。

「ねエ、中津さん」

玄関のところまで来た時、須美恵先輩が声をかけて来た。法子は

彼女に目を向けて、

「何でしょうか？」

すると須美恵先輩は小声になって、

「これから私の部屋にこない？ 女だけで集まろうと思うんだけど」

と言つて来た。法子は私に目を向けた。須美恵先輩はそれに気づき、

「もちろん、神村さんもよ」

と応えた。私は何だろうと思い、

「集まつてどうするんですか？」

と尋ね返した。須美恵先輩はニヤリとして、

「そりゃもちろん、女同士でなきゃできない話をするのよ」

「はア？」

私は思わず頭のテッペンから出たような声をあげてしまった。

第三章 女達の噂話

8月31日 午前11時

私達は一旦それぞれの部屋に戻り、それから須美恵先輩の部屋に行くことにした。私はまず法子の部屋に行って彼女を誘い、それから6号室の須美恵先輩のところに行った。

「おジャマします」

私と法子が入ると、すでに静枝、行子、美砂江の三人と、華子先輩が来ていた。

「貴女達で最後よ。早くその辺に座って」

須美恵先輩が言った。彼女はベッドの端に華子先輩と座っていた。静枝と行子は背もたれのない小さめの丸椅子に腰掛けていて、美砂江は床に敷かれた絨毯の上に横座りしていた。法子と私も座るところがないので、絨毯の上に横座りした。

「裕子先輩は来ないんですか？」

私が尋ねると、華子先輩が、

「あの人、こういう碎けた話ができないのよね。だから遠慮しますって」

とトンボメガネをクイツと上げながら答えた。須美恵先輩が、

「ちよっとお金持ちだと思って、気取ってんのよ。何様のつもりなのかしら」

と少々大声で言った。華子先輩はびっくりして、

「声大きいよ、須美恵！ 裕子先輩、隣なんだよ。聞こえたらどうするの！？」

「聞こえやしないわよ。今頃彼女、CDをベッドフォンで聞いているわよ」

須美恵先輩は、ケラケラ笑いながら言い放った。そして私達を見渡して、

「さてと。女だけに集まってもらったのは他でもないんだけどさ。まア、草薙さんにはあんまり関係ないかも知れないんだけどね」

「えっ？ それ、どういう意味ですか？」

静枝は少しムツとして尋ねた。須美恵先輩はまアまアという仕草をして、

「別に変な意味じゃないのよ。要するにこの旅行の目的ってこと」

「はい？」

今度は静枝ばかりでなく、私を始め、法子、行子、美砂江が、キョトンとして須美恵先輩を見た。

「貴女達、一体誰がお目当てでこの旅行に参加したの？」

そこまで言われて、私はやっとこの人が何を言いたいのか理解した。美砂江が、

「なアんだ、そういうお話だったんですか」

と言って笑い出した。すると華子先輩が、

「それじゃあ早速聞くけど、大和さんは誰がお目当てなの？」

とニヤニヤしながら尋ねた。美砂江はギクツとして華子先輩の顔を見て、

「い、いきなり私ですか？ 弱ったなア……」

と言って頭を掻きながら、チラツと静枝を見た。静枝はそれに気づかずに行子とヒソヒソ話をしていたが、須美恵先輩がいち早く気づいて、

「ははア、大和さんのお目当ては、武さんなのね」

と指摘した。美砂江はビクンと身体を動かして、

「ちよつ、ちよつと先輩、そんな大声で！」

と慌てふためいた。しかし予想に反して、静枝はにこやかだった。彼女は美砂江を見て、

「やっぱりねエ。どうも最近、私に突っかかって来ることが多いから、どうしてなのかなアって思ってたのよね」

と嫌みっぽく言った。美砂江は顔を真っ赤にして、

「だ、だからア、そういうんじゃないんだってばア……」

と反論しようとしたが、言葉につまってしまって黙り込んだ。

「そついう須美恵先輩は、一体誰がお目当てなんですか？」

静枝の興味は須美恵先輩に向けられた。ところが須美恵先輩は全然動じている様子がない。むしろ待っていたかのように、

「私のお目当ては皇さんなの。彼の家、弁護士一族でしょ？　だから生活は安定してるし、将来は有望だし。それに皇さんて、かつこいいじゃない？」

と言つてのけた。彼女の目はうつとりしており、口調は情感たつぷりだ。華子先輩は呆れ顔で、

「よく言うよ」

と肩をすくめた。私も華子先輩の意見に同感だった。皇さんてすごく理知的な雰囲気はあるけど、決してかつこいいとは思わないもんなア。ま、人それぞれってことが。何てことを考えていると、

「じゃあさ、神村さんは？」

といきなり私の番が回って来てしまった。わっ、どうしよう…。正直に言つた方がいいのだろうか…？

「えと、私は、そのオ…」

どうもいかん。小さい頃から、私はいきなりとかみなりが苦手で、ドキドキして喋れなくなってしまうタチなのだ。

「神村さんは、藤堂さんじゃないの？」

静枝がいきなり核心を突いて来たので私はビクツとして彼女を見た。静枝はニツと笑つて、

「図星みたいね。貴女がこの会に入会したあの日、貴女、藤堂さんに声をかけられてドキマガシってたでしょ？　そうじゃないかってあの時から思つてたのよねエ。だからこの旅行に参加したんでしょ？」

「

「えっ？　それ、どういう意味？」

私はやつと胸のドキドキを抑えて尋ねた。すると須美恵先輩が、
「だつてこの旅行、男をゲットするための旅行なのよ。知らなかったの？」

「ええっ！？」

私は顔が耳まで赤くなるのをハッキリと感じた。そして法子の反

応を見ようと彼女に目を向けた。しかし法子は別に驚いた様子もない。知ってたのかな？

「神村さん、貴女も藤堂さんがお目当てなの？」

華子先輩の声は明らかに敵意があつた。すると美砂江が、
「てことは、華子先輩も、藤堂さんがお目当てなんですか？」

と意外そうな顔で尋ねた。華子先輩はちよつとばかり照れ臭そうに笑つて、

「まアね。去年の新入生歓迎旅行の時は、藤堂さん、裕子先輩といひ雰囲気だったので何か気後れしちゃったんだけど」

と答えた。そこへ須美恵先輩が、

「あら、裕子先輩は、その頃は武さんとき合つてたんじゃないの？」

と口をはさんだ。華子先輩は目を見開いて、

「あれ、そうだっけ？　じゃ、私の勘違いか。でも、裕子先輩はともかく、藤堂さんは裕子先輩に好意を持つてたみたいよ。今は全然そんな感じしないけどね」

と言つた。美砂江が静枝を見て、

「静枝はさっきの話知つてたの？」

と尋ねた。静枝は頷きながら、

「もちろん。でももう、お互いきれいに終了してるって聞してるわ」

と答えた。須美恵先輩が、

「藤堂さんや皇さんは、誰がお目当てなのかしら？」

と言ひ出した。すると華子先輩が、

「皇さんは、少なくともあんたじゃないらしいわよ」

「な、何よ、それ！？」

須美恵先輩は、プーツと頬を膨らませた。美砂江が愉快そうに、
「皇さんは静枝がお目当てらしいですよ。だから武さんと対立することが多いんですって」

と口を出した。静枝は少し嫌そうな顔で、

「ええっ、ホントなの？　どうしよう…？」

とまるでストーリーカーに狙われている女性みたいな発言をしたので、須美恵先輩はすっかり機嫌を損ねて、

「何よ、その言い方！？ ム力つくわね」

と静枝に食ってかかった。静枝はハッとして須美恵先輩を見て、

「ご、ごめんなさい、そういうつもりじゃないんです、先輩」

と手を合わせて謝った。華子先輩は須美恵先輩のカンシヤクに呆れているようだ。方向を突然変えて、

「中津さんは誰がお目当てなの？」

と法子に話をふって来た。すると法子はニッコリして、

「私、そういうつもりで来たわけじゃないですから。彼はいますし……」

と答えた。えっ！？ は、初耳だアッ！！ 法子に彼がいるなんて彼女と知り合って半年近くになるのに……いや、半年くらいしかたっていないと言っべきか……、そういう話は聞いたことがない。裏切り者オツ！！

「えっ？ そうなの？ じゃ、一体何しに来たのよ？」

美砂江がびっくりして尋ねた。私も興味シンシンで法子を見た。

法子は、

「私、一度こういうところに来て泊まってみたかったです。それに、榛名や伊香保にも来てみたかったし」

「ああ、そう……」

美砂江はいささか拍子抜けしたように肩をすくめ、次に行子を見た。

「ねエ、戸塚さんは？」

その問いに行子はギクツとして美砂江を見、それから静枝を見た。静枝も行子を見て、

「別に言いたくないのなら、言わなくていいのよ。でも、そういう女って、嫌われるわよね」

と言った。行子は今にも泣き出しそうな顔になったが、静枝は慰めの言葉などかけなかった。

「ほら、そういうイジイジしたところがダメなのよ。もっとしつかりしなさいよ」

「……」

行子は目をウルウルさせたままコクンと頷き、美砂江を見た。私達もこぞって行子が話し出すのを待った。

「あの……」

行子は口を開きかけたが、周りの人が皆自分を見ているのに気づき、また黙ってしまった。とうとう静枝がたまりかねて、

「ホントにもう！ あんたが口を開くのを待ってたら、何回誕生日が来るかわかりやしないわ！ 私が代わりに言うわよ」

と半ば脅迫めいた言葉を吐いた。行子はピクンと顔を上げ、目を見開いて首を横に振り、

「待って！ 自分で言う……。言うから……」

と消え入りそうな声で言った。そして、大きく息を吸い込んで、

「私、武さんが好きです」

とこれまた風の音で聞こえなくなりそうな声で言った。私はギョツとして静枝を見た。この女、何て残酷な奴なんだろう。自分と同じ男を好きだという、こんな可哀想な子をここまでいたぶって……。そしてまた、行子がまさに心の底から絞り出すようにしてやつの思いで口にしたその言葉を、まるでバカにしたような目で見ていたのだ。ひどい女だ。

「あら、静枝と一緒にね。仲良しもそこまでいくと考えものよねエ」

美砂江の言葉は、行子は心の傷に塩をぬるようなものだった。行子は声は出さなかったが、何かを呟いているように見えた。彼女の目からはポロポロと真珠のような大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「何泣いてるのよ。何も泣くようなことじゃないでしょ？ それじやまるで私がいじめてるみたいじゃないのよ」

静枝は怒ったように言った。行子は声にならない声で必死に謝っていた。今、ようやくわかった。この二人は決して仲がいいのではないのだ。行子は小学校以来ずっと静枝の付き人のような役回りを

させられていたのだ。彼女の無口なところは、長年のストレスが生み出したのではないか？ 静枝に目をつけられる前はもっと明るくてハキハキした子だったのかも知れない。

「草薙さん、自分の劣等感を排除するために戸塚さんを利用するのは、いじめじゃないですか？」

あんなににやかな顔だった法子がまさに真顔になり、その目は静枝を射るように見ていた。

「何よ、中津さん。私の劣等感？ どの辺が？ 何言ってるのよ、ホントに」

静枝はせせら笑うようにして、法子を睨みつけた。しかし法子は負けていなかった。

「何も言い返せない人に暴言を浴びせて恥じないのは、自分が本当の議論になったら負かされてしまうという劣等感の裏返しです。要するに貴女は口の達者な人とは議論しない。だから武さんにクイーンの批判をされても真正面から反論できなかったのです」

静枝はキツとしたが、歯ぎしりしただけで何も言い返さない。法子の言ったことが、一から十まで当たっているのだろうか。

「言い返せなかった理由はもう一つあります。実は本当にクイーンのことをよく知っているのは戸塚さんで、草薙さんのクイーンに関する知識はそのほとんどが戸塚さんからの受け売りだからです」

と法子は続けた。静枝は今度は啞然とした。何でそんなことまで、とまるで顔に書いてあるかのように彼女はポカンと口を開けて、法子を見ていた。法子は行子をチラッと見て、

「戸塚さんが探偵のベストワンを言おうとしたのをさえぎったのも彼女が困っているのを助けるためではなく、戸塚さんの方がずっとエラリー・クイーンのことを知っており、戸塚さんが草薙さんのマネをしていると思われるのに、実はその逆だったと気づかれては困るからでしょう？」

と本当に容赦しなかった。とうとう静枝は下を向いてしまった。すると行子が、

「もういいの、中津さん。静ちゃんをいじめないで…」

と法子にすぎるように言った。静枝以外の全員がいつせいに行子を見た。法子は再びあのにこやかな顔に戻り、

「優しいのね、戸塚さんは」

と言った。行子は首を軽く横に振ったが、ニコツとした。きっと法子が自分のことを助けてくれたことが嬉しかったのだろう。私は他の人達が法子をどう見ているのか気になって、周りを見た。須美恵先輩と華子先輩は、すっかり法子の推理力と分析力に驚嘆しているようだ。美砂江も同じようだが、彼女は少々法子に嫉妬しているように思えた。

「静ちゃん…」

行子は健気にも静枝に近づき、彼女を慰めようとした。ところが静枝は、

「うるさい!!」

と怒鳴り、びつくりして座ってしまった行子を睨みつけ、次に法子にその怒りの目を向けると、何も言わずに部屋を出た。後ろ手に閉じられたドアは、あまり勢いが強かったので壊れるのではないかと思われたほどだった。

「ありがとう、中津さん。ホントに、ありがとう…」

行子はスツと立ち上がって、法子に深々と頭を下げた。法子はポニーテールを触りながら、

「とんでもない。かえって草薙さんを怒らせて、貴女への風当たりが強くなるんじゃないかって、少し不安なの」

と応じた。すると美砂江が、

「確かにねエ。あそこまでコテンパンに言われた静枝を見るの、初めてなもの」

と皮肉ともとれることを言った。しかし行子は、

「大丈夫です。静ちゃんはサッパリした子ですから、そんなことないです。私、彼女の部屋に行ってみます」

といい切り、部屋を出て行った。全く、あの二人、わからない。ホ

ントのところはどういう関係なのだろうか？

「私も言い過ぎたと思ってますので、草薙さんの部屋に行ってみます」

法子も立ち上がった。私も慌てて立ち上がり、

「あっ、私も行くわ」

と言った。この場に残されれば、イジワル三人組の餌食にされると思ったからだ。

「さっ、早く行きましょ」

私は法子を追い立てるようにして、須美恵先輩の部屋を出た。

第四章 昼食時のもめごと

8月31日 午後12時20分

私は法子に付き従うようにして、静枝の部屋に向かった。

「昼食の用意ができてるみたいだよ」

階段のところで、藤堂さんと皇さんに出会った。法子は微笑んで、「わかりました。すぐに行きます」

と応えた。藤堂さんが、

「じゃ、先に行ってるね」

と言い、階段を降りて行った。皇さんもそれに続いた。二人が階段を降り切るのを待ってから、法子と私は静枝のいる11号室の前に立った。

「どうぞ」

ノックの音に応えた静枝の声は、すっかり怒りがおさまっているようであった。

「お邪魔します」

と法子は言い、ドアを開いた。私達が中に入ると、静枝と行子はニコニコ笑いながらベッドの端に仲良く並んで座っていた。

「さつきはごめんなさい、中津さん」

静枝は意外にもペコリと頭を下げた。法子もすぐさま、

「こちらこそ。戸塚さんがあまり可哀想なので、つい言い過ぎてしまいました。ごめんなさい」

と頭を下げた。すると静枝は苦笑いをして、

「さすが、中津さんね。裕子先輩がしきりに貴女のこと入会させたがっていた理由が、さつきよくわかったわ。私、完敗だったものね」

「そんなこと……」

法子は微笑んで応じた。しかし静枝は、

「いえ、ホントよ。貴女の言った通りなの。私、尊通さんにエラリ・クイーンを批判されても反論するだけの知識がなかったの。だから行子がクイーンのことを話そうとした時、さえぎったのよ。全

く、呆れるほどその通りだったの」

とやや自嘲気味に言った。その時行子が、

「静ちゃんにエラリー・クイーンを読むように薦めたのは私なんです。だから……」

と静枝をかばいたいのか、精一杯声を出しているという感じで言った。静枝は優しい目で行子を見て、

「ありがとう、行子。でもごめんね。尊通さんのことまで貴女に無理に言わせたのは、ホントに悪かったわ」

「もういいのよ。もうそのことは言わないで。武さんの耳に入ったら、私、死んじゃう」

行子は恥ずかしそうに下を向いて言った。静枝は少し呆れた顔になり、

「どうしてよ。好きな人に好きだってわかってもらうことが、どうして貴女が死んじゃう理由になるのよ？」

「だ、だって、私みたいな女が武さんのこと好きになったって、静ちゃんになうわけないし、武さんにも嫌われちゃいそうだし……」

行子はどんどん下を向いてしまい、声も小さくなって行った。

「そんなこと、どうしてわかるのよ？ 尊通さんと私、最近ケンカばかりしてるのよ。これから先も今までのような関係が続くかどうかかわからないし……」

静枝の言葉に行子は顔を上げ、目を見開いた。静枝はいたずらっぽく笑って、

「そのケンカの原因がね、貴女なのよ、行子」

「えっ？」

行子はすっかりキョトンとしてしまい、私と法子を見て、それから再び静枝を見た。

「だって尊通さんたら、何かっていうと、『行子ちゃんを見習って、もっとおしとやかになれ』って言うの。だから今日は、そのことも手伝って、貴女をいじめちゃったのよね」

行子はカーッと真っ赤になってしまった。

「う、嘘……」

「嘘じゃないわよ。彼の理想のタイプって、行子みたいな子らしいわよ」

「……」

静枝の言葉は、行子を気絶させるのではないかというくらい衝撃的だった。

「さっ、もう行きましょ。お昼の時間よ」

静枝は呆然としている行子の手を引いて立ち上がり、ドアに近づいた。私と法子は思わず顔を見合わせた。

私達がダイニングルームに入って行くと、そこには大きな長いテーブルがあり、奥の方から藤堂さん、皇さん、武さん、そしてその反対側の奥から裕子先輩、須美恵先輩、華子先輩、美砂江が座っていた。静枝は武さんの隣に座り、行子はその隣に恥ずかしそうに座った。私は美砂江の隣に座り、法子は私の隣に座った。私はさっきの話を思い出し、藤堂さんと目が合った時、顔が火照るのを感じた。「さっきは失礼。僕も大人げない行動をしてしまったみたいだ。中津さん、悪く思わないでね」

と藤堂さんが言うつと、法子はニコツとして、

「いえ、別に。私の方こそ、ごめんなさいと謝らなければならないのに、藤堂さんに先に謝られてしまつて……」

と応えた。藤堂さんもニコリしてから、

「さア、この旅行で最初の会食だから、楽しくいただこうね」

と一同を見渡した。

「はい」

私と法子、それに他の何人かが返事をしたが、武さんと皇さんは口を動かすのも面倒だという感じで、何も言わなかった。

そんな雰囲気だったから、食事中は食器の音とかコーヒーを注ぐ音、給仕のおばさん達がパタパタ歩き回る音ばかりが聞こえるほど、皆口をきこうとしなかった。

「何よ、まるでお通夜みたいじゃないの。もう少し楽しく食事しましょうよ」

こういう妙な静けさに耐えられないのか、須美恵先輩が口を開いた。すると武さんが目の前の食器を重ねながら、

「そうだな。みんな、何か喋れよ」

と同意した。華子先輩が藤堂さんを見て、

「そう言えば、これからの予定はどうなっているんですか？」

と尋ねた。藤堂さんは華子先輩に目をやり、

「特別にどこへ行くとかは決めていないよ。希望があれば言ってもらいたいんだけど。ただし、予算の許す範囲でだけだね」

とさわやかな笑顔で答えた。華子先輩は実に嬉しそうな顔をして、

「私、榛名富士に登ってみたいな。ロープウェイがあるんでしょ。それに山頂からの景色もきれいだって言うし」

と提案した。しかし武さんが、

「それなら歩いて登るのを勧めするよ。その方が山頂に着いた時の感動も一入だろうからね」

と皮肉を言った。華子先輩はそれを無視して、

「ねエ、藤堂さん、予定に入れて下さい。ロープウェイのお金なんて大した額じゃないでしょ？」

「わかった。そうしよう。他にどこか行きたいところはあるかな？」

「

藤堂さんは再び一同を見た。すると美砂江が、

「私、伊香保に行ってみたいな。来る時は高崎から回り込んで来たら、通らなかつたでしょ。あそこ、露天風呂があるのよね」

と嬉しそうに言った。こいつ、温泉好きなのかな？

「はいはい。じゃあ、伊香保にも行ってみようか」

「私は、榛名神社に行ってみたいわ。1400年も前に創建されたそうよ。それに、本殿が岩にはめ込むように造られていて、とても神秘的らしいわ」

裕子先輩が発言した。皇さんが頷いて、

「そつだね。君はどう、草薙さん？」

と尋ねた。静枝は意表を突かれたように皇さんを見て、

「ええ、そうですね。榛名神社もいいですけど、私、馬車に乗ってみたいです」

「そうか。馬車もいいな」

皇さんは感心したように頷いた。やはり彼は静枝に気があるようだ。すると早速須美恵先輩が、

「皇さん、自転車を借りて湖を一周するっていうのもいいですよ。馬車なんか、馬のフンで臭いだけですから」

と口をはさんだ。静枝は別に須美恵先輩と争うつもりがないので、「そうですね。二人乗りの自転車もあるみたいだし。その方が楽しいですね」

と同意してみせた。しかし、須美恵先輩はそれには応えなかった。そこへ武さんが、

「俺は水沢まで下って、うどんを食べたいな。水沢寺にお参りして鐘も突いてみたいし」

と年寄りじみた喋り方で言った。静枝が呆れたように、

「今昼食を食べたばかりなのに、まだ何か食べるつもりなの？」

「すぐに食べるんじゃないよ。小腹のすく3時か4時頃さ。軽く、スルスルツとうどんを食べるんだ。水沢うどんはうまいんだぜ。知らないのか？」

武さんは陽気に応えた。しかし、静枝はもう相手にはしていない。「とにかく、少し休んだら外に出よう。すぐに出発できるように、親戚の叔父に連絡しとくから」

と藤堂さんは立ち上がった。すると武さんがすかさず、

「一体どこへ行く気ですか、藤堂さん？俺はシンキ臭い神社には行く気はないし、馬フンまみれの馬車に乗るつもりもない。かと言って露天風呂に入るほど、ジジイを決め込みたくない」

とチャチャを入れた。皇さんがムツとして武さんを睨み、

「じゃあ、お前は一人でうどんでも何でも食べに行けばいいだろう

「！！　いつもそうだな。お前はそうやって他人の提案をけなすだけなすんだ」

と声を荒げた。武さんは全く動じていない。皇さんはなおも、「いくらヴァン・ダインのファンだからって、何もファイロ・ヴァンスのマネをして、高慢ちきな態度をとることはないだろう」

「そんなに熱くなるなよ、皇。バツカじゃないの」

武さんのその一言が、皇さんの理性のタガをブチ切ってしまった。「このヤロウ！」

皇さんは武さんのＴシャツを掴み、殴りかかった。

「やめろ、二人共！」

藤堂さんが間に入るのがあと少し遅かったら、皇さんの拳が武さんを捉えていたはずだ。

「争いごとは起こさないでくれ。何か問題を起こせば、ここは二度と使えなくなるんだぞ」

藤堂さんは武さんと皇さんを叱りつけるように大声で言った。武さんはフンと笑って、

「じゃ、俺は午後は部屋でフテ寝してますので。皆様方は、どこへなりとお出かけ下さいな」

と言い捨てると、ダイニングルームを出て行ってしまった。静枝が立ち上がって、

「待って、尊通さん！」

と追いかけようとすると、

「放っておきなよ、草薙さん。あんな奴、いない方がいいんだ」

皇さんが言った。静枝はその言葉に立ち止まり、皇さんをチラッと見たが、再び歩き出し、ダイニングルームを出て行った。

「皇さん、あの二人は放っておきましょうよ」

須美恵先輩が甘えたような声で言った。皇さんは彼女を見て、

「そ、そうだね」

と応え、椅子に座った。藤堂さんは腕組みをして、

「とにかく武の奴、ちょっと調子に乗り過ぎだな。まア、自分から

行動を共にするのを辞退してくれたのだから、奴のことは草薙さんに任せて、僕達だけで出かけよう」
と発言した。すると、皇さんと行子は複雑な表情をし、須美恵先輩はにこやかに頷いた。

第五章 殺人鬼の存在

8月31日 午後

2時

しばらくして私達は藤堂さんの叔父さんの運転するマイクロバスに乗り込み、まず最初に裕子先輩の希望を尊重して、榛名神社に向かった。

私達のいる保養所は湖の西側にあり、裏手を高崎榛名吾妻線が走っている。ここから榛名神社に行くには、一旦東に向かい、鋭角のカーブを曲がって登り上げて渋川松井田線に入り、再び下る。マイクロバスでこの道を走るのはこれで二度目。保養所に来た時通ったのだ。朝は何ともなかったのに、今は何やら酸っぱいものが込み上げて来そうになっている。

「神村さん、大丈夫？」

隣に座っている法子が、私の異変に気づいて声をかけてくれた。

私は作り笑いをして、

「大丈夫。ここで戻したら、死ぬほど恥ずかしいから、何とか堪えるわ」

と応えた。法子はニコツとして、

「無理しないでね。我慢できなかつたら、すぐにバスを停めてもらうから」

と言ってくれた。優しいなア。でもさ、正直な話、こないいい子に彼がいない方が不思議よね。どんな彼なんだろ？ 神社に着いたらそれとなく聞いてみるか。やつぱりやめとかなア…。

バスは神社の入り口にさしかかり、再び鋭角のカーブを曲がった。私は何とか気持ち悪さを堪えて、外に目をやった。

「ここからさらに登り上げるんだよな」

皇さんが言った。バスはしばらく走って、ついに「榛名神社」と彫られた大きな石塔のあるところに着いた。

「さっ、ここからは歩きだよ」

藤堂さんが立ち上がって一同に言った。私は何とか気持ち悪さを

抑え、法子と共に席を立ち、バスから降りた。

やっぱりだ。バスの恐怖から逃れたと思ったら、今度は坂道と階段の恐怖である。私は山門の脇にある神社の案内図を見ただけで、あまりの広さに足がすくんでしまった。

「ここまで来て、帰るなんて言わないでよ、神村さん」

と法子に言われ、私は仕方なく神社の本殿まで行くことにした。

階段を登ったり橋を渡ったりしながら、私達は奥へと進んだ。途中、七福神の像があったり、「ハケ ブラシノ塚」とかいう不思議な石碑もあったりした。

そんなこんなで、私達はようやく本殿に辿り着いた。もう、ヘトヘト（なのは私だけらしい……）。

「わア……」

裕子先輩は本殿と岩がまるで生き物のようからみ合っているのを見て、感動しているようだ。

「私、あまり信仰心はない方だけど、やっぱり神社の建築物って荘厳で神聖な感じがするわね」

「そうですね。よし、この本殿をバックに一枚写真を撮りましょう」

美砂江が使い捨てカメラを取り出した。彼女以外の者が本殿の前に並び、思い思いのポーズをとった。

「いきまアす！」

美砂江はそうかけ声をかけて、シャッターを押した。すると皇さんが、

「あつ、今の、カメラが動いちゃったよ」

と指摘した。美砂江はペロツと舌を出して、

「ハハハ、そうみたいですわね。皇さん、タッチ！」

とカメラを皇さんに放った。皇さんはそれを受け取って、

「まっかせなさアい。高校ではプロ並みと言われたこの皇 実が、皆さんを実物以上にきれいに写して上げましょう」

と言った。すかさず須美恵先輩が、

「あら、それだと私、どんなに美人に写るのかしら？」

と目をパチパチさせたので、皆ドツと笑ってしまった。

「記念に絵馬でも買おう」

藤堂さんが言い、巫女さんから絵馬を一つ買った。そして、

「みんなの名前を入れようか」

と巫女さんにサインペンを借りて来た。

「私一番！」

美砂江がサインペンを受け取り、絵馬に自分の名前を書いた。す

ると華子先輩が、

「藤堂さん、お互いに名前を書きっこしましょうよ」

と美砂江からペンを受け取って言った。藤堂さんは苦笑いをして、

「ああ、いいよ」

と応え、華子先輩の名前を書いた。すると華子先輩は、

「やだ、藤堂さん、私、『華子』ですよ。『樺子』じゃないですよ」

と抗議した。絵馬を覗いてみると、確かに、

「音 樺子」

となっている。藤堂さんは頭を搔いて、

「あつ、ごめん。木ヘンは余分だったか」

と「樺」の「木」をペンで塗りつぶした。華子先輩はそれでも嬉し

そうだ。よつぽど藤堂さんが好きなんだな。

「じゃ、次私ね」

と須美恵先輩がペンを取った。

やがて全員が名前を書き終わり、絵馬を奉納することになった。

「草薙さんと、武君の名前も入れましょうよ」

裕子先輩が提案した。皇さんは嫌そうな顔をしたが、他の人は誰も異義を唱えなかった。二人の名前も入れることになった。

「さてと。さつきみたいな恥をかかないようにしないとね」

と藤堂さんは言いながら、まずは武さんの名前を書いた。あれっ？

「藤堂さん、それ、違ってますよ」

皇さんが口をはさんだ。藤堂さんはハツとして、

「えっ、どこ？」

と尋ねた。皇さんは絵馬を指差して、

「ここですよ。武の『たけ』は、中が『止める』ですよ。それ、『上』になってますよ」

と答えた。藤堂さんは、

「ああ、そうだっけ。どうも漢字は苦手なんだよね」

と照れながら言った。私は藤堂さんの欠点がわかって、少し安心してしまった。何でだろ。すると法子が、

「もう一ヶ所違ってるわ」

と私に囁いた。私は法子を見て、

「えっ？ どこどこ？」

「武さんの名前の方よ。『尊通』の『通』の『甬』が、『角』になっているわ」

私は法子の指摘がなければ見過ごしていた。確かに「通」の字も違っていた。しかし、ここは漢字の書き取りテストの会場ではないので、藤堂さんに教えるのはやめにした。私、皇さんみたいにズケズケした性格じゃないもん。なァんてただ惚れた弱味かもね。わっ、自分で認めちゃった。

それから絵馬は無事奉納され、私達は榛名神社を後にして次に榛名富士に向かった。

榛名富士は、標高1391mの、あまり高い山ではないが、前述したとおりその形はまさにプリンである。

マイクロバスは馬車を追い越し、自転車をかわしながら、榛名富士の麓にあるロープウェイ乗り場を目指した。

乗り場に到着すると、華子先輩は実に嬉しそうにロープウェイに乗り込み、藤堂さんの隣をすっかりキープし、腕を組んだ。やるなァ。私には到底できないことだ。藤堂さんは迷惑そうだったが（決して私の思い込みではない）、その腕を振りほどくほどひどい人ではないので、そのままである。その時だ。藤堂さんは、華子先輩でも裕子先輩でもなく、法子をチラチラと見ていたのである。当

の法子は行子と窓の外を見ながら話しているので、藤堂さんの視線には気づいていないようだ。もちろん、華子先輩も気づいた様子はない。

「どうしたの、神村さん、ボンヤリして。また気分でも悪いの？」

法子に声をかけられて、私は妄想を破られた。そしてハツとして彼女に目を向け、

「ハハハ、べ、別に何でもないのよ」

と妙に焦りながら応えた。そして彼女の耳元に口を近づけて、

「藤堂さんが、貴女を見てるわよ」

「知ってるわ」

「えっ？」

法子は私に言われるまでもなく、藤堂さんの視線に気づいていた。彼女は外を見たままで、

「実はね、藤堂さんからは、何度かお手紙やお電話を頂いてるの」

「ええっ？」

私は小さいながら、驚きの声をあげてしまった。行子が私達のヒソヒソ話に気づき、

「どうしたんですか？」

と声をかけて来た。法子は微笑んで行子を見て、

「ごめんなさい、何でもないの」

と応えた。行子は納得していないようだったが、それ以上は何も言わなかった。

ロープウェイが山頂に着いた。街ではまだ残暑が厳しいのに、ここは別世界だった。頬に触れる風は、涼しいと言っより寒いくらいだ。

「さすがにここまで来ると、涼しいなア」

皇さんが言った。藤堂さんも周りに見えるたくさんの山々を眺めながら、

「そうだね。しかし、いい景色だな」

「ホントですねエ、藤堂さん」

華子先輩はニコニコしながら言った。腕は相変わらず藤堂さんと組んだままだ。すると美砂江が、

「ロープウェイって、密室になるから嫌いよ」

と吐き捨てるように言った。身震いまでしているから、相当嫌いなのだろう。

「そう言えば、ロープウェイ殺人事件であつたっけ？」

須美恵先輩が突拍子もないことを言い出した。華子先輩が、いい雰囲気壊された、という顔で、

「何よ、バカなこと言つて。他に考えることないの？」

と言り返した。須美恵先輩は、

「あら、推理小説を共同執筆している貴女に言われたくないわね」とさらに反論。すると藤堂さんが、

「へエ、君達、推理小説を書いてるの？」

と尋ねた。華子先輩は、「やった！」とガッツポーズをして、

「そうなんです。共同で構想を練つて、登場人物の設定や、事件の概要、トリック、伏線と、いろいろアイディアを出し合ってるんです。で、二人で執筆するので、『江羅利九陰（えらりくいん）』にでもしようかって」

「エラリー・クイーンをもじつたわけか。さすが、乱歩ファンだね」

藤堂さんが感心したように言つと、華子先輩は、

「やだ、私、横溝正史ファンですよ。須美恵と間違えないで下さいよ」

とむくれた。藤堂さんはバツが悪そうに笑つて、

「いや、ごめん」

と謝った。

「そう言えば、この当たり一帯で、連続殺人事件が起こつたって聞いたな」

と皇さんが口にした。須美恵先輩がすかさず、

「知ってます、それ。ワイドショーでやってましたよ。『湯の町の切り裂きジャック』ってリポーターが言っていましたね」

と言いつ添えた。藤堂さんも頷きながら、

「今度のこの旅行を榛名湖畔にしたのも、そのことを調べてみたいという理由もあつたからなんだ。事件の内容が、まるで推理小説みたいだからね」

と言つた。

私は「湯の町の切り裂きジャック」についてほとんど知識らしいものはなかったが、名前は聞いたことがあつた。そして今初めて、この辺りがその現場なのだということを知つた。何か、怖くなつて来たな。

その事件の概要は大体次のようなものである。もちろんこれは後で私が調べたのであるが。

榛名山麓から伊香保にかけて三件の殺人事件が発生した。そのどれもがまさに猟奇殺人というべきものであつた。

どの事件の被害者も首を斬られ、衣服を剥がされていたのだ。警察は異常者、怨恨など、様々な面から捜査を進めていたが、三つの殺人事件の被害者はどこから調べてもつながりがなく、犯行の動機にも一貫性がないように思われたし、殺害はされなかったが、犯人に追いかけられた人は数十人にも上り、通り魔殺人の方向へと絞り込まれている段階だということだ。しかし犯人の絞り込みには至つておらず、事件は迷宮入りのきざしさえあつた。

「なるほど。あの事件は、犯罪学的にも、刑事事件的にも、とても興味をそそられるものですかね」

皇さんが腕組みをして言つた。少々考え込んでいるようである。

「でも、警察はいないし、観光客も別にふだんと変わらないような感じで楽しそうにしてるじゃないですか。ホントにこの辺が、殺人事件があつた所なんですか？」

美砂江が疑問を投げかけた。すると藤堂さんが、

「叔父に聞いた話では、観光協会が、警察にあまり表立つて捜査を

したり観光客が不安がるような情報を流したりしないように要望したらいいんだ。まア、そればかりじゃなく、ここ何週間か事件が起こっていないせいもあるだろうけどね。だから、警察はいないし、観光客もふだんと変わらずってことなのさ」

「へエ。そういうことなんですか」

美砂江は妙に感心して言った。どうもこの子、人をバカにしたような言動が多いな。

「戸塚さん、元気ないわね？」

私は、行子がまたすっかり修行僧のように黙っているのに気づいて、声をかけた。行子は作り笑いを浮かべて、

「大丈夫。何でもないの」

と応えた。きつと静枝と武さんのことを心配しているのだろう。すると法子が、

「戸塚さん、何か知ってるのね？」

と尋ねた。行子はピクンとして法子を見た。法子は他の人達に聞こえないように行子に近づき、

「バスに乗る前に、何か見たの？」

「……」

法子は行子の前に回り込み、

「さっきから気になっていたんだけど、武さんと草薙さんの間で、何かあったのね？」

と重ねて尋ねた。すると行子はようやく頷いてうつむいた。法子はニコツとして、

「一体何があったの、戸塚さん？」

「その……」

行子は顔を上げた。しかし法子の顔を見ると、また下を向いてしまった。これじゃ静枝でなくても怒りたくなる。

「私も二人が言い争うのを見かけたのよ。それを貴女が見ていたのもね。だから気になって、貴女に話しかけていたの」

法子はまるで心理学者が話すように言った。行子は再び顔を上げ

て、

「静ちゃん、いつもと違ってホントに怒ってた。武さんと本気でケンカしていたの。私、怖くなっちゃって。でもどうすることもできなくて…」

と話し始めた。そこへ裕子先輩が近づいて来て、

「どうしたの？ 何かあったの？」

と尋ねた。法子は裕子先輩を見て、それから行子を見た。行子は法子に頷いてみせてから、

「裕子先輩、武さんと静ちゃんが、ケンカしてたんです。あの二人を放っておいたら、もっと大ゲンカになってしまいかも知れませんか」と話した。裕子先輩はびっくりしたようだ。

「そうなの？ でも、私、武君と草薙さんがそんなふうに話しているのを見てないわ」

「先輩達が外に出た後、ロビーで言い争っていたようです。私も窓の外からチラッと見かけただけで、何を言い争っていたのかはわからないんですけど」

と法子が答えると、裕子先輩は法子に目を転じて、

「戻った方が良さそうね」

「ええ。最初は放っておいた方がいいと思ったんですけど、戸塚さんがとても心配しているのだから」

と法子は行子を見た。

「どうしたの？」

皇さんも私達の妙な雰囲気気づき、近づいて来た。藤堂さんや華子先輩、須美恵先輩でもある。

「武君と草薙さんがケンカしていたらしいの。それを戸塚さんが心配して、放っておいたら、大ゲンカになるって…」

裕子先輩が説明すると、皇さんはムツとして、

「武の奴のことなんか、放っておけばいいじゃないか」と言い放った。しかし裕子先輩は、

「でも、武君はともかく草薙さんが心配だわ。あの子、結構カツと

なるタイプみたいだから」

と反論した。皇さんは腕組みして藤堂さんを見た。藤堂さんは行子に目をやり、

「二人は何を言い争っていたの？」

と尋ねた。行子は上目遣いで藤堂さんを見て、

「よくわからないんですけど、静ちゃんも武さんの態度を責めていたようでした。みんなと協調しなさいって……」

「そうか。武のことだ、きっとそれが面白くなって、草薙さんに言い返したんだろう。それで口論になったんだな」

藤堂さんが分析するように言った。皇さんは、

「武のことはどうでもいいけど、草薙さんが心配だな。戻りましょう、藤堂さん」

「そうだな」

皆に異存はなく、私達は保養所に戻ることにした。

第六章 口論の後 8月31日 午後 4時

私達が保養所に戻ったのは、それから何分か後のことであつた。日は西に傾き、夕暮れ時にさしかかつていた。とは言え、残暑を感じさせる太陽はまだ真夏を主張するかのようにギラギラと照りつけていた。

保養所に入ると、藤堂さんは皇さんに目配せしてすぐさま階段を駆け上がり、武さんの部屋に向かった。私達女性全員は裕子先輩を先頭に静枝の部屋へ赴いた。

「草薙さん、いるの？」

裕子先輩が、ドアをノックして声をかけた。するとドアが開き、泣きはらした顔の静枝が姿を見せた。

「あら、早かつたんですね。もう帰つて来たんですか？」

彼女は作り笑いをして言った。裕子先輩は、

「武君とケンカしたつて聞いたんだけど？」

と単刀直入に尋ねた。静枝は作り笑いを止めて真顔になり、

「あの人のことは、聞きたくないし、話したくありません。失礼します」

と言うと、ボタンとドアを閉じてしまった。

「……」

裕子先輩は私達の方を向いて、首を横に振った。

「そつとしておいた方がいいわね」

先輩はそう言い添えると、自分の部屋に戻って行つた。私達残されたメンバーもそれぞれの部屋に戻ることにした。しかし、行子は残るようだった。

「私、もう少ししたら、静ちゃんに声をかけてみます」

と彼女は言い、静枝の部屋のドアの前に立った。私は法子と顔を見合わせてから、自分の部屋に戻つた。

「あの二人、本当の親友なのかもね」

と法子が言った。そして、

「私もああいう関係の親友がほしいな」

と呟いた。私がいるよと言いたかったが、さすがに気が退けて言えなかった。

私は部屋に戻ると、ベッドに寝転がりボンヤリと天井を眺めて、物思いに耽っていた。

どれほどそうしていたのだろうか、私はドアをノックする音で我に返し、

「はい、どうぞ」

と応えた。ドアが開かれ、法子と行子が入って来た。

「ごめんね、神村さん。大丈夫？」

法子は私が眠っていたと思ったのか、尋ねて来た。私は精一杯の笑顔で、

「大丈夫。寝ていたんじゃないから」

「そう。ならいいけど」

法子はドアを閉じ、神妙な顔で私を見た。行子も同じだ。

「どうしたの、一体？」

私は少しドキドキして尋ねた。すると法子が、

「草薙さん、武さんに別れ話をされて、ケンカをしたらしいの」と答えた。

「えっ？ ホント？」

私は行子を見た。行子は頷いて、

「ホントよ。私が静ちゃんから直接聞いたの」

「何でまたそんなことに？」

と私が重ねて尋ねると、

「どうしてなのかまでは聞いてないからわからないけど、武さん、他に好きな子ができたらしいの」

と行子は言った。すると法子が、

「しかもその子、推理小説同好会のメンバーらしいのよ」

「ええっ!？」

私はまさか自分でことはないと思った。しかし、武さんが静枝をふつてまで好きになる女性って、一体誰なのかしら…。

「あっ!」

と私は行子を見た。武さんの「理想の女性は行子」という静枝の言葉を思い出したのだ。行子も私の視線に気づいたようで、

「あっ、私じゃないわ、たぶん。そんなことはありえないわよ」

とひどく恥ずかしそうに否定した。私は別の仮説を思いついた。そして、

「裕子先輩?」

と法子に言ってみた。しかし法子は首を横に振って、

「それはどうかしら。断定はできないわよ」

と応えた。うーん。じゃ一体誰なんだろう? あっ、まさか…。

「中津さん?」

私は法子を見て言ってみた。すると法子はクスクス笑い出して、

「そんなはずないでしょ」

とあっさり否定した。でも、私の中では、「法子説」が最有力のままだ。こんな可愛くて優しくて頭が切れる女の子を、武さんが見過ごすわけがないのだ。

「中津さんかも知れない」

行子が同意した。法子は微笑んだまま行子を見て、

「違うと思うわ。武さんて、私みたいな勝ち気な女は嫌いよ、きつと」

「中津さんは勝ち気な女じゃないわ」

行子は自説を曲げようとしなない。法子は苦笑いして、

「ありがとっ、戸塚さん」

と言った。ポニーテールに手が伸びた。法子が照れている証拠だ。彼女は話題を変えた。

「それより、草薙さんが心配なの。冷静にはなっただけけど、武さ

んと顔を合わせると、また爆発するかも知れないのよ」

「じゃあ、しばらく二人を会わせないようにしたら？」

私が提案すると、行子が、

「でもそれは難しいわ。大学のような広い場所ならともかく、ここでは無理よ」

と反対した。法子はあごに手を当てて考え込んでいたが、

「裕子先輩に相談してみましよう。それが一番いい方法だと思うわ」と言った。私と行子は同時に、

「そうね」

と応えた。

私達三人は、裕子先輩に会ったために部屋を出た。そこで藤堂さんと皇さんに会った。

「武さん、どうでした？」

法子が藤堂さんに尋ねた。藤堂さんは首を横に振って、

「ダメだよ。ここに戻ってからすぐと、さっきも声をかけたんだけど、返事もないし、ドアにはカギがかかったままだし。どうしようもないんだ」

と応えた。すると皇さんが、憤然として、

「だからあんな奴誘わなければ良かったんですよ。いつだって、問題を起こすんだから」

と藤堂さんに抗議するような調子で言った。藤堂さんはしかし、

「まア、そう言うなよ。ケンカの後で気が立っているから、一人になりたいだけかも知れないんだから。後で僕が話を聞いてみるよ」

と皇さんをなだめすかすように言った。皇さんは不満そうだったが、何も言わずに階段を降りて行ってしまった。藤堂さんは皇さんを見たままで、

「あの二人、仲が悪いわけじゃないんだが…」
と呟いた。

聞いた話だと、武さんと皇さんは静枝が現れるまでは親友とも言

えるくらいの仲だったらいい。同じ女を好きになっちゃおうと、友情さえ壊れてしまうのだろうか。

「じゃ、僕も失礼するね」

と藤堂さんは言って、階段を降りて行った。私達はそれを見届けてから裕子先輩の部屋に向かった。

「どうぞ」

法子のノックに応えて、裕子先輩の声がした。私達は目配せしてから、先輩の部屋に入った。

「どうしたの？」

裕子先輩は私達の深刻そうな顔を見て、ちょっとびっくりしたような感じで尋ねた。

「実は……」

と法子が話の内容をうまくまとめて説明した。裕子先輩はますます驚いて、

「そんなことになっていたの……」

と言い、しばらく黙り込んでしまった。考えてみれば、武さんが静枝以外の女性に気があるという情報は、かつて武さんとつき合っていたらしい裕子先輩にとって、とても複雑な心境にさせるものであったろう。

「とにかく、草薙さんの話だけでは、片手落ちね。武君にも話を聞いてみないと」

裕子先輩は口を開いて言った。法子は頷いて、

「そうですね。そうしましょう」

と同意した。私達は早速、武さんの部屋に行くことにした。しかし、確かカギがかかっているって藤堂さんが言ってたよな。大丈夫なのかな。ま、考えていても仕方ないから行動しようか。

「武君、いる？」

裕子先輩がノックしながら声をかけた。しかし、何の応答もない。
「いないのかしら？」

私が法子に言った時、ドアのカギが開く音がしてやがてドア自体が開き、武さんが顔を出した。

「何だ、裕子ちゃんか。何か用？」

彼は眠そうな顔をして尋ねて来た。裕子先輩は呆れ顔で、

「眠ってたの、武君？」

と尋ね返した。すると武さんは生あくびをして、

「ああ……。ちよつとね」

と応え、その時私達「金魚のフン」がいることに気づき、

「何だ、団体さんか」

「中に入れてくれない？ 廊下で話すようなことじゃないから」

「おいおい、穏やかじゃないな。何の話だい？」

「とにかく入るわよ」

裕子先輩は半ば強引にドアを開き、武さんを押し退けるようにして部屋の中に入った。法子、私、行子と続き、行子が後ろ手にドアを閉じた。

「きたないわね。少しは片付けなさいよ」

裕子先輩が言った。無理もない。まだここに来て一日も経っていないのに、部屋の中はベッドと言わず、テーブルと言わず、ところかまわず服が脱ぎ散らかしてある。下着まであった。私は思わず目のやり場に困り、下を向いた。

「まア、いいじゃないの。帰る時にはきれいにしてくからさ」

武さんは相変わらずノホホンとしていた。裕子先輩はキツとして、
「そついう問題じゃないでしょ」

とたしなめるように言った。武さんはペロツと舌を出したが、すぐ

さま、

「それより、何か話があったんじゃないの？」

と話題を切り替える作戦に出て来た。裕子先輩は、仕方ないわね、という顔で、

「そうね。それじゃあ、どこかに座らせていただけないかしら？」

「あつ、これは失礼」

武さんはニヤツとして、その辺に散らばっている服をかき集め、隅の方に放り投げた。そして、

「とりあえず、椅子とベッドには腰掛けられるようにしたぜ」

と言った。私達は呆れて、背もたれのない丸椅子に腰を下ろした。

武さんはニヤニヤしながらベッドに腰を下ろした。

「さてと。一体何の話かな？」

「草薙さんのことよ」

裕子先輩がそう言うのと、にやけていた武さんの顔が急に険しくなった。

「静枝のこと？ あいつから何か聞いたのか？」

「貴方、彼女に別れ話をしたんですって？」

裕子先輩の言い方には、いくらか怒りが込められているような気がした。武さんは、

「そんなこと、君らに関係ないだろう？」

と強い調子で言い返して来た。ふだんの武さんからは想像もつかないほどの重々しい声だった。

「関係なくないわ。貴方、同好会のメンバーの中に、好きな子ができたって聞いたわよ」

裕子先輩の声もさっきよりトーンが高い。すると武さんは、フツと笑って、

「何だ、裕子ちゃん、ヤキモチ妬いてるの？」

と言つてのけた。裕子先輩はムツとして、

「うぬばれないでよ。貴方とつき合っていたのは、もう過去の話よ」と言い返した。武さんはまたニヤニヤし始めて、

「なるほど、俺が静枝から今度誰に乗り換えるのか、それが知りた
いのか」

「そんなことじゃないの！ 私達が心配してるのは、草薙さんのこ
とよ」

裕子先輩はますます声を張り上げて言った。裕子先輩もこんなに
興奮することってあるんだ。

「彼女、どちらかと言うとカツとなりやすいタイプでしょう？　だ
からケンカになったんだと思うけど」

裕子先輩が確認するように話すと、武さんは、

「ケンカの原因については、静枝の奴、正確に話していないみたい
だな。原因は、俺が別れ話を切り出したからじゃないよ」

と意外なことを言い出した。裕子先輩は私達と顔を見合わせてから、
「じゃあ、何が原因なのよ？」

と訊いた。しかし武さんは、

「そのことについては、静枝が口にしていないのなら俺も話すべき
じゃないだろうから、言えないよ」

と答えただけだった。裕子先輩も、そう言われてしまっただけは、二の
句が継げない。

静枝が話していないのなら、話すべきではないって、一体どうい
うことだろう？　二人の間に何があったのだろうか？

「もしかして、静ちゃんの妊娠のことですか？」

行子が唐突に言った。裕子先輩と私はびっくりして行子を見た。

武さんも何で知ってるんだ、という顔で行子を見た。法子はごく冷
静に行子の爆弾発言を受け止めているようだ。

「そうなんですね」

と行子は言い、悲しそうにうつむいた。ようやく武さんが、

「言っとくけどな、行子ちゃん、俺じゃないぜ」

と言い逃れにしか聞こえないことを言った。当然裕子先輩の反応
は、

「貴方は草薙さんに何もしていないと言いたいのか？」

という問いだった。武さんはフフンと笑って、

「そうは言わないけどさ。でも俺じゃないよ。根拠はないんだけどな」

と答えた。すると行子は、

「静ちゃんも武さんのことがホントに好きなんです。そんな言い方しないで！ 静ちゃんが可哀想……」

と今までで一番大きな声を出した。これには武さんも驚いたようだ。「ヘエ、行子ちゃん、そんな大きな声も出せるんだ。びっくりしたな」

行子は武さんの言葉で耳まで赤くなり、下を向いてしまった。武さんは肩をすくめて、

「ここまで言えば、わかるだろ、裕子ちゃん。静枝は、責任を取ってくれて言つて来たんだよ。でも俺はそれに応じなかった。だからあいつ、切れちまったのさ」

「……」

裕子先輩は返す言葉もないほど呆れてしまったようだ。どうやら武さんの「無実」を全く信じていないらしい。

「信じてくれなくてもかまわないけど、俺だって身に覚えのないことを言われたって、はいそうですか、とは言えないよ」

と武さんは立ち上がった。そして全くの真顔のままで、

「悪いが、出て行ってくれないか。俺の言葉を信じられないのなら、ここにいられるのは不愉快だからね」

と言い添えた。

「わかったわ。失礼するわよ」

裕子先輩も憤然として言い返して立ち上がった。私達もそれに応じて立ち上がった。

「お帰りはこちらでございます、お嬢様方」

武さんは嫌味な笑みを浮かべて、ドアを開いた。裕子先輩は武さんを睨みつけてから、部屋を出た。私達もそれに続いて部屋を出た。

「草薙さんの話、びっくりしたわ。戸塚さんはいつ知ったの？」

裕子先輩は自分の部屋の前まで来た時、振り返って尋ねた。行子は裕子先輩を見て、

「昨日です。静ちゃん、私のアパートで吐いたんです」

行子の答えに、私はびっくりした。と言うことはつわりが始まっているってことか。

「静ちゃん、武さんに全てを話して、認めてもらって、結婚を考えてもらって…」

と行子は続けた。裕子先輩は頷いて、

「とにかく、草薙さんにもう一度話を聞いてみるしかないわね。武君の話、すぐには信じられないし」

「そうですね」

法子が応えた。すると行子が、

「私が静ちゃんに聞いてみます。そして、皆さんに改めて相談します」

「わかったわ。やっぱりそれがいいわね。お願いね、戸塚さん」

裕子先輩の言葉に行子はゆっくり頷き、静枝の部屋に向かった。

「私達は下のリビングで、コーヒーでも飲んで待ちましょうか」
「はい」

法子と私は裕子先輩に続いて階段を降りた。

夕食は6時過ぎ頃始まった。

ロビーにいた私達と外のテラスにいた皇さんが早くダイニングルームに着き、その後、藤堂さん、美砂江、華子・須美恵の両先輩が来た。

私達が席に着くと、次々に大皿に盛られたおいしそうな料理が出て来て、食べるのを我慢するのが辛いほどだった。しかし、20分たつても武さんも静枝も行子も降りて来なかった。

「先に食べましょうよ、藤堂さん。待っていたら、料理が冷えてしまいますよ」

皇さんがたまりかねて言った。藤堂さんは仕方なさそうに、「そうだね。先に頂こうか」

と応えた。それを合図に、私達は食事を始めた。

それからさらに20分ほどして、行子が降りて来た。

「どうだった？」

私が尋ねると行子は無言のまま首を横に振り、そのままキッチンの方に行ってしまった。

「だめだったようね」

法子が囁くように言った。私は黙って頷いた。

「武君、食べないつもりかしら？」

裕子先輩が心配そうに言った。しかし皇さんは、

「放っておけばいいのさ。ガキみたいな奴だな。メシを食わないでいれば、誰かが同情してくれると思っているんだろ」

「そういう言い方はないでしょう」

裕子先輩はまだ武さんのことが好きなのだろうか。もしそうだとすると、私には先輩の心がわからない。武さんのような人のどこが
いいのだろう？ 理解に苦しむ。

「あつ……」

そんなことを思っていると、トレイに料理を載せた行子がそくさとダイニングルームを通り抜けて行った。

「戸塚さんもここで食べるつもりないみたいね。二人分持っていたわ」

法子が言った。行子は静枝と二人で食事をするつもりなのか。どんな会話をかわすのだろうか。考えただけで気が重くなりそうだ。

「どうしちゃったんですか、武さんと草薙さんは……。ケン力はおさまったんですか？」

須美恵先輩が尋ねた。すると藤堂さんが、

「ケン力はおさまったらしいんだけどね。その後何があったのかは、僕は知らないんだ」

と答えた。皇さんが、

「どうせ痴話ゲン力だろうから、あまり心配しない方がいいよ」

「そうですかア……」

須美恵先輩は、あまり納得していない様子だ。今度は華子先輩が、
「そう言えば、裕子先輩、武さんと話をしたらいいですけど、ケン力の原因は何だったんですか？」

と尋ねた。裕子先輩はビクンとして手を休め、華子先輩を見た。

「大したことじゃないのよ。草薙さんが武君に、もつとみんなと協調しなさいって言ったら、武君がそれを拒否したので、草薙さんが大声で怒鳴ってそれで武君も怒鳴り返してっていう感じで」

「そんなことで夕食も食べないんですか？ ホントに二人共、子供みたいですね」

美砂江が呆れて口をはさんだ。武さんとはかく、静枝のプライバシーを守るために多少の嘘は仕方ないか。

「武と草薙さんのことは当人同士の問題だからあまり詮索するのはよそうよ。それより、夜は外出禁止だから、そのつもりでね」

と藤堂さんが言うのと、美砂江が目を見開いてびっくりし、

「どうしてですかア？」

と口をとがらせて尋ねた。藤堂さんは美砂江に目を向けて、

「例の殺人犯がまだこのあたりにいるらしいからなんだ。幸い、日中は姿を見せていないので、夜だけ警戒してくれって言われているんだ」

「それじゃ、これから寝るまで何して過ごすんですか？　つまらないア……」

美砂江はますます口をとがらせた。すると皇さんが、

「仕方ないさ。相手は狂える殺人鬼なんだよ、大和さん。夜道でバツタリ出会ったりしたら、大変だよ」

と口をはさんだ。

「その犯人は、決して狂える殺人鬼ではないと思いますよ」

ずっと黙っていた法子が口を開いた。皇さんは法子を見て、

「どうしてそんなことがわかるんだい、中津さん？」

と少々不機嫌そうに尋ねた。須美恵先輩も「愛しの皇様」に反論した生意気な後輩を睨んでいた。法子は皇さんを見て、

「犯人はすでに三人を殺し、数十人にケガを負わせ、それ以上の人数を追いかけているということです。それなのに誰一人として犯人の顔を見た人はいませんし、何も証拠を残していません。警察は通り魔殺人と考えているようですが、本当はそうではなくて、殺された三人には何らかのつながりがあるのではないかと思います」

「中津さん、貴女、推理小説の読み過ぎよ。いくら何でも現実の世界でそんなことが起こるわけがないでしょう」

と華子先輩は、まるで法子に言い聞かせるように言った。推理小説の読み過ぎはお互い様ではないだろうか。しかし法子は、

「犯人の目的は被害者の身元をわからなくすることです。衣服は下着まで脱がされていて、首と手首、あるいは腕まで切断されているのはその現れです。ただの通り魔がそこまでするとは思えません」
「なるほど。言われてみれば確かにそうだな」

藤堂さんが頷いて言った。華子先輩は藤堂さんが法子の肩を持つたのが面白くないらしく、キツと法子を睨みつけ、

「でもそれは推測でしかないわ。だって犯人は他に何人も殺そうと

しているのよ」

と反論した。法子は少し間を置いてから、

「私、事件のことが気になったので管理人さんに聞いてみたんです。管理人さんの話では、犯人に追いかけられた人で、ケガをした人はいずれも軽傷で、しかもそのうちの何人かは、ころんだり倒れたりしたのに、犯人が逃げに行ったということです。つまり犯人は殺すつもりなどなく、ただ単に無差別殺人を狙っている狂人と思わせるための芝居をしているのではないかと思われるんです」

華子先輩はちよつとひるんだようだ。皇さんはさすがに法子の指摘が的確なものだと気づいたのか、

「警察もそのことに気づいているの？」

とさつきとはうって変わって穏やかな表情で法子に尋ねた。法子は再び皇さんを見て、

「いえ。それは証言した人が悪いんですけど、犯人が逃げたことを話していないんです。『私は犯人に追いかけられました。でも顔は見えていません』。その程度の話しかしていないようです」

「なるほど。まア、警察としてみれば、軽傷の人が顔を見ていないと言えば、もうそれまでということとそれ以上突っ込んだ事情聴取はしないかも知れないな」

皇さんはまるで弁護士のような態度で話した。法子は頷いてから、
「警察は、榛名を中心にして山狩りをしたり、殺された人達の身元の確認に人員を割いているので、そんなに細かいことまで手が回らないというのが本当のところでしょうね」

皇さんも大きく頷いて、

「そうだなア。日本人にはあまりにも事なかれ主義者が多いよ。自分の証言の重大性を全く認識していない連中が、ロクな証言をしなから、犯人が逃げおおせてしまうケースだってあるのだから」

と言った。藤堂さんは腕組みをして、

「とにかく、外に出かけるのは控えてくれないか。何かあつてからでは取り返しがつかないことになりかねないから」

「でも通り魔じゃないって中津さんが言ってるんだから、大丈夫なんじゃないですか？ 事件も最近は起こっていないみたいだし…」
美砂江が皮肉を込めて言った。彼女はニヤリとして法子を見た。
でも法子は、

「通り魔的犯行ではないかも知れませんが、犯人の動機がはっきりしていない以上私達は安全だとは断言できませんよ」

「はい、もうその話はそこまでにして！ そろそろ解散しませんか？」

裕子先輩が口をはさんだ。皇さんが、

「そうだね。もう8時になるし、そろそろ部屋に戻って自由行動にしましょうよ、藤堂さん」

「そうするか。しかし、くれぐれも外出はしないようにね」

と藤堂さんが重ねて言うのと、美砂江がうんざりした顔で、

「わかりました。どこにも行きませんよ」

と応えた。

しばらくして私達は各自の部屋に戻った。結局静枝と武さんはダイニングルームに姿を現さなかった。

「武君の分、持って行くわ」

優しい裕子先輩は、トレイに武さんの分の食事を載せて、階段を上がって行った。

「裕子先輩、今回この旅行に参加したワケ、武さんとヨリを戻すためだっという噂、ホントかもね」

須美恵先輩がニヤニヤして言った。華子先輩も、

「そのようね」

と嬉しそうに同意した。そして私を見て、

「神村さんは、どう思う？」

といきなり尋ねて来た。

「えっ？ 私ですか？」

と私がオタオタしていると、法子が、

「神村さん、面白い本があるんだけど、読む？」

と法子が私の腕を引いて階段を上がり始めた。私はホッとして法子に目をやり、

「うん、読むわ」

と法子について階段が上がった。華子先輩が背後で毒づいているのは見なくてもわかったが、今は知らんふりをするのがベストだ。

「ありがとう、中津さん」

私は小声で法子に礼を言った。法子は私を見下ろして、

「どういたしまして」

と微笑んで応えた。

私はその夜ずっと法子の部屋にいて、話をしたり本を読んだりして過ごした。そして自分の部屋に戻るのが面倒臭くなり（決して怖かったのではない）、彼女と一緒に一つのベッドで寝させてもらった。

彼女の寝顔はドキドキするくらい可愛らしく、寝息はホントにかすかに聞こえる程度であった。そして長いまっげが月明かりに照らされて、何とも言えない美しさを放っていた。私はそんな彼女の顔に見とれているうちに、いつの間にか眠りに落ちていた。

「うん？」

朝の日ざしが顔に当たるのを感じて私は目を覚ました。もう少しでベッドから転げ落ちそうになっているのに気づき、ハツとして身を起こした。気がつくとなつてはすでに起きており、バスルームの洗面台の前で髪をとかしているのがチラツと見えた。

「お目覚め？」

彼女はニツコリ微笑んでバスルームから出て来た。私はクシャクシャになった髪をサツサツと手ぐしで直して、

「う、うん。ちょっとお手洗い、借りるね」

とバスルームに飛び込んだ。

「フーッ」

昨日の朝はもっと早く起きていたので、今日は8時に起きてもう眠くはない。

「あら、藤堂さんと皇さん、ゴルフに出かけるみたいね」

私は窓の外に目をやって法子に言った。法子は私を見て、

「いえ、違いわ。今戻って来たところよ。朝食前に軽く打ちっ放しに行っていたのよ」

と応えた。夜型人間の私はすっかりびっくりして、

「えっ、もう行って来たの？ 何時に出かけたのかしら？」

「6時くらいよ。話し声がしたので、気づいたの」

法子は何でも知っている。まるでポアロの名セリフみたいだ。

「そうなの」

私は窓から離れて、ベッドに腰を下ろした。そしてちよつと恥ずかしかったが、

「ねエ、夕べ私、寝相悪かったでしょ？」

と尋ねてみた。すると法子はクスクス笑いながら、

「別に気にしない方がいいわよ。私達、友達でしょ？」

「あつ、その言い方、私、すごかったんだ？」

私は目をウルウルさせて言った。法子はますますおかしそうに笑いながら、

「女同士なんだもの、気にしないでいいんじゃない？ 私だって寝相悪いんだから」

「ウツソオツ！ 中津さんなんて、死んだように静かに眠ってたよ」

私がハイテンションな声で言うと、法子は、

「ねエ、その『中津さん』ていうの、やめにしない？」

「えっ？」

それは私も思っていたことだった。でもなかなか口に出せなかったのだ。法子はまたニツコリして、

「法子でいいわよ」

と言ってくれた。私もそれを聞いてホッとした。そして、

「じゃ、私も律子でいいよ」

と言った。私達はお互いにニツコリした。

「もう朝食の用意ができてるわ。階下へ行きましよ、律子」

法子が言ったので、私はベッドから立ち上がって、

「そうね、法子」

と応じた。そして私達は部屋を出て、ダイニングルームに向かった。

私達が階段を降り切ったところへ、藤堂さんと皇さんが外から入

つて来た。

「藤堂さん、ホントにいいんですか？」

皇さんが尋ねた。藤堂さんはさわやかな笑顔で頷いて、

「仕方ないよ。お気に入りだったけどさ」

と応えた。何の話かな。私は興味が湧いたので、

「おはようございます。どうしたんですか？」

と口をはさんだ。すると皇さんが、

「やア、おはよう。実はさ、藤堂さんがお気に入りのアイアンを折っちゃったんだよ。それで、持っている気が滅入るからって練習場に処分してくれるように頼んで来たんだ。もったいないだろう？」

「

と応えてくれた。私は藤堂さんに尋ねたのに。

「もういいよ、その話は」

藤堂さんが言った。そして、

「おはよう、中津さん。夕べはよく眠れた？」

と法子に声をかけて来た。ああ、やっぱり藤堂さん、法子に気があるのか。ま、華子先輩だとシャクにさわるけど、法子なら諦めがつかない。

「はい、おかげさまで。殺人鬼はここには来なかったみたいですね」

法子はニツコリして応えた。

「ハハハ」

藤堂さんと皇さんは顔を見合わせて笑い、ダイニングルームの方へ歩いて行った。

「さっ、私達も行きましょう」

私は法子を促した。しかし、彼女は階段の上に目を向けて、

「どうしたのかしら、戸塚さんと裕子先輩……」

と呟いた。私も階段の上に目をやった。そこには不安そうな行子と裕子先輩が立っていた。二人は何か話をしているらしい。行子が時々静枝の部屋の方に目をやりながら、裕子先輩に説明しているようだ。先輩はしきりに頷きながら、聞き返している。

「何かあつたんですか？」

私はちよつと大きめの声で階下から二人に呼びかけた。二人は同時に私に目を向け、階段を降りて来た。

「静ちゃんが部屋にいないの」

行子が泣き出しそうな顔で言った。この娘、ちょい心配症だな。私は、

「ダイニングルームにいるんじゃないの？」

と言ってみた。しかし、裕子先輩が首を横に振りながら、

「いいえ、ダイニングルームにはいないわ。保養所の中はほとんど探したそうよ。昨日の話を思い出して、戸塚さん、ひどく心配して……」

とあつさり否定した。行子はさらに、

「念のために他の人の部屋にいるかも知れないと思って声をかけてみたんだけど、どこにも……」

と口籠つてしまった。裕子先輩はそんな行子を気遣いながら、

「武君の部屋だけは、確認していないんだけど」

「なアんだ、じゃあ二人は仲直りして熱い夜を過ごしたんじゃないですか？」

私がそう言つと、裕子先輩は私を見て、

「それも考えられないのよ。大和さんが偶然階段のところで草薙さんとすれ違っているの。草薙さん、ひどく慌てた様子で階段を駆け降りて行つたらしわ」

「大和さんは草薙さんがどこへ行つたのか、知らないんですか？」

法子が口をはさんだ。行子が首を横に振り、

「ええ。大和さんは、すぐに部屋に入ってしまったので、静ちゃんが階段を降りて行くのを見ただけなの」

と答えた。裕子先輩は、玄関の扉を見て、

「外に行つたのかも知れないわね」

「その可能性はありますね」

法子が同意した。

「武さんが何か知ってるんじゃないかしら」

と私が言うと、裕子先輩が頷いて、

「私もそう思ったのだけど、武君たらいくら声をかけても返事もしないのよ。まだ寝ているのかしら？」

と呆れ気味に言った。そしてフツと溜息をついて、

「とにかく藤堂さんに話して、草薙さんのこと探さないかね。普通の身体じゃないんだし」

裕子先輩の言葉に、私はハツとした。そうだ、静枝は妊娠しているんだ。

裕子先輩は私達に目配せして、ダイニングルームの方へ歩いて行った。

「夕べは、いつ頃まで草薙さんと一緒だったの？」

法子が行子に尋ねた。行子は法子を見て、

「夕食を一緒に食べて、食器をキッチンに運んでから静ちゃんの部屋に戻ったら、『一人にして』って言われて、部屋を出たの。9時頃だったんじゃないかしら」

と答えた。法子は頷いてから、

「その時、草薙さんの様子、変じゃなかった？」

「変て言うほどじゃないけど、何か沈んだ感じだったわ。私、だから余計心配なの。思いつめて、自殺なんて考えているんじゃないかって……」

行子はまた涙声になった。私が肩をすくめて、

「草薙さんて、自殺するようなタイプじゃないと思うけど」

と口をはさむと、行子はムツとして私を睨み、

「神村さん、静ちゃんのこと、何も知らないのにそんなこと言わないで！」

と言った。私は、しまった、と思い、

「う、ごめんなさい、不謹慎だったわ」と謝った。

「草薙さんが、いないんだって？」

藤堂さんより先に皇さんが現れた。藤堂さんはその後ろから裕子先輩と話しながらやって来た。法子が、

「ええ。皇さんは、草薙さんを見かけていないんですか？」

「ああ、見かけていないよ。と言うより、俺と藤堂さんはまだ薄暗いうちに保養所を出たから、見かけてもわからなかったのかも知れないけどね」

皇さんは心配そうだ。静枝に気があるのはまず間違いないな。

「とにかく、みんなで手分けして探そう。中にはいないみたいだから、外だね」

藤堂さんが言った。裕子先輩は作り笑いをして、

「案外、ただフラッと散歩に出かけただけでも知れないけどね」

と言ったが、静枝と武さんのケンカの原因を知っている私と法子や、全ての事情を知っている行子には気休めにはならなかった。

しばらくして、美砂江、そして華子、須美恵の両先輩もロビーにやって来て、静枝がいないことを聞き、全員で（但し武さんはいないが）探すことにした。

「どこに行ったのかしら？」

華子先輩は迷惑そうな顔で言った。須美恵先輩が、

「昨日武さんとケンカしてフtekされて、一人でブラブラ外を歩いてるんじゃないの？ 放っておけばいいって気もするなア」

と言つてのけた。すると裕子先輩が、

「そんなこと言うもんじゃないわ、吾妻さん。同好会の仲間でしょ」

「はいはい」

須美恵先輩は、さも申し訳なさそうに言いながら肩をすくめ、裕子先輩が背を向けるとペロツと舌を出した。何て人だ、全く。

「草薙さんを最後に見かけたのは、大和さんだったよね。何か気づいたことはないかな？」

藤堂さんが、美砂江に尋ねた。しかし美砂江は首を横に振って、
「いいえ、別に。ちよつと慌ててるなっと思っただけで、他には何

も……」

「そうか……」

私達は保養所の敷地を出て、付近の林や湖の周りを探すことにした。

皇さんを中心に、裕子先輩、華子先輩、須美恵先輩。そして藤堂さんを中心に、美砂江、法子、行子、私。皇さん達は林の方を、藤堂さんと私達は湖の周りを探すことになった。

私達はほどなく湖のほとりに出て辺りを見回し、静枝を探した。しかしそれらしき姿は、視界には入らなかった。

「こつちの方を探してみよう」

藤堂さんは、湖の北に向かって歩き出し、私達もそれに続いた。
「いないみたいね」

美砂江はその大きな目をキョロキョロさせて周りを見ながらそう言った。その時法子が、

「あつ、あそこに人が倒れてます！」

と叫んだ。藤堂さんもすぐに法子が見つけた人物に気づき、

「ホントだ。行ってみよう」

と駆け出した。法子がそれに続いた。私と行子、そして美砂江も歩を速めた。そこは、周りに何もない腐りかけた栈橋のそばだった。栈橋に近づくにつれて、倒れている人が静枝だとはつきりわかった。行子は顔面蒼白で今にも倒れそうだった。

「こんな人気のないところで、一体……」

と法子が呟いて静枝に近づくと、藤堂さんが、法子を手で制して、
「中津さん、医者を呼んでくれないか。できれば、救急車を呼んでもらえるともっとありがたい」

と言い、静枝に近づいた。行子は藤堂さんの後ろからついて行き、ジッと静枝の様子を見ている。藤堂さんは静枝の手首に手を当て、
「大丈夫だ。気を失っているだけだ」

と私達の方を見て言った。行子はホッとしたのか、少し微笑んだ。

法子が、

「さっ、行きましよ」

と私と美砂江を促して立ち去ろうとした時、藤堂さんが、
「待ってくれ！」

と大声を出した。私達はびっくりして藤堂さんを見た。彼は棧橋の方を指差して、

「あれ、人間の足じゃないか？」

と問いかけたのか、同意を求めたのかわからないような感じで言った。

「えっ？」

私達も棧橋に目をやった。改めて見てみると、棧橋の先端に人間の足のようなものが見えているような気がした。

「あれは……」

法子はスツと棧橋のすぐそばまで駆け寄り、その足を間近に見た。そして彼女は深呼吸してから、

「人間の、それも男の人の足のようですね。しかも死んでいます」

「ええっ!？」

私と美砂江は顔を見合わせた。法子は藤堂さんを見て、

「救急車の他に、警察も呼ばないといけませんね」

「ああ、頼む。僕はここに残って人が寄って来ないようにするよ」

「お願いします」

法子は私を見た。私はもう、死体があると聞いただけで歯の根も合わないほど震えて、

「わ、私、当分動けそうにないから、ここで待ってるわ」

とやっと口に出して言った。法子は私の肩に手をかけて、

「わかったわ。すぐに戻るから」

と言うと、これまた半分失神寸前の美砂江の手を引いて、保養所の方へ走って行った。

（静枝が無事見つかったのに死体を発見しちゃうなんて、なーんてアンラッキーなんだろう、私ってば）

などと我が身の不幸を呪ったりした。

「静ちゃん……」

行子は静枝のことで頭がいっぱいなのか、全然怯えた様子 wasn't なかった。

第十章 湯の町の切り裂きジャック 9月 1日 午前 9時

それからしばらくして、町のおまわりさんがやって来て死体を検分した。どうやら死体はそのほとんどが湖水に浸かっているらしく、おまわりさんは死体を湖から引き上げた。

「わアッ！！」

おまわりさんとは思えない、すごい叫び声が聞こえたのはその直後だった。

「く、首がない！」

「ええっ！？」

私はやっと法子に手を貸してもらって歩き始めたところだったのに、またとんでもないことを聞いて腰が抜けてしまった。

「こ、こいつは、あいつの手口、あいつの犯行だア！」

おまわりさんは大声で言い、パトカーへ走って行った。

一方静枝は、救急隊員が駆けつけた時には意識を回復しており、受け答えもできるようになっていたので、もう大丈夫と言われているところだった。

「た、尊通さん……」

と彼女は呟き、再び気を失ってしまったのだ。法子は私から離れ、死体にまた近づいた。ゲツ。何て娘なのかしら……。

「衣服は何も身に着けていない……。首が斬られている……。ホントに湯の町の切り裂きジャックが……」

「うひゃー！！　そこまで見てるの！？　し、信じられないよオ。」

「君、近づいちゃいかん！　現場が荒らされてしまう！」

戻って来たおまわりさんが、興奮気味に注意した。しかし法子は、もう荒らされていますよ、ほら」

と棧橋を指差した。（私は死体を視界に入れないようにして法子を見ているのだ！）

「えっ？」

おまわりさんはキョトンとして法子に近づき、棧橋を見た。

「ああつ、これは…」

「犯人が湖水をかけて棧橋の泥をすっかり洗い流してしまったようです。ここに残っている足跡はおまわりさんのものと、あと草薙さんのものしかありません」

「草薙さん？」

おまわりさんは再びキョトンとして法子を見た。法子は気を失っている静枝に目を向けて、

「その娘です」

と答えた。おまわりさんは救急隊員に支えられている静枝に近づいた。

「どうですか？」

おまわりさんは、救急隊員に尋ねた。隊員は、

「脈拍も呼吸も心配するような状態ではないので、我々はこのまま引き上げます」

「わかりました。御苦労さまです」

「いえ、お互い様ですよ」

救急車はサイレンも鳴らさず赤色灯も消して、静かに走り去った。

「君達、大学生だそうだね？」

おまわりさんは藤堂さんを見て言った。藤堂さんは頷いて、

「はい。湖のそばにある、大学の保養所に来ているんです」
「なるほど」

おまわりさんは再び死体に目をやり、

「とにかく一旦保養所に戻って、本署の人間が行くまで待っていてくれたまえ。事情聴取をするから」

と藤堂さんを見ないで言った。藤堂さんは法子と顔を見合わせてから、

「はア、わかりました」

と答えた。

私達は保養所に戻った。その途中で、法子はこんなことを私に言った。

「何故草薙さんはあんなところに行ったのかしら？　そして何故、気を失ったのかしら？」

「うーん。何故行っただのかはわからないけど、気を失ったのは死体を見たからじゃないの？」

私は死体のことを思い出して、ゾツとしながら答えた。しかし法子は、

「でも、死体を見ただけで気を失うかしら？」

「気の弱い人は、気を失うんじゃないの？」

「そうね。でも、草薙さんは栈橋を渡って、死体のすぐそばまで行っているのよ」

「そこで初めて死体に気がついたんじゃないの？」

と私が言くと、法子は首を横に振って、

「いいえ、もしそこで初めて死体に気がついたのなら、栈橋の上で倒れているはずよ。でも、彼女は栈橋の手前で倒れていたわ」

「そうだね。どういうことかな？」

私は腕組みをして考えた。

私達が保養所に戻り、遅い朝食にありつこうとダイニングルームの方へ行った時、裕子先輩が蒼ざめた顔で私達を出迎えた。

「武君がどこにもいないの…」

「えっ？」

裕子先輩はすっかり涙声になっていた。

「部屋にいるのかと思って気にかけていなかったのだけれど、いくら声をかけても応えがないので、マスターキーを借りて来て中に入ったのよ。でも、中には誰もいなかったわ。バスルームのドアが開いていてバスタブにはすっかり冷めたお湯が張られたままで…」

「まさか…」

私は思わずそう口にした。あの栈橋の死体、武さんなの…？　そ

んな…。

「そうしたら、湖の方で男の人の死体が発見されたという話を聞いて、びっくりして…」

裕子先輩はホントに悲しそうだ。やっぱり武さんのこと、まだ好きなんだ。

「何か手がかりがないか、部屋を探してみしよう」と法子が提案した。裕子先輩は小さく頷いた。

私達三人は、他の人達に気づかれないようにそっとダイニングルームを出た。ロビーのソファには静枝が横になっており、そのそばに行子が座っていたが、二人に気づかれる心配はなかった。私達は階段を上がり、武さんの部屋に行った。

「カギはかかってないわ」

裕子先輩はドアノブに手をかけようとした法子が振り向いたので、そう応えた。法子は頷いてノブを回し、ドアを開いて中に入った。

裕子先輩がその後に続き、私は外を窺いながらドアを静かに閉じた。「昨日とほとんど変わっていませんね」

法子は部屋を見回して言った。確かに昨日この部屋に入った時と同じように、衣服があたりに脱ぎ散らかされており、荷物も雑然と置かれていた。

「この服、昨日武さんが着ていたものですよな？」

法子はドアの開けられたままのバスルームの前に脱ぎ捨てられているジーンパンとＴシャツに近づいた。裕子先輩もそれを見て、

「ええ、そうね。下着まで一緒に脱いであるわ」

と言った。なるほど、ジーンパンと一緒に、トランクスが脱がれている。武さん、横着な人なんだな。

「ということは、お風呂に入った、あるいは入ろうとしていた…」

法子はバスルームに入って行った。私と裕子先輩もそれに続いた。「バスタオルがなくなっていますね。でも石鹸は使っていない…。カミソリは使ったみたい…」

法子はバスルームのあちこちを見て回り、最後に湯加減まで調べ

た。

「まだ冷たいというほどではない。鏡は曇っていないし、部屋の方へ湯気が出た形跡はないようだから、このバスルームのドアが開けられたのは、湯気もほとんど出なくなつた頃ですね」

「私がこの部屋に入つたのは、草薙さんを探しに行つて、貴女達が戻つて来るまでの間だから、9時30分頃かしら。その時もバスルームの鏡は曇っていなかったわよ」

裕子先輩がそう言うのと、法子はハンカチで手を拭きながら、

「でしょうね。武さんがお風呂に入ろうとしてバスタブにお湯を入れ、服を脱いでバスルームに入り、お湯がたまるまでひげをそつていた。逆かな？ ひげをそつてからお湯をため始めた」

「ええ……」

裕子先輩は何とも言えない悲しそうな表情でバスタブを見つめていたが、

「二人は私が武君とつき合つていたこと、知っているようだから話すんだけど、私、この旅行に参加したのは彼の本心を知るためだったの。彼は、口は悪いけどホントはとても寂しがりで、強がつていただけなのよ。だから中津さんに水が怖いことを指摘された時、とても狼狽えたんだと思うの。いえ、そう思いたいのかな。私、まだ彼が好きなのね、きつと……」

と話してくれた。裕子先輩のきれいな瞳からポロポロと涙がこぼれ落ち始めた。私はハツとして、

「どうぞ、先輩」

とハンカチを差し出した。しかし裕子先輩はそれを右手で制して自分のハンカチを出し、涙を拭つた。そしてニコツとして、

「ごめんなさいね。涙なんかこぼして、バカみたいよね」

と言い添えた。法子もニコツとして、

「とんでもない。人間は感情豊かな動物なのですから、それを抑制するようない方はいい方いいんです。泣きたい時は泣いて、笑いたい時は笑う。それでいいと思います」

「ありがとう」

裕子先輩はそう言ってから、大きく深呼吸をして目をつぶって心を落ち着けようとした。そして再び目を開いて、

「武君、どこに行ったのかしら？」

と法子に尋ねた。法子はバスルームを見回し、

「この状態だと、武さんは何も身に着けていないか、バスタオルを巻いているだけのどちらかですね。昨日着ていた服は床にありますし、他の服もバッグやベッドの上にあるようですから」

と応えた。私はまたギクツとした。あの死体、確か何も身に着けていなかったはず……。当然法子もそのことは覚えているはずだ。

「これ、夕食の残りですね」

法子はテーブルに置かれたトレイに目をやり、近づいた。裕子先輩もテーブルに近づき、

「ええ、そうね」

とトレイを覗き込んだ。トレイの上には食器がいくつかと、ナイフとフォーク、それにスプーンが載っていたが、スープの残りが少しあるだけで、武さんは夕食をきれいにたいらげたようだった。

「先輩が食事を運んだ時は、武さんはドアを開けてくれたんですか？」

法子は先輩を見た。先輩はトレイを見たままで、

「ええ。ムスツとしているかと思ったら、意外にケロッツとしていて嬉しそうにトレイを受け取ったわ。私、部屋に入るように勧められたんだけど、遠慮しといたの」

「ということは、その頃すでに武さんは別に怒ってはいなかったのですね？」

「と思うわ。ただ、草薙さんと顔を合わせるのは気が退けたのかも知れないけど」

「そうですね」

法子は腕組みをして考え込んだ。そして、

「先輩、実は湖のほとりで発見された男性の死体、何も身に着けて

「いなかったんです」

「えっ？」

裕子先輩はピクンと身を動かし、法子を見た。しばらく沈黙の時間が流れた。

「そ、それ、どういう意味？」

先輩がやつと口に出した言葉に、法子は実に慎重な顔をして、

「今言った通りです。もしかすると、その死体が武さんかも知れません」

「そ、そんな……。だって……」

先輩は蒼い顔で法子を見て、唇を震わせた。法子は部屋を見回して、

「断定はできません。でも、武さんの姿が見えなくなったこと、そしてこの不自然きわまりない部屋の様子。何かあったと考える方が正しいと思います」

と裕子先輩に目を向けた。先輩は硬直してしまったかのように動きを止めてしまい、しばらく何も言わなかった。

「ここだったの。もう朝食の用意、できたわよ」

美砂江がドアを開いて顔を出した。法子は彼女を見て、

「わかりました。すぐ行きます」

と応えた。美砂江は不審そうに部屋の中を見回してから廊下を歩いて行った。

「とにかく食事にしましょう。武さんのことは、その後で藤堂さん達に話すことにして」

と法子は提案した。裕子先輩は黙って頷いた。しかし、私達の朝食は結局昼食と一緒にってしまった。階下に降りて行くと、さっきのおまわりさんと私服の刑事らしき人が二人、ロビーに立っていたのである。

第十一章 事情聴取 9月 1日 午前10時

「これで全員ですか？」

二人の私服刑事のうちの年配の方が人が、私達を見渡して言った。
すると藤堂さんが、

「いえ、武という者がいません」

と答えた。年配の刑事は「フム」と頷き、

「わかりました。それで、棧橋で死体を発見したのはどなたですか？」

「私と、彼女達です」

藤堂さんは、法子、行子、美砂江、そして私というふうに視線を移した。

「かけてお話を伺いましょうか」

刑事さんはソファに目をやってそう言った。そして、

「失礼、自己紹介が遅れましたね。私、高崎警察署刑事第一課の北野です。それからこの男は、同じく田島です」

「よろしく」

二人の刑事さんはそう名乗ると、ソファに向かって歩き出した。

私達は互いに顔を見合わせてから、ソファに向かった。

刑事さんの座ったソファの向かいに、右から美砂江、藤堂さん、法子が座り、私と行子は一人がけに座った。他の先輩方は、それを囲むようにして立ち、静枝は壁に寄りかかるようにして立っていた。
「それでは死体発見までの経緯を話していただきましょうか」

北野さんが話を促した。私達は顔を見合わせた。藤堂さんが頷き、話し始めた。

北野さんは静枝が棧橋のそばで倒れていたというところまで話が進んだ時、私達を見回して、

「草薙さんはどなたですか？」

と尋ねた。静枝がビクツとして北野さんを見たので、彼はニコツと

して、

「ああ、貴女ですか。ちょっとお尋ねしたいことがあるのですが」

「は、はい……」

静枝はガチガチに緊張しているようだ。汗がジットリと額に吹き出しているのが見て取れた。藤堂さんと法子が立ち上がり、美砂江と行子に付き添われるようにして静枝は北野さんの前に座った。

「何故貴女は、あの場所、つまり棧橋のあるところへ行ったのですか？」

北野さんが穏やかに尋ねた。静枝はうつむいて、

「そ、それは……」

と言ったとき、口籠ってしまった。すると田島さんが、

「言えないんですか？」

と尋ねた。というより「言え！」と強制しているように私には聞こえた。しかし、静枝は何も喋ろうとしない。私は彼女が震えているのに気づいた。当然二人の刑事さんもそれに気づいていた。

「どうしたんですか？」

北野さんが優しく尋ねた。静枝はゆっくりと北野さんに顔を向けて、

「私、尊通さんに呼び出されたんです」

と口を開いた。えっ？ 武さんに呼び出された？ 北野さんは眉を

釣り上げ、

「タカミチさん？ 誰ですか？」

「私達と一緒にここに来た男性です」

代わりに裕子先輩が答えた。北野さんはチラッと裕子先輩を見てから、

「なるほど。で、そのタカミチさんは、どなたですか？」

「その人が、今ここにいない武さんなんです」

今度は法子が口をはさんだ。北野さんは、

「ほオ。その武君は、一体どこにいるんですか？」

と法子を見て尋ねた。法子は北野さんを真正面から見据えて、

「それがどこにもいないんです。保養所のどこにも…」

と答えた。北野さんは訝しげに眉を寄せて、

「どこにもいない？ 外に行ったのではないですか？ こちらの草薙さんと会ったために」

「だとしたら、武さんはバスタオル一枚で外に行ったことになりま
す」

法子はまた北野さんを見つめて言った。北野さんは法子の言おう
としていることがよくわからないらしく、

「どういうことですか？」

とやや問いつめるような口調で尋ねた。法子はさつき武さんの部屋
を見て来た時のことを、北野さんに、いや、そこにいる一同に話し
た。

「なるほどね…」

北野さんは合点がいったという顔をしたが、私と裕子先輩を除い
た人達はすっかり驚いていた。

「確かにそれは妙ですね。事件と何か関係があるかも知れない」

北野さんが言うと、静枝が突然、

「関係があるなんて、そんなものじゃないんです！！」

と大声で言った。彼女は涙を流して、ガタガタと震えていた。田島
さんが、

「それはどういう意味ですか？」

「……」

静枝はまた黙ってしまった。行子が、

「静ちゃん、何かあったの？」

と顔を覗き込むようにして尋ねた。静枝は行子の顔を見てから北野
さんを見、

「あの死体、尊通さんなんです！」

とほとんど叫び声に近いような声で言うとワァッと泣き出し、ソフ
アに顔を埋めてしまった。私はさすがにびっくりして法子を見た。
彼女が言っていたことが、現実になってしまったのだ。法子は少し

は驚いているようだったが、周りの人に比べればかなり落ち着いていた。

「武の死体だって!？」

皇さんが大声で言った。藤堂さんは驚きで声もない。裕子先輩は唇を震わせ、華子先輩と須美恵先輩は顔を見合わせたまま。行子は何が起こったのかわからないような顔で呆然としており、美砂江は腰が抜けたように静枝の隣に座り込んでしまった。

しばらく、静枝の泣き声だけがロビーに響いていた。その声に驚いて、管理人さんや給仕のおばさん達がダイニングルームから顔をのぞかせていた。

「落ち着きましたか？」

やがて北野さんが口を開いた。静枝はようやく泣くのをやめて顔を上げ、ゆっくりと起き上がり、美砂江が差し出したハンカチで涙をぬぐいながら北野さんを見た。

「では、順を追って話していただけませんか」

「はい…」

静枝は消え入りそうな声で応えた。そして、

「私、尊通さんに呼び出されてあの栈橋まで行ったんです」と話し始めた。北野さんは腕組みをして、

「そうですか。それでその後どうしたんですか？」

「その後、私、栈橋の上で尊通さんを待っていたんです。でも彼がなかなか来ないので…」

静枝はグツとつまってしまった。たぶんその時のことを思い出したのだろう、また目が潤んで来た。

「彼が来ないので、どうしたんですか？」

北野さんはやんわりと先を促した。静枝は嗚咽を抑えながら、
「栈橋から離れて、あたりを探してみようと思ったんです。その時、栈橋の端から何かが出ているのに気づいて…」

「それが人間の足だったんですね？」

「そうだったんですけど、最初はそうは思わなくて…。栈橋から離

れて辺りを見回しているうちに、それが足だつてわかつたんです…」

静枝の目から涙があふれ出た。北野さんはしかし、

「ところでどうして、あの死体がそのタカミチさんだとわかつたのです？」

と続けて尋ねた。静枝が涙声ながらもしつかりとした口調で、

「右足のくるぶしのところにアザが見えたんです。そのアザ、尊通さんの足にあるアザと全く同じでした。それで私、その足が尊通さんの足だと直感して…」

と言うと、北野さんがその言葉を引き取るように、

「気を失った、というわけですね？」

と確認するように言った。静枝は黙って頷いた。北野さんはしばらく考え込むようにしてテーブルを見つめていた。私達は息を呑んで北野さんの次の言葉を待った。

「タカミチさんとは、どうやって待ち合わせ場所と時間を決めたのですか？」

北野さんは顔を上げ、そう尋ねた。静枝は北野さんを見て、

「メモです。明け方に私の部屋のドアの下からメモが入れられていて。それに『湖に出て左手にある棧橋で7時に待つ』と書いてあったんです」

と答えた。北野さんは、ほオという顔で、

「メモですか。では、そのメモを見せていただけませんか」

静枝の顔に緊張の色が走った。彼女は首を横に振り、

「持っていません。どこかに落としたか、忘れてしまったみたいで…」

「…」

北野さんの目は、明らかに静枝を疑っていた。まさか、静枝が武さんを殺したと思っているのかな？

「ホントですか？」

「ホ、ホントです！！」

静枝の潤んだ瞳がキツとなった。彼女も自分が疑われていることに気づいているみたいだ。

「わかりました。ではそのメモは鑑識に探させましょう」

北野さんはそう言って立ち上がった。そして藤堂さんに目をやり、「タカミチさんという人の部屋を見せてもらえますか」

「は、はい、どうぞ」

藤堂さんはやや緊張気味に応え、北野さんと田島さんの先導をして階段を昇って行った。

「静ちゃん、大丈夫？」

行子が声をかけると、静枝は行子を見てかすかに微笑み、

「大丈夫」

と応えた。裕子先輩が藤堂さんが戻って来たのに気づき、

「刑事さん達はどうしたんですか？」

「武の部屋を見て回ってるよ。朝食がまだなので言ったら、どうぞと言われたので降りて来たんだけど」

藤堂さんも相当参っているようで、喋るのが辛そうだった。それでも、

「とにかく食事にようよ。あまり食欲ないかも知れないけどさ」と一同に言った。私達は頷き、ダイニングルームに行った。

私達は食事をしている間何も喋らなかった。カチャカチャと食器の音がある。パタパタと歩く音がある。昨日の昼食の時と同じだった。みんなが口を開かないのは昨日と理由が違っていたが…。

私達が朝食兼昼食を食べ終わり、ロビーに戻ると、北野さんと田島さんが鑑識の人達に2階に行くよう指示を出していた。武さんの部屋をいよいよ本格的に調べるみたいだ。

「ああ、そうだ。皆さんの連絡先を教えてください。後で何かお尋ねすることがあるかも知れませんが」

北野さんが鑑識の人から便せんのようなものを受け取って、藤堂さんに渡した。

「わかりました」

藤堂さんは紙を受け取ってソファに座り、

「誰か、書くもの持っていないか？」

と私達を見た。華子先輩がすかさず、

「どうぞ」

とボールペンを差し出した。藤堂さんはニツコリして、

「ありがとう」

と言うと、ペンを受け取り紙に向かった。北野さんは田島さんに何か言々と私達に近づいた。しかし、田島さんは玄関から外へ出て行ってしまった。

「ああ、すみません、あと、タカミチさんの住所と氏名、電話番号もお願いします」

北野さんは藤堂さんが書いているのを覗き込んで言った。藤堂さんは、

「あ、はい」

と応え、武さんの住所と氏名、電話番号を書き始めた。

「うつ…」

その時、静枝が口を抑えてうずくまってしまった。行子がすぐさま駆け寄り、

「大丈夫、静ちゃん？」

と背中をさすった。静枝は小刻みに震えていた。どうしたのだろう？ あつ、つわりか？

「ご、ごめんなさい、大丈夫…」

静枝はそう応えて、フラフラしながら立ち上がり、蒼ざめた顔をしたまま一人がけのソファに腰を下ろし、背もたれに寄りかかった。行子は心配そうに静枝に近づき、彼女を気遣っていた。

「できました。どうぞ」

藤堂さんが便せんを北野さんに渡した。華子先輩は藤堂さんから受け取ったボールペンをハンカチに包んで、大事そうにセカンドバッグにしまった。あのボールペン、永久保存するつもりかな？

「それでは私達はこれで。また何かありましたら来ることがあると

思います」

北野さんは受け取った便せんを丁寧にたたんで、スーツの内ポケットに入れた。そして、

「皆さんにはしばらくここにとどまっていたきたいので、そのおつもりで」

と言うと、サッと軽く敬礼をして玄関に向かって歩き出し、鑑識の人達と共に保養所を出て行った。

「静ちゃん？」

行子がびっくりしたように声を出した。静枝はさつきよりも激しく震え出し、ダット駆け出すと2階へ行ってしまった。

「静ちゃん！」

行子が追いかけた。

「一体どうしたっていうのよ……」

須美恵先輩が少々呆れた調子で言った。華子先輩は肩をすくめて、「さアね」

と言った。私は法子の反応が気になり彼女を見た。法子はジッと2階を見つめていた。

「本当にどうしたのかしら、草薙さん……」
と彼女は呟いた。

第十二章 法子動く 9月 1日 午後 2時

警察の人達が帰った後、私達はしばらくロビーにいた。何をしようというのでもなく…。

やがて皇さんが黙ったままロビーを離れ、2階に行ってしまった。続いて藤堂さんも、

「失礼するよ」

と私達に言い、やはり2階に上がって行ってしまった。

しばらくして不意に法子が歩き出した。どうやら階段の下にある公衆電話室に向かっているようだ。

「法子…?」

私はどうするのだろうと思って、彼女を追いかけた。

「どこへ連絡するの？」

私が尋ねると、法子は扉を開きながら、

「警視庁よ」

「えっ？」

私がキョトンとしている間に彼女は中に入り、プッシュボタンを押していた。あら？ 手帳も何も見ないでいきなりダイヤルしたってことは、相当かけて頭に入っている番号ってことかな？ そう言えば彼女、警視庁に知り合いがいるんだっけ。ハハハ。私って、すぐ忘れちゃう。

「あっ…」

そんなことを考えているうちに、法子が出て来た。

「ねエ、何を話していたの？」

と私がまた尋ねると、法子は小声で、

「警視庁の知り合いに今度の事件のことを照会してくれるように頼んだのよ。ちよつと気になるので」

「探偵するの？」

「まア、そんなとこね」

法子は可愛くウィンクしてロビーに戻って行く。私は慌てて彼女の後に続いた。

「中津さん、どちらに電話してたの？」

須美恵先輩がイジワルっぽく尋ねて来た。華子先輩も法子を見ている。法子はニコツとして、

「実家です。予定が少し延びそうだったって…」

「そう。事件のこと、話したの？」

華子先輩が口をはさむ。法子は華子先輩に目を転じて、

「いえ。母は気が小さいですから、殺人事件が起こったなんて知ったら、卒倒してしまいますので」

と答えた。二人の先輩は少々不満そうに法子を見ていたが、やがて階段に向かい、2階に行ってしまった。法子はそれを見届けてから裕子先輩に近づき、

「先輩、ちよつといいですか？」

と声をかけ、何事か小声で話した。裕子先輩も小声で答えている。その時突然、

「ねエ、ホントは彼女、どこに電話してたの？」

と美砂江が話しかけて来たので、私はビクンとして彼女を見た。

「さア、私、何も聞いてないから」

ととぼけてみたが、美砂江はまるつきり私を信用していないようだ。

「貴女が教えてくれないのなら、彼女に直接聞くしかないわね」

美砂江は法子に近づいた。法子は美砂江に気づいて彼女を見た。

「ねエ、中津さん、さっきどこに電話してたの？ 実家じゃないでしょ？」

美砂江はまるで刑事が犯人のアリバイを崩した時のように得意満面の顔で言った。法子は軽く肩をすくめて、

「ばれちゃったみたいね。実は彼のところに『助けに来て』って電話をしてたの」

と答えた。えっ？ 今の話の方がホントっぽく聞こえるぞ…。

「ああ、そう…」

美砂江は呆れ顔でそう言うと、やはり2階に行ってしまった。私はすぐさま、

「ねエ、ホントはどうなの？」

と法子の耳元で尋ねた。法子はペロツと舌を出した。その仕草はとても自然でとても可愛らしかったが、彼女には全く自覚症状はないようだ。だから余計に可愛いのかな。

「警視庁よ。貴女には嘘ついたりしないわ」

法子の言葉に私は感激した。この娘と一生親友でいたいと思ったものだ。ちよつと大袈裟かな。

「中津さん……」

裕子先輩が口を開いた。法子と私はほぼ同時に先輩を見た。

「さっきの話なんだけど、武君の事件、切り裂きジャックと関係ないの？」

「ええ。私はそう思います。警察の人達はどう思っているのか知りませんが」

法子の話は私を仰天させた。武さんは切り裂きジャックに殺されたんじゃないの？　じゃあ一体……

「まさか法子、草薙さんを……？」

私が言うと法子は私を見て、

「違うわ。とにかく今は、警視庁からの返事を待つしかないわね」

と答えた。私は裕子先輩と顔を見合わせた。

「武さんの部屋に行ってみましょう」

法子が言った。私が、

「何しに行くの？　もう部屋は見たでしょ？」

と言うと、彼女は、

「警察が何を見て、何を持って行ったか調べるのよ」

と答えた。私は再び裕子先輩と顔を見合わせてしまった。

と言うわけで、裕子先輩と私は法子について武さんの部屋に行った。さっき来た時はそうでもなかったのに、武さんが殺されたのか

も知れないと思うと何となく部屋に入るのが怖くなった。しかし法子はそんなこと全然ないらしく、スタスタと部屋の中に入って行った。裕子先輩も恐る恐る入って行った。

「うわっ、粉っぽい」

法子の声が出た。私が気後れしていると、

「どうしたの？」

と法子が顔を出して、不思議そうな顔で私を見た。私は苦笑いをし
て、

「いやその、武さんが殺されたのかも知れないって思うと、何か入るのが怖くて…」

「何言ってるの」

法子は半ば強引に私を部屋の中に入れた。

「ああ…」

さっきの法子の言葉の意味がわかった。武さんの部屋はそれとはわからないほどきれいにされていたが、鑑識の人達が指紋の採取で使った粉の匂いというか、雰囲気というかが残っていた。

「何かなくなっているもの、あります？」

法子は裕子先輩に尋ねた。先輩は辺りを見回して、

「特別なくなっているものはないみたいね。ただ、お風呂のお湯が少し減っているかしら？」

とバスルームを覗き込んで言った。法子もバスルームを覗いて、

「みたいですね。少し採取して行っただけでしょう。あと、カミソリと歯ブラシが動かされていますね。皮膚や唾液などが付着しているものですから、それだけ採ったのかも知れません」

「つまり湖で発見された死体と、武君の皮膚とかを比較するという
ことね」

裕子先輩は悲しそうに言った。法子は黙って頷き、バスルームから離れた。そしてベッドに近づき、

「ベッドの上はクリーナーをかけたみたいですね。髪の毛一本ありませんよ」

と顔を近づけて言った。私は少し退屈なのでドアのそばに行き、廊下の方を見た。

「何やってるの、神村さん？」

美砂江が現れて言った。私は、

「自分の目で確かめて結論出してよ」

と言い返した。美砂江はツンとして部屋の中に入り、法子が武さんのバッグを眺めているのに目を留めた。

「ねエ、何してるの？」

美砂江に声をかけられて、法子は振り向いた。

「ちよつと探偵ごっこよ」

彼女はニコニコしながら答えた。美砂江は部屋の中を見回しながら、

「なるほどね。切り裂きジャックを捕まえるつもり？」

「いえ、とんでもない。武さんを殺したのは、あつ、もし武さんが殺されたのだとしたらだけど、犯人はあの切り裂きジャックではありえないの」

「そう？」

美砂江は全然法子の話など信用していない様子である。しかし法子は美砂江の態度を気にせず、

「私の勘だけど」

と付け足し、私と裕子先輩を見て、

「階下へ行きましょうか」

と言いながら、部屋を出て行った。私と裕子先輩は慌てて彼女を追いかけた。

「ちよつと待ってよ」

美砂江も法子の話に興味を持ったのか、私達について来た。

「あつ、静枝……」

廊下の向こうから、行子に付き添われて歩いている静枝を見て、美砂江が声をかけた。すると静枝は私達に気づいて、

「やっとわかったわ。わかったのよ」

と囁くように言い、ガタガタと震え出した。行子が、

「ごめんなさい、大和さん。今は静ちゃんをそっとしておいて」

と言って、静枝をかばうようにして階段を降りて行ってしまった。

美砂江はそれを黙って見ていたが、

「わかったって、一体何がわかったのよ…？」

と不満そうに呟いた。それは私も同じだった。何のことなんだろう？

「犯人を見たのかしら？」

裕子先輩が言った。法子が頷いて、

「そうかも知れませんが。あるいは何か思い出したのでしょうか」

「そうね…」

裕子先輩は相変わらず悲しそうだ。見ていて痛々しいくらいである。

「大和さん、草薙さんとすれ違った時、草薙さん、手に何か持っていた？」

法子が美砂江に尋ねた。美砂江は目を見開いて法子を見つめ、

「ちよつと覚えてないわね。どうだったかな？」

と小首を傾げて考え込んだ。そして、

「さっき静枝が刑事さんに話してたメモのことね？」

と尋ね返した。法子は、

「ええ。貴女がそれを見かけていれば、草薙さんがメモを持っていたということを裏付けられるから」

「なるほどね」

美砂江もさすがにクリスティーファンだ。灰色の脳細胞を働かせ始めているらしい。

「あの刑事さん、明らかに静枝を疑ってたし、彼女のメモの話を信用していなかったものね」

「そうね」

私達は階段を降り、ロビーに行った。そこには静枝と行子の姿はなかった。管理人のおじさんの話だと、二人は奥にある医務室にいるということだ。医務室とは言っても救急箱とベッドが一つあるだ

けだが。

「私達、どうすればいいのかしら？」

裕子先輩がゆっくりとソファに腰を下ろしながら言った。法子も向かいのソファに座り、

「そうですね…。今できることは、ここにすること。それくらいしかありませんね」

と応えた。裕子先輩は黙って頷き、目を伏せた。

「あつ、こんなとこにいた！」

階段の上から須美恵先輩が顔を出した。やがて彼女は華子先輩と共に階下に降りて来た。

「部屋を見て回ったら誰もいないんですもの。何してるんですか、ここで？」

華子先輩が裕子先輩に声をかけた。裕子先輩は病み上がりのような顔で華子先輩を見て、

「別に何もしてないわ」

と応えた。須美恵先輩は法子に目をやり、

「貴女さつき武さんの部屋に行つてたでしょ？ 何してたの？」

と尋ねた。そうか、須美恵先輩の部屋からだトドアを少し開いただけで、武さんの部屋の前が見えるんだ。

「探偵ごっこですよ」

法子はニコツとして応えた。しかし須美恵先輩は、

「どうも貴女つて、行動が変なのよね。電話をかけたり、武さんの部屋を探し回ったり…」

「そうですね？」

法子は微笑んだまま言った。須美恵先輩は一人掛けのソファに座って法子を見据えて、

「そうですね、じゃないわよ。一体何を考えてるの？」

「何をつて、どういうことですか？」

法子は呆れたように尋ね返した。須美恵先輩はキツとして、

「とばけないでよ。何でもどこかに電話したのを嘘をついてごまかし

たり、武さんの部屋を探し回ったりしたのよ？」

と声を荒げて言った。華子先輩はそうよそうよと言わんばかりに法子を見下ろしていた。法子ピンチだわ。

「すみません。私、あまり気が回る方ではないので先輩方のお気にさわったのなら、ごめんなさい」

と法子は深々と頭を下げた。これには須美恵先輩も虚を疲れた形になり華子先輩と顔を見合わせた。

「べ、別に謝ってもらいたくて言ったわけじゃないわよ。たださ、同じ同好会のメンバーとして隠し事をされるのって、あまり愉快なことじゃないってことなのよ」

「はい、よくわかりました」

法子は須美恵先輩を真正面から見つめて真顔で応えた。須美恵先輩はそんな法子の目を見られずに、

「わ、わかればいいのよ」

と言ったが、声がうわずっていた。そして、

「それで貴女はどう考えているの、今度の事件のこと？」

と尋ねた。法子はニコツとして、

「先輩こそどう考えておられるのですか？ お聞かせ下さい」

と尋ね返した。須美恵先輩はビクツとして法子を見て、

「わ、私？」

「ええ、そうです」

法子はホントに屈託のない笑顔で言った。須美恵先輩は救いを求めるように華子先輩を見た。華子先輩は肩をすくめてみせた。私には助けられないわ、という意味だろう。須美恵先輩は仕方なさそうに溜息を吐き、

「今のところ、殺されたのが武さんかどうかはつきりしないし、切り裂きジャックの仕業なのかもわからないから何とも言いようがないわね」

と答えた。すると法子は、

「私もそう思います。今は何も結論が出せる状態ではありませんよ」

ね」

「え、ええ……」

須美恵先輩はポカンとしてそう言つと、華子先輩に目配せして、
「じゃあね」

とロビーを離れ、階段を上がって行つてしまった。私がそれを見送つてしていると法子が、

「パトカーが来たわ。何か忘れ物かしら？」

と窓の外を見て言つた。私と裕子先輩も窓の外に目をやった。確かに外にはサイレンを鳴らしていないが、赤色灯を点灯させているパトカーが1台来ていた。

「犯人が捕まったのかしら？」

美砂江は言い、窓に近づいた。

やって来たのは北野さんだった。何となく不機嫌そうに見えるその顔は口をへの字に結び、やや上目遣いに私達の方を見ていた。

「お尋ねしますが、中津法子さんという方はどなたですか？」

北野さんは、私達をジロジロ眺め回しながら言った。法子がニコツとして、

「はい、私です」

と前に出た。すると北野さんはあからさまに目つきが悪くなり法子を睨みつけた。そして、

「あんた一体、警視庁の警視さんとういう関係なんですかね？」と尋ねた。えっ？　じゃあもうあの話が北野さんまで……。早いなア。法子はニコニコしたまま、

「ご近所なんです」

「近所だからって、あそこまであんたの言うことを聞いてくれるとは思えませんね。あの人は我々に捜査の内容を教えてくれと言って来たんですよ」

北野さんは失礼にも法子を指差して言った。法子はそれでも微笑んだままで、

「教えてもらえないんですか？」

「当然です。一般人に教えることじゃありません」

と北野さんが言うのと、法子は真顔になり、

「私は別に警視庁の知り合いを通じて貴方の捜査を妨害とようついわけではありません。ただこの事件が例の切り裂きジャックの事件と同じような手口の犯行のなら、警視庁も捜査内容について知る権利があると思ったので、知り合いに連絡しただけです」

「警視庁に知る権利がある！？」

北野さんはかん高い声でオウム返しに叫んだ。法子は頷いて、
「そうです。一連の殺人事件の被害者は全て東京に住んでいた人達

です。それらの人達の身元の割り出しや、身辺調査は警視庁とその所轄書が担当し、群馬県警とも合同で捜査を進めているはずですが、この殺人事件は警視庁にも知る権利があるのではないかと思っんですけど、違いますか？」

と尋ね返した。北野さんはギョツとしたように法子を見た。

「そ、そりやそうですがね。まだこの事件が切り裂きジャックの犯行かどうかはつきりしたわけじゃありませんからね」

さっきまでのあの不機嫌そうな感じはなくなり、逆に法子を警戒しているような顔つきだ。

「でも捜査本部は三つの殺人事件に結び付けて考えたがっているようです」

法子は何もかもお見通しという顔で言った。北野さんはますますビクリした顔で、

「そんなことまで知っているんですか？ 誰だろう、喋ったのは……」

とあごに手を当てて考え込んだ。すると法子がクスクス笑って、

「今、北野さんが喋ったんですよ」

と言ったので北野さんはハツとして、

「あつ、お嬢さん、私にカマをかけたんですか？」

「ごめんなさい、その通りです」

法子はペコリと頭を下げた。北野さんは苦笑いをして、

「全く、してやられたな。こんなお若いお嬢さんに、この道20年の警部補北野鷹夫が、してやられたなア」

と頭を掻いた。法子は厳しい表情で、

「警察上層部の人達の頭の中にあるのは事件の早期解決だけです。

似たような殺人事件なのに犯人が別人かも知れないとなると、また一からやり直しになるので、人手と経費と時間がかかってしまう。

それでは困るからです」

と付け足した。北野さんも真顔になり、

「ええ。お嬢さんのおっしゃる通りですよ。幹部連中の考えていることと言ったら、記者会見の原稿のことばかりで、現場のことなん

かおかまいなしですよ。だから今度の事件は今までとちょっと性質が違うんじゃないかって捜査会議で発言しても、全然取り合ってくれないんです」

と怒気混じりに言った。法子が、

「北野さんは、今度の事件、今までと違うとお考えなんですね？」

「ええ、もちろん。今までの殺人は通り魔的要素が強いが、今回の
は明らかに違う」

「そうですね」

法子は大きく頷いた。しかし北野さんの顔色は冴えなかった。

「でも一つ、どうしても説明のつかないことが捜査会議で指摘され
たんです」

「説明のつかないこと？」

法子の眉がピクンと動いた。私や美砂江、そして裕子先輩までも
が、北野さんをジッと見つめた。

「今度の事件でも、犯人は、犯人と我々捜査陣しか知らないことを、
死体に施しているんです」

「えっ？」

法子はびっくりしていた。私達は何のことかわからず、顔を見合
わせた。

「つまり、一連の殺人事件の犯人でなければわからないことを、今
回の事件の犯人もしているのですよ」

「……」

法子はショックを受けたように何も言わない。北野さんは頭を振
って、

「わけがわかりませんよ。一体どういうことなのかね……」

「確かに……。それで、どんなことをしているのですか？」

と法子が尋ねると、北野さんは苦笑いをして、

「それは言えません。重要なことなんでね。しかし何にしてもその
謎が解けない限り、犯人は同一人物と考えるしかなさそうです」

「ええ……。ところで、今回の死体の身元ははっきりしたのですか？」

「まだ詳しい報告は受けていないのですが、十中八九、武尊通君に間違いないだろうということでした」

北野さんのその言葉に、裕子先輩は床に座り込んでしまった。美砂江も息を呑んだまま動かない。

「そうですか…」

法子も悲しそうに言った。北野さんは溜息混じりに、

「とにかく今回の事件は、捜査本部にかなり混乱を招いています。犯人の姿がまた見えなくなってしまったのですね」

と言った。法子は裕子先輩に手を貸して立ち上がらせながら、

「じゃあ、武さんが殺される前、つまり三人の殺人事件までは犯人の姿が見えていたんですか？」

と尋ねた。北野さんは肩をすくめて、

「いや、見えていたというほどじゃないんですが。少なくとも前の三人は、殺される原因がたくさんある連中でしたから。しかし武君の場合、それほど原因があるとは思えないんです」

「北野さんは、前の三人も決して通り魔に殺されたとは思っていないんですね？」

法子は少し微笑むようにして言った。北野さんは大きく頷き、

「もちろんです。ただですね、どこをどう調べても、三人のつながりが出て来ないんです。職業、出身地、出身校、立回先…。いくら捜しても、何も共通点が見つからない。となると、やはり通り魔の仕業かとも思えたりするし…」

「なるほど…」

法子は腕組みをして考え込んだ。北野さんもあごに手を当てて考え込んでいる。そして、

「そこへ持つて来て、大学生の武君が殺された…。ますます共通点がありませんからね…」

と独り言のように言った。それから法子を見て、

「そんな具合ですから、幹部連中が通り魔殺人にしたがる理由もわ

からなくはないんです。通り魔殺人なら、迷宮入りになっても面目丸潰れということにはなりませんからね」

「世間体しか考えていないんですね、上の方達は…」

法子は呆れ顔で言った。北野さんは苦笑いをして、

「県警の上層部は、国家公務員ですからね。地方の所轄が解決できない事件のせいで、左遷されるのは困るんでしょう」

と言った。しかし北野さんの目は笑っていなかった。そんな官僚主義に対する怒りに満ちていたのだ。

「いつもバカを見るのは現場の人間ですよ。検挙して当然という考え方がありますからね。しかし、現実はそのほど生やさしいもんじやありませんよ」

「わかります」

法子は頷きながら応じた。北野さんはまた苦笑いをして、

「こりゃ、グチになってしまいましたね」

「いえ、そんなことはありませんよ。それより北野さん、今までに殺された三人の身辺のことが記された資料を見せていただくわけにはいきませんか？」

と法子が尋ねると、北野さんは一瞬ピクンとしたが、すぐにニッコリして、

「いいでしょう。後で田島にでも届けさせますよ」

「ありがとうございます」

法子もニッコリして礼を言った。北野さんは小声で、

「あいつ、お嬢さん方のどなたかを気に入ったらしくて、さっきもここに来たがってたんです。いい口実ができて、喜ぶでしょう」

「まア、そうなんですか」

法子はクスクス笑った。

しばらくして北野さんは帰って行った。そしてそれと入れ替わるようにして、2階から藤堂さんと皇さんが降りて来た。

「また警察が来てたの？ 音楽をヘッドフォンで聴いてたから、全然わからなかったよ」

皇さんが言った。藤堂さんも、

「僕も気が滅入って何も考えないようにしようとしていたから、気がつかなかったな」

と言い添えた。

「ところで警察は何しに來たのさ？ 犯人の目星でもついたのか？

」

皇さんが神妙な顔つきで尋ねた。すると法子が、

「いえ、犯人の目星はまだついていません。ただあの死体は、武さんに間違いないようです」

と答えたので、皇さんは藤堂さんと顔を見合わせた。皇さんはさすがに親友だった武さんの死を実感したのか、しんみりとした口調で、
「そうか……。何か、信じられないな……」

と呟いた。藤堂さんも溜息をついて、

「そうでなければいいと思っていたけど……」

と言い、黙ってしまった。

しばらく沈黙の時が続いた。

何も喋ろうとしない私達のいるロビーに、階段の奥の医務室からやって來た行子が、

「どうしたんですか、皆さん？」

と声をかけたので、沈黙は破られた。美砂江が、

「静枝は大丈夫なの？」

と尋ねた。行子は弱々しく微笑んで、

「大丈夫ってほどじゃないけど、落ち着いてるわ」

「そう。何よりね」

裕子先輩が微笑み返した。しかし行子は、

「でも静ちゃん、ちよつと変なんです」

「えっ？ 変で、どういうこと？」

私はようやく会話に混ぜてもらえると思い、口をはさんだ。行子は私達を見渡して、

「わけのわからないことを言ってるんです。『マガクだったのよ』」

って……」

「マガク？」

皇さんがオウム返しに尋ねた。行子は皇さんを見て頷き、
「ええ。『マガク』って言うてました。私、何のことなのかわ
からないので、静ちゃんに尋ねたんですけど、彼女、その言葉を繰り返
すだけで、答えてくれないんです」

「なるほど……。武の死体を見たこととそれが紛れもない現実だとわ
かったことで、精神が相当参っているんだな」

と皇さんは分析してみせた。藤堂さんが、

「草薙さんは他には何か言っていないのか？」

と行子に尋ねた。行子は藤堂さんを見て首を横に振り、

「他には何も言ってません。私、心配で……」

と涙ぐんだ。藤堂さんは皇さんと顔を見合わせて腕組みをし、考え
込んでしまった。

「失礼します……」

行子は涙を拭いながら、2階に上がって行った。

「中津さん、FAXが届いていますよ」

管理人さんが管理人室から出て来て法子に声をかけた。法子はハ
ッとして管理人さんを見て、

「はい、わかりました」

と応え、私に目配せして管理人室に向かった。私もこれに続いた。
藤堂さんと皇さん、そして裕子先輩と美砂江は、法子と私の行動を
ただ呆然として見ていた。

「意外に早かったわね」

法子は管理人室からFAXのロールを抱えて出て来た。

「でも管理人さん、私のことすっかりびっくりしたような顔で見たから、何て言い訳しようか考えちゃったわ」

「で、何て言い訳したの？」

私が興味をそそられて尋ねると、法子はニコツとして、

「こつやって笑ってごまかしたの」

「ハハハ」

彼女にニコリ微笑まれたら、大抵の男は何も言わずに頷くだけだろう。法子には全く自覚症状がないようだが、彼女の笑顔はホントに人の心をとろかしてしまうようなものだ。

「とにかくどんな内容なのか、目を通してみましょう」

法子は急に真顔になって階段を上がって行った。私は小走りになって彼女を追いかけた。

「待ってよ、法子！」

私はロビーにチラツと目をやった。藤堂さんと皇さん、そして裕子先輩と美砂江が、何があつたのだろうという顔で、こちらを見ていた。私は軽く会釈だけして階段を駆け上がった。

FAXの内容は法子の部屋で目を通した。その内容の大半は、切り裂きジャックに殺された三人のプロファイルだった。これがあれば田島さんに資料を持って来てもらわなくても、大丈夫そうだ。ま、比較検討ということで、両方見るのもいいかも知れないけど。

「一人は出版社の営業マン。もう一人は警備会社のシステムエンジニア。そして最後の一人は、医薬品メーカーのセールスマンか」

私がボソリと言うと法子は、

「何も関連がないと言うのが、警視庁と実際に調査した各所轄の意

見みたいね」

と考え込むようにして言った。確かにそうだ。三人共、世代もバラバラ、趣味や遊び場所も違うし、仕事上のつき合いもない。やっぱり通り魔殺人なのかしら？ でも…。

「唯一共通しているのが、三人が殺されたのがこの榛名湖周辺ということだね。それも妙よね」

法子の言葉に私はビクツとした。そうだ、武さんも湖で死んでいったんだ…。

「三人が三人共、群馬県に来たことがない人達なのよ。それが何故群馬県に来て、殺されたのかしら？ 全くわからない」

「そうねエ…」

私は腕組みをし、ベッドに腰を下ろした。法子はFAXの用紙をテーブルに置き、丸椅子に座った。

「……」

法子は目を閉じ、まるで悟りを開こうとしている修行僧のように静かに座っていた。私は声をかけられず、しばらく彼女を見ていた。

「あつ…」

どれほど経ってからだろうか？ 法子が目を開いた。

「何だろう、三人の共通点が見えかけたんだけど…」

法子はまた考え込んだ。私は立ち上がりFAX用紙をもう一度見た。写真も送られているのだがちょっと写りが悪く、わかりにくいウン？ でもこの出版社の人、どこかで見たことがあるような…。

「わかった、この人！ 大学の生協の書店に出入りしている人よ。何度か見かけたことがあるわ」

と私が言うと、法子はハツとして、

「そうか、だから何か見覚えがあると思ったのか。じゃ、他の人はどう？ 何か見覚えがない？」

「ウーン。警備会社の人は見覚えがないわね。でもこの会社、大学のセキュリティシステムを管理している会社じゃないの？ 会社のマ―クに見覚えがある」

と私は言ってみた。すると法子は感激した顔で、

「すごいわ、律子！これで二人の共通点が見つかったわ」

と私の手を握った。私は何か気恥ずかしくなった。そして、

「そ、それだったら、医薬品メーカーの人って医学部にでも出入りしてるんじゃないかしら」

と調子に乗って言ってみた。法子はサツと立ち上がって、

「裕子先輩に聞いてみましょう。確か先輩のお父さん、ウチの大学の付属病院の先生が主治医のはずよ」

「そ、そうね」

私達は早速部屋を出て、階下に向かった。

幸いにも裕子先輩は一人でソファに座り、考え事をしているのか、遠くを見るような目で、窓の外に目を向けていた。

「裕子先輩？」

法子が声をかけると、先輩はハツとして私達を見た。

「あつ、ごめんなさい。ボンヤリしてたみたいね。何かしら？」

先輩は居ずまいを正して言った。私達は先輩と向かい合ってソファに座った。そして法子が、

「ちよつとこの人の顔を確認してほしいのですが…」

とFAXに出ている医薬品メーカーのセールスマンの顔写真を見せた。先輩は目を細めて紙に顔を近づけ、

「ウーン。何となく見覚えがあるような気がするんだけど。誰なの？」

「医薬品メーカーのセールスマンなんですけど」

法子が答えると、裕子先輩はアツと口の中で小さく叫び、

「そうか。病院で何度か顔を合わせたことがあるわ。この人がどうかしたの？」

「切り裂きジャックの犠牲者なんです」

法子の言葉に裕子先輩の目がより大きくなった。しばらく先輩はまばたきを忘れたかのように法子を見つめていた。

「そんな…。そう言えば、突然姿を見せなくなったようだったわね」
先輩は忘れていたまばたきをまとめてするように目をパチパチさせ、思い出すように話した。その時法子が、

「殺された三人がつながりました」

と言った。私と先輩は、

「えっ？」

と彼女を見た。法子は、

「三人共、私達の大学という共通点を持っているようです。田島さんが来たらこのFAXと一緒に、今のことを話してみます」

「大学が共通点か…」

裕子先輩はすっかり驚いているようだった。

「何かあったのか？」

皇さんが階段を降りて来て尋ねた。法子が、

「切り裂きジャックに殺された人達の共通点が、私達の大学らしいんです」

「ええっ！？ ホント？」

「まだ推測の域を出ていませんけど」

「なるほど」

皇さんは法子が手にしているFAX用紙に気づき、

「ちよつと見せてくれる？」

「はい、どうぞ」

皇さんはFAXに目を通して、フーツと大きく溜息を吐いた。そして法子に用紙を返して、

「確かかもな。俺、出版社の奴と警備会社の奴、見覚えあるよ。医学部には法医学の関係で、来年には顔を出すだろうけど、今のところは足を踏み入れていないから、わからないな」

「これで証人が三人になったわ…」

法子はFAXの用紙を折りたたみながら言った。すると皇さんが、
「しかしどうして警察はこのことに気づかなかったんだらう？」

と誰にともなく言った。法子は皇さんを見つめて、

「これは私の推測ですけど、三人のうち二人は営業の人ですよね？」
「ああ、そうだね。それが何か？」

皇さんは法子の言おうとしていることを確かめるかのように尋ね返した。法子は頷いて、

「こんなふうには考えられませんか？ 出版社の人と製薬会社の人
は、会社に内緒で営業に来ていた。いえ、もつと悪く言えば、横領
のようなことをするつもりで会社に黙っていた」

「そうか」。営業の人間なら、考えることがあるかも知れないな。
で、警備会社の方は？」

皇さんも、ウンウンと頷きながら応えた。法子はさらに、

「警備会社の人はシステムエンジニアですから、日報とかをつけて
いる場合はともかく、一日の行動を捉えることは難しいんじゃない
でしょうか。よほど管理の行き届いているところでない限り。ある
いは本人が日記でもつけていない限り……」

「なるほど。営業の人間のように勝手に動き回れないかも知れない
が、どこどこを受け持っていてというようなことまでは、警察も
調べ切れないかもね」

皇さんは法子の話にすっかり感動したように言った。法子はF A
Xの用紙をたたみ終えて、

「そうです。それに群馬県警は、警視庁に被害者の身元確認とお互
いのつながりを調べてくれるように依頼しているだけのようです。

つまり、東京へ人を派遣していないのですよ。これでは警視庁も所
轄署も、徹底的に調べるといふことはしてくれませんか」

「そうだなア。自分のとこの事件だけで手一杯なのに、よその事件
のことで少ない人手を割いていられるかってなるよなア」

と皇さんは腕組みして言った。法子は皇さんを見て、

「群馬県警はこの事件を通り魔殺人にするつもりの方ですから、
出張費や宿泊費を出して東京に捜査員を送るつもりはなかったのだ
でしょう。これでは警視庁の方だって悪気はなくても、捜査への力の
入れ方が変わってしまいます」

皇さんは憤然とした顔で、

「全く、タテ割行政の一面を見たっていう感じだよ。もう少し捜査の仕方が違っていれば、もっと早くこのことに気づいていたはずなのに！」

と言った。私も同感だった。皇さんは法子を見て、

「それで、このことを警察に話すの？」

「ええ、もちろん。事件解決につながる重要な事実ですから」

「そうだな」

皇さんはそう言うと、ロビーから立ち去って外へ出て行った。心無しか寂しそうなのは武さんの死を実感し始めたからなのだろうか。

「ねエ、法子、これで武さんもつながったんじゃない？」

と私は言ってみた。法子は私に目を向けて、

「武さんがその大学の学生だから？」

「ええ」

法子の考えは私と違うようだった。

「それは違うと思う。武さんは別の人間に殺されたのよ」

「ええっ!？」

私ばかりでなく、裕子先輩もビクリして声をあげた。

「考えてみてよ。武さんは自分の部屋から姿を消した時、バスタオルを一枚身に着けていたか、何も着けていなかったかのどちらかなのよ。つまり、武さんはあの部屋で殺された可能性があるということなの」

「……!」

私は裕子先輩と顔を見合わせて息を呑んだ。法子は続けた。

「もちろん、外に連れ出されて殺された可能性もあるけど」

「中津さん、じゃあ貴女は、犯人は保養所の中にいる人間だと言うの？」

裕子先輩の声はまるで探りを入れているようだった。法子は軽く首を横に振り、

「いえ、そうは言っていないません。殺されたのが部屋の中の可能性が

ある、ということなんです
と応えた。私はもうすっかり当惑していた。

夕食の時間が近づいたので、皆はダイニングルームに集まっていた。しかし法子と私は2階に戻り始めているところだった。

「夕食前に確認しておきたいことがあるの。つき合ってくれる？」

法子は階段を上がりながら私に言った。私は頷いて、

「いいわよ」

と応えた。法子はニコツとして、

「ありがとう」

と言ってくれた。いやいや、どういたしまして。私、頼られるのって好きなんだよな。

法子が向かっていたのは武さんの部屋だった。ゲツ。またなの？

「今度は何を調べるの？」

私は恐る恐る尋ねた。法子はさっさと部屋の中に入って、

「外部犯の可能性を確かめてみるのよ」

と応えた。

「えっ？」

私は慌てて部屋の中に入り、法子を探した。彼女は窓のそばにいて力ギを開け、窓を開いた。そして下を覗き、

「ここから侵入することは可能かもね」

と言った。私も窓に近づいて下を覗いた。

「なるほど……」

窓の下には山積み薪があつた。昔、保養所のお風呂を薪で焚いていた時の名残りらしい。それにしても随分たくさんあるな。もうすっかり変色してコケまで生えているようなものであるぞ。

「ここを足場にすれば、犯人は容易く武さんの部屋に侵入できた」

法子は現場検証をしている鑑識課員のように分析した。そして、

「首はあれで斬ったのかしら？」

と薪の山の傍らにある斧を指差した。うわア。もしそうだとしたら

怖いなア。血とか着いてるのかな。そんなはずないか。

「逆に言えば、ここからなら犯人は容易く武さんの遺体を運び出せたわね」

「……」

私は法子のその発言にギクツとして思わず窓から離れた。法子はそんな私のリアクションにクスツと笑いをもらして窓を閉じ、

「あくまで可能性があるということで、絶対そうだというわけじゃないわ」

と言ってから、

「明日、田島さんが来たら斧を調べてくれるようお願いしましょう」

「え、ええ……」

法子が「可能性があるだけだ」とは言っても、私はもう怖くて仕方がない。犯人は薪の山を足場にすれば、どの部屋にも易々と侵入できるのである。それほど薪はたくさん山積みになれているのである。心配ないのは一番端の部屋の藤堂さんと行子だけだ。

「外へ出て裏に行ってみる？」

法子の発言は私を凍りつかせた。法子はそんな私の反応を見て、「じゃ、ここにいて。私一人で裏に回ってみるから」

そう言われると、ここにいるのも怖いので、

「ま、待つてよ。私も行くわ」

と部屋から出て行く法子を追いかけた。

保養所の裏は、ほとんど人が足を踏み入れていないと思われた。

何しろ雑草が伸び放題で、地面がほとんど見えていない。私はサンダルで来たことを後悔しながら、法子を追った。

「これじゃ誰かが歩いたとしても、足跡は残らないわね」

法子は辺りを見渡して呟いた。法子は斧に近づいた。わっ、もうやめて、法子！

「この斧、使われた形跡がある。洗ってあるわ。金属の部分はもう

乾いているけど、柄の部分はまだ湿っているみたい」

「ひーっ！！　じゃあ、それで武さんの首を…。」

「でも何故犯人は凶器を置き去りにしたのかしら？」

法子が呟いたので、私は、

「もう一回使うつつもりなんじゃ…。」

と口にしてみた。法子はしかし、

「いえ、そういうことじゃないのよ。何故持ち去らなかったのか、ということなのよ。証拠品なのよ、犯人にとって。それを置いて行くなんて」

確かに解せない。どうということなんだろう？　法子はしばらく斧を見つめていたが、やがてクルリと向きを変えた。

「さっ、もう戻ろうか」

と彼女は歩き出した。私はビクンとして、

「ちよっ、ちよっと！」

と法子に続いた。

「この事件、北野さんの話の『犯人にしかわからないやり方』のことを考えても、どうしても同一人物による犯行とは思えない。何かあるはず。何か理由があるはずだわ」

法子は歩きながら言った。そして、

「今までの事件では犯行の凶器は発見されていないし、ましてや置き去りになどされていない。殺害方法は似ていても、いえ、同じだとしても、同一の心理の、あるいは思考の人間による犯行とはどうしても考えられない」

とも言った。私にはよくわからなかったが、恐怖だけははっきり感じた。たとえそれが通り魔であっても、そうでなくても…。

それから私達はひっそりと夕食をすませ、それぞれの部屋に引き上げた。しかし私はさっきのことあつて、どうしても一人で部屋にすることができそうにないので、法子の部屋に昨日に続いて泊まることにし、荷物を全て持って、彼女の部屋に行った。

「帰りたいなア。て言うか、逃げ出したいなア……」

私はベッドの端に腰を下ろしながら言った。法子は私の隣に座って、

「そういうわけにはいかないわよ。私達、死体の発見者だし、殺されたのは武さんに間違いないようだし」

「そっかア。やだなア。どうしてこんなことになっちゃったんだろう?」

私はそのままベッドに寝そべり、天井を見つめた。法子は私の顔を覗き込んで、

「どうしてかしらね。その理由がわかれば、何もかも明らかにすると思うの」

「そう?」

私は法子を見上げ、スツと起き上がった。腕時計を見ると10時だった。そんなに話していたとは思わなかったんだけど。

「もうこんな時間なのか」

法子も腕時計を確認して言った。

「そろそろ寝ようか。今夜は寝相、気をつけるね」

と私が言うと、法子は、

「そんなこと、気にしないの」

と笑いながら言ってくれた。そして、

「お風呂、どうする?」

と尋ねて来た。私は強烈な睡魔に襲われていたので、

「明日の朝入るわ」

と応えた。すると法子はバッグから着替えを取り出して、

「じゃあ私、シャワー浴びちゃうね」

と浴室に入って行った。私はパジャマに着替えるとベッドに入った。今から考えれば、お風呂に入っておくべきだったのだ。ま、仕方ないな。

そして私達は知る由もなかったのだが、その頃犯人は次の犠牲者を決め、実行に移ろうとしていたのだった。

第十六章　さらなる惨劇

9月　2日　午前　7時

私は法子が起き出すのを感じ、ハッとして目を覚ました。

「ごめん、起こしちゃった？」

法子は着替えながら言った。私は眠い目をこすりながら、

「どうしたの？」

と尋ねた。法子はスツと髪をまとめて束ね、

「何かあったらしわ。外が騒がしいのよ」

と応えた。私はビクビクしながら、

「何かあったの？」

「私も今起きたところだから、そこまではわからないわ。ちょっと外を見て来るわね」

法子は部屋を出て行こうとした。私は仰天して、

「ま、待ってよ。私も一緒に行くわ」

と言い、慌てて着替えた。こうして私はシャワーを浴びる機会を失ってしまうのである。

法子と私はドアをそつと開けて、廊下の様子を見た。まだ誰も起きていないようだ。ということは、あのザワザワとした話し声に気づいたのは私達だけなのかな？　おっと、正確には法子だけか。

「何かあったの？」

私が優越感に浸っているところへ裕子先輩が現れた。先輩も今起きたばかりという顔だったが、やはり元々の造りが違うせいかな、素っぴんのはずなのに、全然そんな感じがしない。そう言えば法子も化粧してるの見たことないけど、彼女、いつもノーメイクなのかな？　うらやましい。

「そうみたいです。外で何人かの人が話しているようです」

法子は応えた。それから私を見て、

「さっ、行ってみましょ」

と言った。先輩がビククリして、

「止めた方がいいわ。もし何か起こっているのなら、見ない方がいいわよ、そういうのって」

と身震いしながら言った。すると法子は、

「大丈夫ですよ。私の母の実家がお寺で、叔父が葬儀屋なので、大概のことでは驚いたりしませんから」

と応え、ニコツとした。私は思わず先輩と顔を見合わせてしまった。ああ、やっぱりこの娘、変わってるわ。

「あ、あのさ…」

私は今の法子の言葉に現場の壮絶な状況を想像してしまい、後込みした。法子は微笑んだままで、

「平気よ。何かあったのかどうか、まだわからないんだから」

「それはそうだけど」

法子は乗り気でない私の手を引いて階段を降り始めた。そこへ、

「どうしたの？」

と藤堂さんが現れた。皇さんもその後ろにいる。

「外が騒がしいんです。何があったのだろうと思って、今から見に行くところなんです」

と法子が応えると、藤堂さんは、

「そう言えば、何か人の話し声のようなものが聞こえた気がするな」と思い出すように言った。法子は、

「それじゃ行きましょうか」

と私を引っ張って降り出した。私は藤堂さんと裕子先輩に救いを求めようとして目を向けたが、二人は何か話し込んでおり、私のウルウルしている視線に気づいてくれなかった。仕方ない。法子について行くしかないか。

現場は昨日法子と私が行った保養所の裏のようだ。外にはたくさん警察関係者がおり、忙しそうに動き回っていた。

「おはようございます。何があったんですか？」

法子が眠そうな顔で歩いて来た田島さんに声をかけた。彼は法子

の姿を見てちよつとビクリしたようだ。慌てて乱れた髪を手櫛で整えた。ははア、田島さんのお気に入りって法子か。

「保養所の裏でまた死体が発見されたんですよ。しかも同じように首無しで」

と田島さんは答えた。ゲツ。首無し死体：？ どうしよう？

「身元はわかったんですか？」

法子は顔色一つ変えずに尋ねた。田島さんは力なく首を横に振り、「いえ。死体は首がない上、着衣は何も身に着けていませんから。

今付近を搜索中です」

「そうですか…」

私はもう失神寸前だった。まさか今度の死体も同好会の誰かなのでは…。

「おはようございます」

北野さんが保養所の裏から現れた。法子はニコツとして、

「おはようございます。朝早くから大変ですね」

「いやいや。もう慣れっこですからね。それにしてもまた一人犠牲者が出てしまうとは…」

北野さんは悔しそうだ。法子は真顔になって、

「私達に何かお手伝いできることはありませんか？」

と言った。北野さんはしばらく黙って法子を見つめていたが、

「そうですね。一応、死体を確認していただけますか？」

と言つて来た。ヒーツ！！ 何てこと言うのよ、法子！

「わかりました。律子はここにいて」

法子はそう言い残すと北野さんと共に保養所の裏に行つてしまった。もう、信じられない娘だ。

私は法子を待つ間、田島さんに死体発見の経緯を聞いた。

死体の発見者は何と管理人さんだった。管理人さんは夕べ私達が保養所の裏をウロウロしているのを見て、草刈りをした方がいいと考え、今朝6時に裏に行つて草刈りを始めた。

刈り取った草が結構な量になった頃、管理人さんは誰かが草むらに

倒れているのに気づいた。どうしたのだろうと不思議に思い、近づいてみて色を失った、といったところのようだ。

「被害者は、若い女性です。もしかすると…」

と田島さんは言いかけ、口をつぐんだ。私は思わず身震いした。そこへ法子が悲痛そうな顔で戻って来た。北野さんも一緒だ。

「どうだった、法子？」

私がやつと声に出して尋ねると、

「たぶんあの死体、草薙さんだと思う」

その発言はとてつもなく衝撃的だった。静枝が殺された？ どうして…？

「お嬢さん、間違いありませんかね？」

北野さんが念を押すように尋ねた。法子は北野さんをまっすぐ見て、

「まず間違いありません。あの腕と脚、草薙さんです」

と言った。そして、うつむくとギョツと目をつぶり、信じられないというように、ゆっくりと頭を振った。武さんの時と違い、さすがの法子もかなり参っているようだ。

「大丈夫ですか？」

田島さんが心配そうに法子に声をかけた。法子はその声に応じて目を上げ、

「大丈夫です、田島さん。お気遣いありがとうございます」

と応えた。田島さんは赤くなりながら、

「い、いえ、どういたしまして」

と言った。この人、結構純情なんだな。

「ところで、例の犯人にしかわからない方法はまたなされていたんでしょうか？」

と法子が尋ねた。北野さんが、

「ええ。施されていましたよ。何故今度の事件の犯人が、そのことを知っているのか、どうしてもわかりません」

「そうですね…」

法子の顔はすっかり深刻な表情になっていた。彼女は、武さんと静枝を殺した犯人は前の三つの殺人事件の犯人とは違う人物だと考えているから、今わかつていることでそれが否定されてしまったため、謎を解こうとして必死なのかも知れない。

「死因は何でしょうか？」

法子が不意に尋ねた。北野さんはハツとして彼女に顔を向け、

「恐らく鈍器による撲殺でしょう。胴体には何の損傷もありませんから。頭に致命の一撃をくらわせたと考えるべきでしょうね。首の切断部分には、生活反応がないようです。これは武君の場合も同じなのですが」

と答えた。生活反応があるということは生きている時に受けた傷だということ、それがないということは、首は死後切断されたということになる。

「じゃあ犯人は殺害方法をわからなくするために首を斬ったんですか？」

と私は少々ムカついて尋ねた。もしそうだとしたら何てひどいことをする奴なんだろう。

「おそらくそうでしょう。と言うよりその可能性が一番高いと言った方が正しいでしょうね」

北野さんは私に目を転じて答えてくれた。法子が、

「現場に斧はありましたか？」

と尋ねた。田島さんが、

「いえ、ありませんでした。管理人さんも斧がなくなっていると言っていましたよ」

「そうですか」

法子は再び考え込んだ。そして、

「現場周辺には全く血痕がありませんでしたけど、殺害現場が別の場所ということなのでしょうか？」

とさらに質問した。すると北野さんが、

「血痕がないのは殺害現場が違うからかも知れませんが、もう一つ

原因が考えられます」

「どういうことですか？」

法子は北野さんをジッと見つめて言った。北野さんは、声をひそめて、

「犯人は恐らくガイシヤの頭に布袋のようなものをかぶせて撲殺し、その上で首を斬り、処分したものと考えられるんです」

と言って、あつと小さく叫んだ。田島さんも仰天したように北野さんを見た。法子がすかさず、

「その布の袋をかぶせて撲殺するのが、切り裂きジャックのやり方しかもそのことが、マスコミに発表していない事実なんです」

と指摘したので、私にはようやく合点がいった。北野さんは苦笑いをして、

「またやられましたね。どうも貴女は、他人に力マをかけるのがお得意のようだ。いい女刑事になれますよ。なア、田島？」

と言った。田島さんは何故か赤くなって、

「え、ええ、そうですね」

法子も微笑んで、

「ありがとうございます」

と応えた。そして、

「北野さん、昨日お願いしておいた資料、持って来ていただけましたか？」

「はい。田島」

と北野さんは田島さんを見た。田島さんは頷いて、車に走って行った。

「北野さん、昨日気づいたのですが」

と法子は三つの殺人事件の被害者の共通点を話した。北野さんはすっきり驚いていた。それでも、

「そんな関係が。なるほど、そいつは参考になりますよ」

といい、少しだけ嬉しそうに微笑んだ。そこへ田島さんが、大きな茶封筒を持って戻って来た。

「どうぞ」

田島さんが差し出した封筒を、

「ありがとうございます」

と法子が受け取った時、彼女の指が田島さんの手に触れた。田島さんの顔は、爆発するんじゃないかというくらい、真っ赤になった。そして彼はそれと気づかれないのか、そそくさと保養所の裏へ、仕事が残っているような顔をして走って行ってしまった。

「あいつ、いい奴でしょう」

北野さんが田島さんを見送りながら言った。法子は頷いて、
「そうですね」

と応えた。北野さんは法子を見て、

「どうです、見合いしてみませんか？」

と唐突に言い出した。さすがの法子も一瞬キョトンとしたが、やがてクスクス笑い出して、

「何言ってるんですか。田島さんに悪いですよ」

と言った。北野さんも笑って、

「そうですね」

と言い、右手で挨拶して、現場に向かった。

「法子」

私が声をかけると彼女は私を見て、

「中に入ろうか」

と応えて、玄関に向かって歩き出した。私は慌ててその後を追った。

私達が保養所に入って行くと、ロビーに藤堂さん達が集まっていた。みんな蒼い顔をして、法子と私の方を見ていた。

「発見された死体って、草薙さんなのか？」

皇さんが恐る恐る尋ねて来た。法子は悲痛な面持ちで、

「恐らく」

とだけ応えた。藤堂さんと裕子先輩、須美恵先輩と華子先輩、美砂江と行子が顔を見合わせた。行子は蒼いどころか、顔が白くなっていた。

「静ちゃん……」

彼女は今にも倒れそうだった。美砂江が支えてあげなければ、実際倒れていたかも知れない。

「どうなってるのよ、ホントに!？」

須美恵先輩が叫んだ。華子先輩はガタガタ震え出していた。

「くそっ……」

皇さんはやりきれないのだろうか、何度も聞こえるか聞こえないかという程度の声で、そう言っていた。親友だった人の死、そして好きだった人の死。堪え難いものがあるだろう。

「何故だ? どうして草薙さんは殺されたんだ?」

皇さんは法子に詰め寄って尋ねた。いや、ほとんど尋問している刑事のようだった。法子はそれでも冷静に対処した。

「何故かはまだわかりません。でも必ずわかるはずですよ。この世にわからないことなんて何一つあるはずがないのですから」

法子は皇さんを慰めるかのような優しい目で言った。皇さんは法子の言葉に少し安心したのか、

「そ、そうだね」

と微笑んで応えた。法子はさらに、

「とにかく今は、警察の人に任せるしかありません」

と言いつ添えた。すると須美恵先輩が、

「警察に任せておいたら、また誰か殺されてしまいかも知れないわ！ 私達で、何とかしないと…」

「でも、もしかするとこの中に犯人がいるかも知れないんですよ」

美砂江が須美恵先輩の恐怖心をあおるようなことを言った。その時華子先輩が突然走り出した。

「どうしたのよ、華子？」

須美恵先輩がビクツとして尋ねた。華子先輩は振り返りもしないで、

「家に電話するのよ！」

と怒ったように応えた。

「バカなこと言わないでよ、大和さん」

裕子先輩が言つと、美砂江は、

「バカなことじゃないですよ。中津さんが始めにそう言ったんですから。ね、そうでしょ？」

と法子に同意を求めて来た。法子は美砂江を見て、

「そうは言つてないわよ。私は武さんが保養所の中で殺された可能性があるつて言っただけよ」

と言った。美砂江はプーツとむくれて、

「何よ、はぐらかすつもり？」

「そんなことないわ」

法子は困り顔で対応していた。彼女は美砂江みたいなタイプが苦手のようなのだ。藤堂さんが、

「やめなよ、大和さん。中津さんが困つてるじゃないか。言葉尻を捕らえて揚げ足をとるようなことは、あまり感心しないな」

と法子を助けてくれた。美砂江は再びむくれたが、藤堂さんには何も言い返せないのか、黙っていた。

「とりあえず食事が用意されているから、頂こうよ」

藤堂さんのその言葉に誰も反応しなかった。私も食欲というものがすっかりなくなっていた。こんなことが何日も続けば不謹慎な考

えだが、たちまちダイエットは成功するのではないか、と思った。
それでも私達はせっかく用意してくれた給仕のおばさん達に悪い
と思い、朝食を頂くことにした。

食後、法子は私を自分の部屋に連れて行き、事件の検証を始めた。

「草薙さんはどうして殺されたのかしら？」

部屋に入るなり、彼女は私に問いかけて来た。私は一瞬面喰らったが、

「犯人を知っていることを犯人自身に気づかれたとか」

と適当なことを言った。すると法子は大きく頷いて、

「その可能性はあるわね。草薙さんのあの脅えよう、尋常じゃなかったわ」

と応じた。あれま、何てことでしょ。

「でも、もしそうだとしたら、何故草薙さんは犯人の正体がわかったのかしら？」

法子は再び問いかけて来た。私は、

「ウーン…」

と考え込んでしまった。そうそう、適当な答えは出て来ないものだ。法子は私の答えを待たずに、

「何かあるはずなのよ。草薙さんが犯人の正体を知り得たことが…」
と言い、やはり考え込んだ。

しばらくの沈黙の後、法子が口を開いた。

「それにこの事件の一番の謎は、前の三つの事件の犯人しか知り得ない殺害方法を今回の事件の犯人も知っていた、ということ。この謎が解けない限り犯人もわからない気がする」

私はあれっと思って、

「でも法子、犯人は同一人物じゃないの？ 別人だとは思えないんだけど」

と言ってみた。しかし法子は、

「いえ、犯人は同一人物じゃないわ。別人よ。さっきの謎が大きな

障壁だけど、別人よ」

と言い切った。そして、

「その謎以上に、同一人物であり得ない状況証拠があるわ。第一に、武さんが殺されたのが、部屋の中らしいこと。第二に、武さんが殺された時、バスタオル一枚を巻いていたか、何も身につけていなかったかのどちらかららしいこと。そして、第三に、草薙さんが犯人を知り得たらしいこと」

と続けた。私は頷きながら、

「そうねエ。そうよねエ。それって、前の三つの事件の犯人が、今度の事件の犯人だとすると、妙な話になるよねエ」
と同意した。するとその時、ドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

と法子が応えると、ドアを開いて顔を見せたのは、行子だった。

「戸塚さん」

私達は行子の顔色の悪さに驚き、すぐに彼女に近づいた。すると行子は、

「お願い、中津さん、犯人を捕まえて」

と言い、ワツと泣き出した。

「戸塚さん・・・」

法子は泣きじやくる行子を支えて椅子に座らせ、

「どうしたの？ 草薙さんから、何か聞いているの？」

と尋ねた。行子は、

「ええ。静ちゃん、言ってたの。『私は殺される』って。私、静ちゃんが混乱して言うてるのだと思ったので、心配しないでって言って、ちゃんと聞いてあげなかったの。私のせいだわ、静ちゃんが殺されてしまったのは・・・」

と嗚咽を抑えながら応えた。法子は微笑んで、

「そんなことないわよ。貴女のせいじゃないわ。気にしちゃだめよ、戸塚さん」

「ありがとう・・・」

行子もちよつとだけ微笑んで法子を見た。法子は真顔に戻って、
「草薙さん、他には何か言ってなかったの？」

行子は法子の問いに必死になって記憶の糸を辿っているようだ。

「あとは、また、『マガクだったのよ』って。私は何って尋ねると、『どうしてわからないの』って怒り出して・・・」

また「マガク」か・・・。何のことなんだろう？ 法子はしばらく考え込んでいたが、

「何か犯人に辿り着くものなのかもね。検証してみるわ」

と応えた。行子はその言葉に安心したように、

「お願いします、中津さん。静ちゃんの仇、とって」

「ええ。必ず犯人を見つけるわ」

行子は丁寧にお辞儀をして、部屋を出て行った。

「何だろ、『マガク』って？」

と私が言つと、法子は、ドアの方を見たままで、

「何だろうね。でも、案外、私達がうつかり見過ごしてるものかも」

「そうかなア・・・」

法子は私を見て、

「話を戻すけど、犯人が三つの殺人事件の犯人と同一人物でないとしたら、何故武さんと草薙さんを殺し、首を斬ったのか？ 三つの殺人事件の被害者の身元は、かなり時間がたってから判明したのよ。今度の事件の場合、すぐに誰なのかわかってしまった。犯人が首を斬った理由が、よくわからない」

「そうね。どうしてなのかしら？」

「それと、草薙さんと呼び出したメモを書いたのは、武さんだったのか、犯人だったのか、あるいは第三者だったのか？」

「やっぱり犯人なんじゃない？ 草薙さんを陥れようとしたのよ」と私は言ってみた。しかし法子は、

「そうね。恐らくメモを書いたのは、犯人でしょうね。でも、それは草薙さんを陥れようとしたのではないと思う。武さんの死体を発見してほしかったのよ、犯人は」

「どういうこと？」

私は法子の言おうとしていることが今一わからなかったので、聞き直した。法子は、

「犯人は急ぐ必要があったのかも知れないわ。推測でしかないけどね」

と応えた。そしてさらに、

「武さんは部屋の中で殺された可能性があるのに、湖まで死体を運んだのは何故なのか？　そして、草薙さんの死体は、どうして保養所の裏で発見されたのか？　それに、斧は何故なくなっていたのか？」

次々に湧き出て来る謎に、私は混乱していた。

「謎はつきないわ。何か糸口が見つからないと・・・」

法子は行子に言われたことを重く受け止めて必死のようだ。私も助けてあげたいけど、どうすることもできない。ああ、情けないなア。

法子はしばらくの間ジツと考え込んでいた。私も何となく声をかけられず、法子の思考に黙ってつき合っていた。

確かに謎だらけだ。この不可思議な事件、ホントに人間の仕業なのかとも思えてくる。法子の、

「この世にわからないことなんて何一つない」

という言葉思い出した。そう思いたいけど、この事件は「わからないこと」になってしまいそうな気がした。特に根拠はなかったのであるが。

沈黙が破られたのは、それから結構たってからだった。

「私達だけで考えていても解決しないわ。助けを借りましょう」

法子は田島さんにもらった茶封筒を手にして部屋を出た。私もすぐに彼女を追いかけた。

「どうするのよ？」

私が後ろから問いかけると、法子は振り返らずに、

「田島さんに聞いてみるの」

とだけ応えた。田島さんか。あの人、法子にいろいろ聞かれたら失神しちゃうんじゃないかな。ま、いっか。

外へ出てみると、まだ警察の人達は辺りにたくさんいた。鑑識の人達が様々な場所を探索し、写真を撮り、何かを採取している。しかし、田島さんと北野さんの姿は保養所の表には見当たらなかった。

「どこかしら？」

法子が周囲を見回して田島さんを探していると、

「どなたかお探しですか？」

と田島さんが後ろから現れて声をかけた。私はビクリして振り向いたが、法子はごく冷静に田島さんに顔を向けて、

「田島さんを探していたんです」

と応えた。田島さんはまた赤くなって、

「えっ？ 自分をですか？ 何でしょうか？」

ととてもかしこまった様子で言った。法子はクスツと笑ってから茶封筒を示して、

「この資料のことなんですけど」

「は、はい」

田島さんは背中に棒でも入れられたんじゃないかと思うくらい、背筋をピンと伸ばした。

「殺された人達の身元がどうやってわかったのか書かれていなかったので、教えてほしいんですけど」

と法子が言くと、田島さんは引きつった顔で微笑んで、

「あ、そのことですか。首が未だに見つかからないので歯の治療記録も使えないし、スーパーインポーズ法（重複印画法・該当者の写真と被害者の写真を重ね合わせて見る方法）も使えないですから、特定にはかなり時間がかかりました。何とか判明したのは、被害者に顔以外の身体的特徴があったからなんです」

「どんな特徴なんですか？」

法子が尋ねた。田島さんは咳払いをしてから、

「一人は虫垂炎の手術痕があり、その脇にほくろがありましたのでもう一人は臀部に碁石大のあざがあり、さらにもう一人は家族が懸命に行方を探していて、詳しい身体的特徴を警察に提出していましたが、何とかわかったんです。でも、相当時間がかかりましたが」

「そうなんですか。それに比べると、今回はすぐに被害者の特定ができましたよね」

法子はおとぼけなのか、田島さんの表情をうかがうように口にした。田島さんは法子に間近でジツと見つめられたので、また赤くなつてしまい、

「そ、そうですね。その点については、我々も関心を持っています。明らかに前の事件とは、性質が違っていますからね」

「捜査本部では今回の二つの事件をどう見ているんですか？」

法子が尋ねると、田島さんは辺りをはばかりようにして、

「自分が話したって言わないで下さいよ」

と前置きしてから、

「本部では今回の草薙さんの事件を、模倣犯による殺人と見ているようです」

「模倣犯？」

法子の顔がやや険しくなった。彼女、ちょっぴりお怒りなのかな。「草薙さんの事件はそれまでの四つの事件と違い、現場が湖の周辺ではないこと、その他様々な箇所で相違点があるので、別物と考えているようです」

「田島さん自身は、どうお考えなんですか？」

法子は「まさか貴方も」というような感じで尋ねた。田島さんはそれを察知したのか、

「自分の考えは違います。むしろ別に扱うべきは前の三つの殺人事件であり、武君と草薙さんの事件はつながりがあると考えています。そう考えないと、説明がつかないことがあると思うんです」

と答えた。法子はニツコリして、

「例えば、どんなことですか？」

と尋ねた。田島さんは頭を掻きながら、

「例えば、前の三つの事件の被害者は東京出身者ですが、どの人も行方不明になって何日かたってから死体で発見されています。しかも未だに榛名湖畔に来るまでの足取りは掴めていません。それに比べて今回の武君と草薙さんの事件では、二人は榛名湖畔に来てから殺されています。この違いは大きいと思います」

と見解を述べた。法子は大きく頷きながら、

「そうですか。あともう一つ、いいですか？」

「は、はい、どうぞ」

田島さんはビクツとして言った。法子は真顔に戻り、

「草薙さんが武さんに呼び出されたと言っていたメモ、見つかりましたか？」

「いえ、見つかっていません。当初は草薙さんが容疑濃厚でしたので自分らはさして気に留めていませんでした。彼女が嘘をついていると考えていたんです。今にして思えば大変な失策でしたが」

と田島さんは、実に申し訳なさそうに答えた。

「そうですね。あの場合、信じろと言う方が無理かも知れませんか」「はア……」

田島さんはすっかり落ち込んでしまったようだ。法子もそれに気づいたらしく、

「ごめんなさい、別に私、田島さんを非難しているわけじゃないんですよ」

「は、はい」

「それから、一つお願いがあるんですけど」

「は、はい」

法子はあまりにまつすぐな田島さんの反応を見て、クスツと笑い、「『マガク』という言葉について何か事件に関係あることがないか、調べてほしいんです」

「『マガク』ですか？　どういうことですか？」

田島さんは何のことだろうという顔で尋ねて来た。法子は、

「草薙さんが何度も口に使っていた言葉なんです。何か気になるので」と説明した。田島さんはちょっと考え込んだが、やがて、

「わかりました。調べてみます」

と真顔で応えてくれた。

「お願いします」

法子も真顔で言った。その時、

「おい、田島、ちょっと来てくれ」

遠くで北野さんの声がした。田島さんは、

「はい、今行きます」

と大声で応えてから、

「では、自分はこれで」

と言い、立ち去った。法子はしばらく田島さんを見送っていたが、

「謎、どれか一つでも解けるといいな」

と呟いて私を見た。私は頷いて、

「そうだね。それより法子」

と言つてニヤニヤしてみせると、法子は、

「何よ、変な笑い方して。どうしたの？」

私はますますニヤニヤしながら、

「田島さんとホントにお見合いしてみた？ 結構いいかもよ、彼」

「何言つてるのよ。田島さんみたいな人にはもう素敵な彼女がいるわよ。私なんか相手にしてもらえないわ」

と法子は笑いながら答えた。ホント、この娘、そういうことに関しては鈍感なんだな。あのホームズばりの観察力は、どこに行っちゃうんだろ。田島さんのあの反応見て自分に気があるって気づかないなんてさ。あ、それともとぼけてんのかな？ でもそこまでイジワルじゃないよな。

「とにかくバラバラの謎が一つにつながらないと、この事件、犯人像が見えて来ないわ」

法子の顔はすっかり探偵の顔になっていた。するとそこへ、

「中津さん、思い出したことがあるんだけど」

と行子が現れた。法子は行子を見て、

「思い出したこと？ どんなこと？」

とカフェテラスに向かって歩きながら尋ねた。行子は私と共に法子を追いかけながら、

「静ちゃん、神社を気にしてたの。神社に行けばわかるって…」

「神社に行けば、わかる？」

私がオウム返しに尋ねた。行子は頷いて、

「ええ。そう言われたの」

と応えた。法子は椅子に腰掛けながら、

「とにかく詳しく教えて、戸塚さん。一体どういうことなのか」

「ええ」

行子と私も椅子に座った。行子のその話は事件の核心に迫る重要

なものであったが、その時は私も法子もはつきりとわかっていなかった。

第十九章 行子の話 9月 2日 午前11時30分

「戸塚さん、どうして草薙さんがそんなことを言い出したのか、順を追って説明して」

法子が行子を促した。行子は頷いて、

「ええ。私、榛名富士から戻って最初に静ちゃんの部屋に行った時、静ちゃんをなごまそうと思って、神社の話や榛名富士の山頂から見たきれいな景色の話をしたの。静ちゃんは全然関心を示してくれなかったんだけど、神社で写真を撮って絵馬を買ってみんなの名前を書いて奉納したって言ったら、やっと『私と尊通さんの名前も書いてくれた?』って、話に乗って来てくれたの。ようやく静ちゃん、武さんとのケン力を忘れられたんだなってその時は思ったわ」

法子と私はただ相づちを打つだけで、言葉ははさまない。行子は続けた。

「それから武さんが殺されたってわかって、静ちゃん、混乱している言うって大変だったんだけど、私、静ちゃんが言ってた『マガク』っていう言葉ばかりが印象に残ってて、他に静ちゃんが言ってたこと、ほとんど忘れてたの。そんな中で、さっき言った『神社に行けば、わかる』っていう言葉を思い出したの」

「じゃあ、何故草薙さんがそんなことを言ったのかわからないのね?」

と法子が言つと、行子は力なく頷いて、

「ええ。ごめんなさい、役に立たないわね、こんな話」

「そんなことないわ。何となく見えて来たのよ、今の戸塚さんの話で」

法子は頂上が見えて来た時の登山者のように、充実した顔をしていた。

「もう一息つてとこね、頂上まで」

彼女は言った。私はキョトンとして、

「何かわかったの？」

と尋ねた。法子はニコツとして、

「ええ。わかったわ。あとは、どうやってそれを証明するかなんだけど」

ということとは法子は犯人が誰かわかったのだろうか？ 興味があったが、怖くて確かめられない。

「戸塚さん、草薙さんは武さんのメモのこと、何か言っていなかった？」

と法子は質問を続けた。行子は小首を傾げて、

「そうね…。なくしたんじゃないって、言っていたような気もするけど…」

と応えた。法子は大きく頷いて、

「そう。なくしたんじゃないってね。あとどうして自分は殺されると思ったのか言っていなかった？」

行子はさつき以上に考え込んだ。ちよつと出て来ないようだ。

「言っていたことははっきり覚えてないけど、静ちゃん、犯人を知っているようだった。今思い出してみるとそんな気がするってだけなんだけど」

行子は記憶の糸を必死で辿りながら応えた。さすがにエラーリー・クイーンファンだ。細かいことまでよく思い出してる。すごいよな。

「よし。畏を張ろうか」

法子は唐突に言った。

「えっ？」

私と行子は顔を見合わせてから、同時に法子を見た。

「どういうこと？」

と私が尋ねると、法子は私を見て、

「もう少し待って。警視庁に連絡して切り裂きジャックをまず逮捕してもらわないとね」

「ええっ!？」

私と行子は、ますますわからないという顔で、法子を見た。

「とにかく、戸塚さん、今の話私が言っていていつて言うまで、誰にも話さないでね」

「ええ、わかったわ」

行子はビックリしたように法子を見て、応えた。

「さっ、中に入りましょ、もうお昼よ」

と法子は言い、カフェテラスを離れた。

法子は昼食の間、何事もなかったかのように普通に、私や行子、そして裕子先輩達と会話をかわした。私には法子がどうするつもりなのかはつきりわからなかったので、内心ドキドキものだった。

食後、法子は警視庁に電話をかけた。もちろんうるさい須美恵先輩と華子先輩、そして美砂江に見られないように。

「さっ、作戦会議よ」

法子は私と行子を自分の部屋に連れて行った。

「どうするの、法子？」

私がたまりかねて尋ねると、法子は真顔で、

「警視庁の知り合いの話では、私達の大学のことはかなり有力な情報だったらしいわ。切り裂きジャックが逮捕されるのは時間の問題みたいよ。彼もまさか、警察が被害者のつながりが大学だと突き止めたとは夢にも思っていないでしょうからね」

「切り裂きジャックが逮捕されると、何がわかるの？」

私ははぐらかされた思いを抱きながら、重ねて尋ねた。法子は、

「切り裂きジャックと今度の殺人事件の犯人との接点よ」

「接点？」

私はオウム返しに言った。法子は頷いて、

「そう。その接点こそが、今回の事件の犯人がどうして切り裂きジャックの殺害方法を知り得たのかを教えてくれるはずだわ」

と説明してくれたが、私にはどうも理解不能だった。

「だからあとは待つだけ。じゃ、解散ね」

法子は私と行子を部屋から追い出し、ドアを閉めてしまった。私は三たび行子と顔を見合わせてしまった。

「どうしよう?」

行子が尋ねて来た。私は肩をすくめて、

「仕方ないから部屋で法子待ちね」

と言い、行子を残して自分の部屋に戻った。

第二十章 法子の囃 9月 2日 午後10時

「湯の町の切り裂きジャックの異名で呼ばれ、群馬県の榛名湖畔周辺の住民や観光客を震え上がらせていた通り魔殺人事件の犯人が、今夜18時、警視庁八王子署に逮捕されました」

私達はロビーにある大画面のテレビで「切り裂きジャック逮捕」のニュースを見ていた。法子の言った通り逮捕まで本当に時間の問題だったようだ。

「犯人は八王子市にある私立大学の法学部の助教授で、三つの殺人事件の動機は、一つは不倫、一つは借金の返済、そしてもう一つは、仕事上のトラブルということと事件の異常性と共に、その複雑な背景が今後の取り調べでどう判明して行くかが注目されております」

ニユースキャスターがそこまで言った時、皇さんが、

「俺達の大学がポイントだとは思っていたけど、まさか法学部の助教授が犯人とは思わなかったなア」

「そうだな」

藤堂さんも、複雑な表情で画面を見つめていた。

「犯人がこの犯行を思い立ったのは、キャンパスで偶然拾ったノートの中味だということです。そのノートには推理小説の設定資料が書かれており、それをもとに今回の事件を考えついたということです」

キャスターは呆れ顔になり、

「全くもって、推理小説を地で行こうとした稚拙な考えの持ち主と言うべきでしょう」

と言い添えた。その言葉は別の意味で私達に衝撃的だった。

「推理小説の資料が犯行を思い立った原因だったなんて……」

裕子先輩は悲しそうに呟いた。実際に推理小説を書いている華子先輩と須美恵先輩は顔を見合わせたまま押し黙っていた。

「稚拙なんかじゃないですよ。少なくとも警察は、私達が偶然気づ

いたことを知らされていなければ、未だに犯人を逮捕することができなかったでしょうから」

法子が口を開いた。美砂江はテレビに目を向けたままで、「そうよねエ。テレビのワイドショーで犯罪心理学の専門家や推理作家とかが、犯人像について分析してたけど、その中の誰一人として犯人は大学の助教授だなんて言ってなかったものね」と身震いしながら言った。

「考えてみれば、あの先生の講義受けてたのよね」

「ようやく華子先輩が声を出した。須美恵先輩は頷いて、何か今さらながらゾツとするわね。全然そんな素振りなかったから」

「そつだな。俺もあの先生のゼミに出ていたんだ。何か嘘みたいな話だよな」

皇さんは溜息を吐きながらそう言った。

「でもまだ、武さんと草薙さんを殺した犯人は捕まっていません」
法子のその一言は、そこにいる一同を真冬の北海道の原野に放り出すような強烈なものだった。

「でも大丈夫です。草薙さんが言い残してくれた言葉で犯人がわかりそうなんです」

藤堂さんや皇さんはお互いに顔を見合わせ、囁き合っているようだ。華子先輩と須美恵先輩もそうだ。

「戸塚さん、何だっけ？」

法子は行子に言った。行子は頷いて、

「静ちゃん、『神社に行けば、わかる』って言ってたんです」

と一同に言った。法子は、

「ですから明日、高崎署の田島さんに連絡して榛名神社に行ってみようと思っています」

と付け加えた。藤堂さんが、

「中津さんは犯人が我々の中にいると考えているのか？」

と尋ねた。法子は首を横に振って、

「それはまだわかりません。でもやがて明日にはその答えが出ると
思います」

こうして法子の罨は張られた。しかし私には同好会の人達の中に
犯人がいるとは、どうしても思えなかった。

それから私達は各自の部屋に戻った。

しばらく私は、ベッドに横になってボンヤリと天井を眺めていた。
「はい？」

ノックの音に我に返り、ロックを外してドアを開いた。入って来
たのは法子だった。彼女は廊下に誰もいないのを確認してからドア
を閉じ、私を見た。

「どうしたの？ 妙に警戒してない？」

と私が尋ねると、法子は頷いて、

「ええ。だれにも気づかれないうちに保養所を出て、榛名神社に行
くの」

「えっ？」

私はギクリとして法子を見た。ということは当然のことながら…。

「私も？」

「そうよ」

法子はニコニコして言った。私は呼吸を整えてから、確実に喋ろ
うと意識して声を発した。

「どうということなの？」

「さっき私がロビーで言ったのは挑発なのよ。犯人を神社に行かせ
るためのね」

「何ですって!？」

私は大声を出してしまってから、慌てて口を手で押さえた。この
行為、何の意味もないのよね。

「だから私達で先回りして、犯人を待ち伏せするの」

「ほ、本気なのオ？」

私は身震いして問い正した。法子は真剣な顔つきになって、

「ええ、本気よ。私が知る限りではまだ物証がないのよ。というよりももう少しで手に入ると思うの。明日になれば、その答えがはつきりすると思うんだけど」

と答えた。私はますますわからなくなり、

「どういう意味なの？」

と尋ねてみた。法子は、

「犯人が誰かわかった時いくつか引くかかることが思い浮かんで来たので、それを確かめるために、田島さんに調査をお願いしてあるの」

「えっ？ 田島さんに？」

田島さん、今頃張り切ってるんだろうなア。

「それから警視庁にもお願いして、犯人が持っていた設定資料の一部をFAXしてくれるように言っているの」

「そうなの……」

確かにそこまで手回ししてあれば、あとは犯人を言い逃れのできない状態で捕らえればOKだ。でも……。

「大丈夫なの？ 犯人がもし襲いかかって来たらどうするのよ？」

「その可能性がないとは言えないけど、不意を突けば絶対取り押さえられるはずよ」

「ウーン、何か不安だなア……」

私が腕組みして考え込むと、法子は、

「お願い。こんなこと頼めるの、律子だけなのよ」

と手を合わせて懇願するような目で、私を見た。私はその目にノックアウトされた気分だった。

「わかったわ、法子さん。おつき合いますわ」

「ありがとう、律子！」

法子はよほど嬉しかったのか、私に抱きついて来た。私は何故かドキドキしてしまった。

それからしばらくして、私達はそつと保養所を抜け出した。そし

て脇を通っている道路まで行くと、黒塗りのセダンが停まっていた。どうやら田島さんらしい。なーんだ、ドキドキして損しちゃった。

「本気ですか、中津さん？」

田島さんは助手席に乗り込んだ法子に尋ねた。法子はシートベルトをしながら、

「もちろん本気です。行きましょう、田島さん」

と応えた。田島さんはあまり乗り気ではないようなのだが、

「わかりました」

と応え、セダンを発進させた。

しばらくしてセダンは榛名神社の山門の前まで来た。

「自分は車をどこかに隠してから行きます。先に行っていて下さい。すぐに後を追いますから」

田島さんは私達を降ろすと、走り去ってしまった。急に寂しさが増長し、恐怖が心の中を埋め尽くし始めた。

「行くわよ、律子」

法子は懐中電灯を点けて、さっさと歩き始めてしまった。

「待ってよ、法子」

私は慌てて彼女を追いかけた。

少し先に進んだところで、やっと田島さんが追いついて来た。私は少しホッとした。

「もう少しね」

法子が囁いた。最後の階段を昇り、本殿の前に出た。誰もいない夜の神社なんてもう二度と来たくない。そう思うくらい恐ろしかった。

「どこかに隠れましょう」

と法子が言い、私達は本殿の脇に身を潜めることにした。

「来るのかしら、犯人」

と私が囁くと、法子は、

「来るわ。犯人にはもう時間がないんだから」

「……」

私は思わず田島さんと顔を見合わせてしまった。

どれくらい待ったのだろうか？

誰かが階段を駆け上がって来る気配がした。

「来たようね」

法子が呟いた。私の心臓は今にも肋骨を破って出て来そうだった。犯人の影が見え、やがて夜の闇に紛れたその本体が私の視界に入った。犯人は懐中電灯を出し、絵馬が下げられているところに近づき、舐めるように絵馬を調べ始めた。探しているのだ。私達が奉納した絵馬を。

「切り裂きジャックさん、もうやめましょう、こんなお芝居は。もう幕引きよ」

法子が不意に飛び出し、犯人を挑発した。これには田島さんもビツクリし、すぐさま法子と犯人の間に入った。そして、

「高崎署刑事第一課の田島だ。動くな」

と怒鳴った。すると犯人はダツと逃げ出した。

「逃がすか！！」

田島さんは果敢にも犯人にタツクルして押さえ込み、逃亡を阻止した。法子が転がった懐中電灯を手に持ち、

「往生際が悪いわよ、切り裂きジャックさん」

と犯人の顔を照らした。

第二十一章 法子の対決 9月 3日 午前 5時

私は懷中電灯の光の中に浮かび上がった犯人の顔を見て仰天した。
「と、藤堂さん！」

私の大声が神社の境内で反響し、木霊となつて返つて来た。その間に法子は田島さんと協力して、藤堂さんの手首と足首を田島さんが持つて来たロープで縛つてしまった。

「一体何のマネだい、中津さん？ 僕が切り裂きジャックだつて？」
藤堂さんは悪い冗談を否定するような口調で言つた。法子は藤堂さんを見下ろして、

「まだおとぼけになるんですか？ ではここへは何しに来たんですか？」

と尋ねた。しかし藤堂さんは、

「恐らく君達と同じだよ。草薙さんが言っていた『神社に行けば、わかる』という言葉が何を意味するのか、調べに来たのさ」

と言い逃れのようなことを言つた。法子はすかさず、

「それは変ですね。貴方は何のためらいも迷いもなくまっすぐに絵馬の掛けられているところに行きました。まるでそこに答えがあるのを知っているかのように」

と言い返した。藤堂さんの顔はほんの一瞬だが焦りの色を見せた。でも、

「偶然さ。ここへ来てたまたま絵馬のことが最初に頭に思い浮かんだからだよ」

と冷静に応じて来た。法子はさらに、

「では何故逃げたりしたんですか？」

「いきなり君に声をかけられてビックリしたからだよ。特別わけはないさ」

「そうですか」

法子のその声は全く藤堂さんを信用していないという声だった。

藤堂さんは当てられている懐中電灯の光を眩しそうに見ながら、
「なるほど。君はどうしても僕を犯人に仕立て上げたいらしいね。
いいだろう。僕も推理マニアだ。君がどうしても僕のことを犯人だと
考えたのか、そのわけを聞かせてもらおうか」
開き直りともとれる言葉だった。

「わかりました。何故貴方が切り裂きジャック、いえ、もう一人の
切り裂きジャックなのか、お話ししましょう」

法子はジッと藤堂さんを見つめて応えた。

「まず、草薙さんの姿が見えないのでみんなで外に探しに出た時の
ことを思い出してみてください。私達は湖の方へ草薙さんを探しに行
き、彼女を見つけました。その時のことが、私の心の中でずっと引
つかかっていたんです。何かわからないけど気になっていたんです」
「何のこと？」

藤堂さんは微笑んでみせた。この人、ホントに犯人なのだろうか、
と思ったほどだ。それに対し、法子は真顔のままで、

「倒れている草薙さんを見つけた時、近づこうとした私を手で制し
て貴方は私に救急車を呼びに行くように言いました」

と続けた。すると藤堂さんはちよつと肩をすくめて、

「当然のことを言っただけだと思うけどなア。そのどこが引つか
かるって言うのさ？」

と尋ねた。法子は私の方をチラッと見てから、

「それだけだったら引つかかったりしないんです。でも貴方は草薙
さんに近づくと、手首に手を当てて脈を診ました。妙ですよね」

「どういうこと？」

藤堂さん不思議そうだった。私と田島さんにとってもそれは不思議な
話だった。

「普通は逆ですよ。人が倒れているのを見つけたらまず脈を診て、
それから救急車を呼ぶのか、警察を呼ぶのか、判断するのではない
ですか？」

「そうかなア。いや、仮にそうだとしてもあの時はあれでいいと思

「つたんだらう。妙なことじゃないと思うよ」

「そうでしょうか。今から考えてみるとあの時の貴方は、草薙さんは氣を失っているだけだとわかっていたように思えるんですけど」

法子は皮肉めいた口調で言った。藤堂さんはフツと笑って、

「そうかねエ」

と呟いた。そして、

「たったそれだけのことで僕のことを犯人だと思ったの？ それじゃ他の誰もが犯人たり得るんじゃないかな」

と逆に言い返すような口ぶりだ。しかし法子はひるんだ様子はなかった。

「それだけではないんです。もう一つ、貴方でなければできないことがあるんです」

「僕でなければできないこと？ 何それ？」

藤堂さんは相変わらず余裕のある笑みを浮かべていた。

「草薙さんに近づき、武さんが渡したというメモを奪うことです。

実際あの時、草薙さんの身体に触れたのは貴方だけで、私も律子もそして大和さんと戸塚さんも触れていません」

法子の言葉に藤堂さんは少しも動じた様子がない。

「でもそれは、草薙さんの言葉を信じてという前提条件があつての、とても貧弱な推測だよ、中津さん。何の証拠にもならないね」

「そうかも知れませんが。今の話は推測でしかなく、しかも決して実証できるようなことはありません」

「だったら、もうこのロープをほどこいてくれないか？」

藤堂さんはきつく巻かれたロープを見て言った。でも法子は、「いいえ。今のは私が貴方を疑い始めたキツカケに過ぎません。貴方はいろいろなところでエラーを犯しているんです」

「まだあるのか、僕が犯人だという根拠が？」

「ええ、あります」

上目遣いで自分を見ている藤堂さんを法子は正視したままで言った。

「刑事さんが連絡先と氏名を書いて下さいと言って、便せんを渡してくれました。あの時、貴方が代表して全員の氏名と住所を書いたんですよね？」

「ああ、書いたよ。それがどうかしたの？」

藤堂さんはまた微笑んでみせた。もしホントにこの人が犯人のなら、とんでもない心の持ち主だ。

「貴方は全員の名前を書き、刑事さんに武さんの氏名と住所も書くように言われ、書きました。その時、貴方は武さんの『尊通』の『通』を書き間違えたんです」

「書き間違えた？」

藤堂さんは何のことだ、という顔つきで法子を見た。法子は田島さんから手帳とペンを借りて、余白を開いて字を書いてみせた。

「いいですか、藤堂さん。『尊通』の『通』はしんにゆうの中はこうなんです」

と、「甬」という字を書いてみせた。途端に藤堂さんの顔色が悪くなっていくのがはっきりわかった。

「それなのに貴方はこう書いたんです」

法子は次に「角」と書いてみせた。藤堂さんは顔中から汗を吹き出し、唇を震わせていた。法子は田島さんに手帳とペンを返した。

「おわかり頂けましたか？ 貴方はずっと『通』という字を書き間違っていたのですよ。そして草薙さんも、貴方がいつもそう書き間違っていることに気づいたんです。だからこそあの時、彼女は震え出し、逃げ出してしまったんです」

藤堂さんが顔をうつむかせたので法子はそれを覗き込むようにしてしゃがんだ。

「草薙さんは、その前にも同じ字を見ているんですよ。彼女は神社に来ていませんから、どこか他で見ているはずですよ。そして震え出してしまふようなものにその誤字を見ていたのです。それは一体どこに書かれたものだったのか？」

法子はそう言うのと立ち上がった。藤堂さんはうつむいたままだ。

「草薙さんがその誤字を見たのは、武さんからのメモだったのです。そのメモに藤堂さんが間違えたのと同じ字が書かれていたので草薙さんは震え出したんです。何故なら、そのメモを書いた人物こそが武さんを殺した犯人だからです」

と法子は続けた。そしてさらに、

「草薙さんが『神社に行けば、わかる』と言ったのはそのことだったんです。この榛名神社にも、貴方が書き間違った『通』が書かれた絵馬がありますからね」

その時、私にも「マガク」という謎の言葉の意味がわかった。法子は私を見て、

「律子の考え通りよ。草薙さんは、実は『マガ、クだった』と言いたかったのよ。でも、戸塚さんがそれを『マガク』という言葉に聞き取ってしまったので、意味不明の言葉になってしまったの」

「そうってから再び藤堂さんを見た。すると藤堂さんは、
「そういうことか。しかし、それもやはり草薙さんの話を信用して
という大前提があつてのことだよね」

とニヤリとして言った。法子は微笑み返して、

「そうですね。まだ証拠としては空想の域ですね」

と言った。しかし、彼女の目は決してひるんでいなかった。法子はさらに続けた。

「武さんが発見された時のことをもう一度よく思い出してみてください」

私はその時の情景を思い出し、ゾツとした。また腰が抜けそうだった。

「……」

藤堂さんはニコリともしないで黙って法子の話を聞いている。法子はそれを確認するように藤堂さんを見てから、

「あの時、私達は草薙さんに近づきました。そしてさっきの話にも出ましたが、貴方が草薙さんに近づき、脈を診て気を失っているだけなのを確認しました。その後のことなんです」

「何？」

藤堂さんはムスツとした声で尋ねた。法子は逆にニコツとして、
「貴方は他の誰にも気づかないことに気づいたんです」

「……？」

藤堂さんはキョトンとしている。私にも法子の言いたいことがわからなかった。法子は真顔になり、

「貴方は、棧橋の端に人間の足が出ていることに気づいたんです」

あつ、そのことか。？ えっ？ どういうこと？

「私はもちろんのこと、律子も大和さんも人間の足には気づきませんでした。しかも貴方は、『人間の足じゃないか』と正確にそれを指し示し、言い当てたんです」

「……」

藤堂さんのキョトンとした顔が少々引きつり気味になった。法子はそれに気づいて、

「そうなんです。貴方の行動は不自然なんです。草薙さんが倒れているのを見て救急車を呼ぶように言ってみたり、誰も気づかない人間の足に気づいたり……。まるで一度現場に来てあたりを確認してあるかのような行動なんです」

と続けた。藤堂さんは何かを言いかけたが声には出さず、口を閉ざした。

「でもそれも、私の思い込みと言われればそれまでですよ。ですから私は今、時間稼ぎをしているんです」

「……？」

藤堂さんは訝しそくに法子を見た。法子は肩をすくめて、

「それは追々わかることですから話を先に進めましょうか。さて、武さんの遺体には首がなく、着衣は何も身に着けていませんでした。武さんの遺体を湖から引き上げたおまわりさんは、すぐに『切り裂きジャックの仕業だ』と断定しました。それほどこの辺りの警察関係者にとって、湯の町の切り裂きジャックは名を馳せているのです」と言った。私は気を失いそうになるのを必死になって堪えた。ああ、

でも気分が悪い。

「それはまさに貴方の狙い通りでした。武さんを殺したのは、湯の町の切り裂きジャックであると思い込ませることこそ、貴方の考えだったのですから」

「しかし、もしもだ。もし仮に僕が犯人だとしたら、首を斬って遺体を湖畔まで運ぶなんてことはしないよ。それはとても大きなリスクを背負うことになるからね」

藤堂さんはもう耐えられないというような口調で反論した。しかし法子は、

「それ以上のリスクがそうしなければ発生してしまうとすれば、首を斬り、遺体を湖畔まで運ばざるを得なくなりますよ」

「それ以上のリスク？」

藤堂さんの眉が釣り上がった。何言ってるんだ、こいつという顔である。法子は真顔のまま藤堂さんを見つめ、

「そうです。武さんの遺体は発見してもらわなければならない。しかし、そのままでは自分が犯人であることがはっきりわかってしまう。ならばそれがわかってしまう状況を取り除き、その上で捜査を惑わせるような方法を考えればいい」

「……」

藤堂さんは再び沈黙した。法子は一息吐き、続けた。

「首を斬りリスクを冒してまで遺体を湖まで運び、沈める。しかも発見してもらわなければならないから足だけ出しておく。そういう行動をとったのはひとえに凶器と犯行現場をわからなくし、切り裂きジャックの犯行と見せかけるためなのです」

藤堂さんはついにうつむいた。法子の話が核心に迫ったためであろうか。私は、さっきまでの気を失いそうな気分の悪さはどこかに行ってしまい、彼女の推理の展開にこの上なく興味をそそられていた。

「何故首を斬ったのか？ 単に切り裂きジャックの犯行に見せかけただけなのなら、リスクを冒してまですることではない。不可能

犯罪にしたいがために密室殺人のトリックを考えるのより愚かなことです」

法子の目は藤堂さんを見たままだが、藤堂さんはうつむいたままだ。

「理由は別にありました。武さんの首がそのまま残っていると、凶器が特定されてしまう恐れがあるからです」

藤堂さんはピクリとした。何かナイフを首に押し当てられたかのように、顔色が悪くなって行くのがはつきりと見て取れた。

「凶器が何なのかをお話する前に、武さんの遺体が発見された日の早朝のことを思い出して下さい」

「……」

藤堂さんはまさしく、恐る恐る法子の顔を見上げた。法子は頷いて、

「そうです。貴方は、皇さんと一緒にゴルフ練習場に行きました。その後のことです」

と続けて言った。彼女は私をチラツと見てから、

「貴方はアイアンを折ってしまい、意気消沈して帰って来ました。その上、そのアイアンはそこに処分を頼んで来たということでした。妙です。お気に入りのアイアンですよ。仮に折ってしまったとしてもそんな簡単に手放したりしないでしょう」

と藤堂さんに顔を近づけて問いつめるように言った。藤堂さんは法子の顔をまともに見られないのか、またうつむいた。

「私、そのことが引つかかっていたんです。そして貴方が犯人だということがわかった時、アイアンを処分してもらった理由もわかったんです」

法子は近づけた顔を離して言った。藤堂さんはギョツと唇をかみしめた。

「武さんを殺した凶器であるアイアンをごく自然に自分の手元から離し、処分してもらう。これがアイアンを置いて来た理由です」

「……」

藤堂さんは再び法子を見上げ、何かを言おうと口を動かしたが、言葉を呑み込んでしまったかのように声には出さなかった。

「そして貴方は貴方が犯人であることに気づいた草薙さんを殺してしまった。武さんを殺した動機はわかりませんが、草薙さんの殺害理由は口封じです。貴方は草薙さんを殺して首を斬り、武さんと同じように湖に沈めるつもりでした。でも、管理人さんが思いがけなく早く起きて草刈りを始めてしまったので草薙さんの遺体を途中で投げ出し、逃げなくてはなりませんでした」

法子はそこで一旦言葉を切り、空を見上げた。少し明るくなって来たようだ。

「夜が明けて来たようですね」

法子は独り言のように言った。

「君の推理はまさに君の推奨するポオのデュパンに迫るようなものだっただよ。でも悲しいことに、何一つ証拠がないな」

藤堂さんの表情に余裕の色が見え始めた。その目は法子を哀れんでいるかのようにだ。法子は藤堂さんに視線を戻し、

「そうですね。今のところは何もありません」

証拠がない。これは法子にとってかなり致命的だった。

第二十二章 法子の解決 9月 3日 午前 7時

「でも、まだ決定的とも言える証拠があるんです。いえ、あると思われます」

「……」

藤堂さんは勝ち誇ったかのようにニヤリとした。法子の言葉を負け惜しみくらいにしか思っていないようだ。次の瞬間、

「お嬢さん！」

と階段を駆け上がったて来た北野さんが大声で叫んだ。私達はいつせいに北野さんを見た。

「何とか間に合ったみたいですね」

北野さんはゼイゼイ息を切らせて言った。彼は手に持っていた大きな封筒を法子に手渡した。

「これがそうですか？」

法子は中を覗きながら尋ねた。北野さんは大きく頷いて、

「ええ、そうです。貴方のご注文通りのものですよ」

と応えてからキツと藤堂さんを睨みつけた。藤堂さんはビクツと、しにやけるのをやめてしまった。

法子は封筒から紙を二枚取り出した。それはビニール袋に入れたもので、一枚はルーズリーフの用紙で、もう一枚は便せんのようだった。あれ、この紙、どこかで見たような……。

「よく見て下さい。私、FAXで間に合わせようと思ったんですけど、北野さんが東京まで行って本物を借りて来てくれたんです。助かりました」

法子は北野さんにニコツとしてお辞儀をした。北野さんは頭を掻いて照れ臭そうだ。法子は藤堂さんに向き直り、

「こちらが切り裂きジャックが持っていた推理小説の資料です。全てワープロで打たれていて、誰が作ったものなのかはわかりません。いいそうです」

法子はルーズリーフの用紙を藤堂さんに示した。藤堂さんはそれをチラッと見て、

「それがどうかしたのか？」

と尋ねた。法子は次に便せんの方を見せて、

「こちらには見覚えがありますよね？」

と言った。藤堂さんはまたしてもチラッと目をやっただけで、

「ああ。あの日、僕がみんなの住所と名前を書いた紙だよ」

とムツとして応えた。法子は大きく頷いて、

「では、私の質問に答えて下さい。この二つの紙には一種類だけ同じ指紋が残っていました。それは誰の指紋でしょうか？」

と藤堂さんをジッと見つめて尋ねた。余裕シヤクシヤクの藤堂さんの顔が再び蒼ざめた。

「……」

藤堂さんはうつむいてしまい、何も答えようとしなない。すると、
「お前の指紋だよ。自分でもそう思ったから答えられないんだろう？」

田島さんが身を乗り出し、今にも藤堂さんに殴りかからんばかりに言った。法子はそんな田島さんの突き出された右手に自分の右手を重ねて、

「田島さん、落ち着いて下さい」

「は、はア……」

田島さんは法子に手を触れられたのとたしなめられたのとで、耳まで赤くなつて下がった。可愛い人ね、この人。

「そうなんです。貴方の指紋らしきものが資料と便せんに残っていました」

と法子が言つと、何故か藤堂さんはまた元気になつたようだ。法子を正面から見据えて、

「それがどうしたんだい？ 推理小説の資料に僕の指紋がついていて、便せんについていたからつてそれが何の証明になるのさ？ 百歩譲つて資料が僕のものだとしても、それは僕が犯人である証拠に

はならないよ」

と反撃に転じた。この人、ホントにああ言えばこう言う人だなア。しかし法子はそういう反撃を予測していたかのような顔で、

「では次の質問です」

と言ってから、もう一つビニール袋に入っているものを取り出した。それは折れたゴルフクラブのヘッドだった。あつ、それってもしかして……。案の定、藤堂さんの顔が白くなった。法子はかまわず続けた。

「私、ゴルフ練習場に電話して貴方のアイアンを処分しないようにお願いしたんです。そして北野さんに回収してもらい、科学捜査研究所に検出を依頼して大急ぎで持って来てもらったんです」

藤堂さんは口ウ人形のような顔色になり、動かなくなった。

「質問に入ります。このアイアンから検出された指紋と血痕は誰と誰のものでしょうか？」

と法子が尋ねると、さすがの藤堂さんももうなす術がないと判断したのか、苦笑いして、

「わかったよ。もう降参だ……。悪アガキはこの辺にしとこう……」

と言った。法子はニツコリして、

「そうですか。良かった」

とホッとしたように封筒を北野さんに返した。

「確かに君の指摘した通り、武と草薙さんを殺したのは僕だよ。認める……」

藤堂さんの口調はいくらか自嘲めいていた。北野さんと田島さんは顔を見合わせてから藤堂さんを見た。

「一つ、訊いていいかな？」

藤堂さんはまっすぐ法子を見て尋ねた。法子も藤堂さんを見て、

「何でしょうか？」

「いつ僕が犯人だと思ったんだ？」

その質問は敗者にとって一番気になるところであろう。法子は少し間を置いてから、

「犯人だと思つたのがいつかは私自身はつきり言えませんが、変だなと思ひ始めた時は明確に覚えています」

と答えた。藤堂さんは興味深そうな顔をして、

「それは一体いつ？」

「北野さんが私達に事情聴取をした時です」

「事情聴取の時？」

北野さんは自分の名前が出たので法子に顔を向け、次の言葉を待つていた。法子は、

「ええ。あの時、武さんの姿が見えないという話になつたのに貴方は言つべきことを言わなかつたのです」

「えっ？」

法子の発言には、藤堂さんはもちろんのこと、私や田島さん、そして北野さんまでが、キョトンとしてしまった。

「それ、どういうことなの？」

思ひあまつて、私は口をはさんだ。すると法子は私を見て、

「藤堂さんは武さんの部屋に行つたはずなのに、そのことを話さなかつたのよ」

「えっ？」

ますますキョトンとする私。しかし、藤堂さんは何か気づいたようだった。

「そうか。君はその前の日の夜、僕が武の部屋に行くと云つたことを覚えていたんだね。そしてその話を口にしなかつた僕の態度を変に思つた、ということか」

な―るほど。そう言えば、藤堂さん、そんなこと云つてたっけ。全く忘れていたなア。

「はい。話さないこと自体は何も不自然じゃありません。でもあの場合、武さんの行方が話題になつてゐるのにそのことを口にしないのは変だなつて思つたんです。その時は、私にとつてもそれだけのことでしたけど」

と法子は応じてから、

「それからいくつかのことがつながり始めたんです。『マガク』のこと、そして武さんの死体を発見した時の貴方の奇妙な行動。全てつながったのは、残念ながら草薙さんが殺されてしまってからでした」

と続けた。彼女はちよつと悲しそうな顔をしたが、すぐに厳しい表情になり、

「どうしてもわからないことがあります。貴方は何故武さんを殺したのですか？ 教えて下さい」

その言葉に藤堂さんの顔も厳しいものになり、微笑みがもれていた口元が、キツと固く結ばれた。

「あいつは僕を侮辱したんだ。だから、殺した」

「そ、そんなことで人を殺したのか？」

北野さんの声は怒りに満ちていた。藤堂さんは北野さんに顔を向けて、

「もちろん、それだけじゃありません。僕だってそれほど短絡的な人間じゃないですから」

と応えてから、目を伏せて、

「僕は中津さんの指摘通りあの夜武の部屋を訪れた。草薙さんとの口論のことを問いつめて、二人を仲直りさせようと思ってね。ところがあいつはせせら笑って応じなかった。それでも僕はゴルフのクラブを持って行き、その話で何とかなごませようと考えた。しかし、あいつはそんなことおかまいなしだった。毒舌は続き、僕は徹底的に侮辱された」

と目を上げ、一点を凝視した。

「耐えられなかった。武のことを思って話し合おうとしたのに、逆に罵られるなんてことがね。だから気がついたら、手に持っていたアイアンで武の頭を叩き割っていた…」

私はその時の状況を想像し、気持ち悪くなった。

「アイアンが奴の頭蓋骨に食い込んでいるのを見た僕は、もう少しで大声をあげるところだった。何とかそれを抑制して僕は落ち着こ

うと努力した。そして状況を把握し、どうすればいいか、考えた」

「そして出た答えが、切り裂きジャック、ですか？」

と法子が言った。藤堂さんは力なく笑って、

「そうさ。僕はここへ奴のことを調べるために来たんだ。大事な設定資料を奪われた上その内容を実際の犯行に利用している犯人をこの手で捕まえてやろうと思ったんだよ。ところが自分がその切り裂きジャックになってしまった」

と言った。何て皮肉なことなんだろう。私は悲しくていつの間にか泣いている自分に気づいた。

「故意ではないとは言え、一人の人間を殺した僕は、その犯行を隠すためにさらに一人殺してしまった…」

「どうして、どうしてですか、藤堂さん？ 貴方のような人が、どうして…」

今でも藤堂さんが犯人だということを信じ切れていない私の口から、問いかけとも、非難ともとれる言葉が出た。藤堂さんは私を見てフツと笑い、

「僕が普通の人間だからさ」

と応えた。私は一瞬何を言われたのかわからなかった。藤堂さんは混乱している私に気づいたのか、こう付け加えてくれた。

「普通の人間だからこそ普通でいたいんだ。そのためには、普通でないことは排除しなければならぬ。だから、殺人すら厭わない。何でもできてしまうんだ。これは実際に人を殺した者にしかわからない心理だろうね」

私には何も言い返す言葉がなかった。ところが法子は、

「私にはそんな心理、一生わかりたくありません」

と言った。法子らしい言葉だった。

まもなくして、藤堂さんは北野さんと田島さんに伴われて、そのまま高崎署に連行された。

後で藤堂さんが容疑者として逮捕されたことを知った同好会の人達の反応は、様々だった。

皇さんは驚きのあまり、声もなかった。彼は藤堂さんを尊敬していたので、大変なショックだったようだ。

裕子先輩と一緒に同好会を設立した人が逮捕されたのを知り、涙を流した。

華子先輩は、藤堂さんは犯人じゃない、誰かに陥れられたんだ、と言ってきかなかった。須美恵先輩はそんな親友のパニックをただ黙って見守っていた。

美砂江は驚きこそしたが、それほど感情的な反応はしなかった。「殺されなくて、良かった」くらいにしか思っていないのかも知れない。

行子は、武さんと静枝を殺した犯人が捕まったことと、その犯人が藤堂さんだったことが、どちらもとても重いことだったのでどう反応していいのかわからないようだった。

こうして私達の恐ろしい歓迎旅行は幕を閉じた。

エピソード 大学で 9月21日 午前11時

歓迎旅行から帰って私はとにかくバイトに精を出した。

たまに法子と会って渋谷や原宿に行ったり、世田谷区の祖師谷にある法子の実家にお邪魔したりしたが、何かしてないと藤堂さんのことで頭が混乱してしまいそうだった。

「律子、ホントに藤堂さんのこと好きだったんだね？」

法子にそう言われて私もそう思った。やっぱり、藤堂さんのこと好きだったんだって。

私はそんな程度で混乱してしまうような女だが、法子はもっと辛かったに違いない。

華子先輩に藤堂さんを警察に売った女だと非難され、同好会から抜けるように宣告された。とんでもない話だ。結局裕子先輩のとりなしでそのことはおさまったが、法子の受けた傷は深かったはずだ。それでも法子はそんなこと全然感じさせない笑顔で、逆に私を慰めてくれた。私はそんな法子の心遣いが嬉しくて泣いてしまい、余計彼女に迷惑をかけてしまった。

そんな中で事件に関する様々な情報が田島さんからの定期的な法子への手紙でわかっていった。彼、真剣に法子に交際を申し込んだらしい。でも法子は、

「私なんて、気が強くて口論好きで同性に嫌われるタイプですから、他の方とおつき合いされた方がよろしいですよ」

と丁重に断った。しかし田島さんは諦めきれずに、捜査の報告と称して手紙を送って来ているのだ。

田島さんからの手紙でわかったのは、まず第一に静枝が妊娠していなかったということ。

彼女も武さんも死んでしまった以上真相は闇の中だが、恐らく静枝は武さんが心変わりをしているのを知り、何とか二人の仲をつな

ぎ止めるために行きまでだまして妊娠したフリをしたのだろう。今となつては何とも悲しいお芝居ではあるが。

そして、もう一つ。藤堂さんの武さん殺害の真相だ。これはかなり衝撃的だった。

武さんは静枝の妊娠を疑っていなかった。ただ自分ではないと考えていたようだ。彼は、藤堂さんを疑っていた。

実は藤堂さんは静枝にも手紙を出したり、電話をかけたらしいていらしい。もちろん、以前は裕子先輩にも。とにかく藤堂さんは、女と見れば誰彼かまわず誘惑していたのだ。えっ？　ということは、お誘いがなかった私って一体何？　ちよつとム力つくな。

武さんはそのことを静枝から聞いて知っていたらしい。だから藤堂さんがあの日の夜部屋に来た時、静枝の妊娠のことを話し、藤堂さんを問いつめた。藤堂さんは身に覚えがないことで非難されたので頭に来て武さんを殴り殺してしまったのだ。

だが、動機はそれだけではなかった。武さんは、藤堂さんが法子に気があるのも気づいており、早く彼女にしないと俺がとってしまいますよ、と言ったようなのだ。つまり、武さんが好きな同好会のメンバーとはやはり私の睨んだ通り、法子だったのだ。

藤堂さんは静枝のことはまだ我慢できたが、法子のことには我慢がならなかったという。それが武さん殺害の一番の動機だった。要するに、藤堂さんは発作的に武さんを殺したのではなかったのだ。というか、その場は発作的だったかも知れないが、機会を伺っていたということなのだ。ますますシヨックだった。

「……」

藤堂さんの動機が自分にあると知った法子の胸中は、とても私には推し測れなかった。彼女はそのことについて何も言わないので、私も何も聞かなかった。

さらにその後の田島さんの手紙で、藤堂さんが武さんと静枝の切断された首は湖に麻袋に入れて斧を重石にして沈めた、と証言した

ことを知った。北野さん達は県警の応援も得て湖を搜索したが、二人の首は未だに発見されていないそうだ。悲しいことだ。二人はきちんとか成仏できるのだろうか。ふとそんなことを考えてしまった。

夏期休暇は過ぎて行き、やがて後期の始まりの日がやって来た。

「おはよう、律子」

何日かぶりに見る法子の笑顔は、初めて会った時と少しも変わっていないかった。彼女、すっかり吹っ切ったんだ。

「おはよう、法子」

私も精一杯の笑顔で応じた。そこへ行子が現れた。

「おはよう」

彼女も何とか立ち直ったようだ。法子が、

「ごめんなさいね。草薙さんのお葬式、ずっといてあげられないで」と声をかけると、行子はニッコリして、

「いいのよ、中津さん。静ちゃんは貴女に一番感謝してるから、そんなこと気にしないで」

と応えた。そして、

「華子先輩が中津さんにひどいこと言ったらしいけど、あの先輩方の言うことなんか、気にしちゃダメよ」

とまで言ってくれた。法子は微笑んで、

「ありがとう、戸塚さん。貴女、強くなったわね」

「ええ。静ちゃんの分まで強くなるの」

「そうね」

本日の講義は二限目が休講だったので、私達は食堂棟にある喫茶室に足を伸ばした。

私達はそこでいろいろな話をして楽しく過ごした。こんな感覚って、しばらくなかったことだ。

やがて行子は文学部の学部棟に行った。私達も自分達の講義があるホールに向かった。

「そうそう、今度のお休みに実家に来て」

法子が唐突に言った。私は、

「えっ？ 何かあるの？」

と尋ねた。法子はニコツとして、

「おじ様来るの」

「えっ？」

法子は自分が一人でわかっていることに気づいて苦笑いし、

「警視庁の知り合いの人が、休暇がとれそうなので、私の家に遊びに来るのよ。いろいろ事件の話が聞けるわよ」

「へエ。それ、楽しそうね。行かせていただくわ」

私はニコニコして応えた。まさか、またとんでもない事件に巻き込まれるとは、夢にも思わずに。

エピソード 大学で 9月21日 午前11時（後書き）

自作解説

神村 律子

群馬県は私の生まれたところですから、榛名神社や榛名富士、そして伊香保の温泉街などは、全て実際に行ってみたことがあります。

そもそもこの話は、推理小説の三大トリックの一つ、「顔のない死体」の変則型として考えたものです。ですから、ホントは、もう一人、犠牲者を用意していたのですが、私の考え以上に、法子が鋭くなってしまう、この辺で犯人を推理させないと、彼女がただのボンクラになってしまうそうなので、三人目は取り止めにしました。

小説を考えて書いたことがある方にはおわかりいただけだと思いますが、書き進めているうちに、登場人物が勝手に動き出して来るのです。今回もそれが起こってしまい、解決編も大幅に訂正しなければなりませんでした。全く、私の不徳の致すところです。とは言え、法子と律子には、かなり愛着があるので、そういう現象は嬉しい限りなのですが。

また機会がありましたら、次作を掲載したいと思います。

ありがとうございました。

「湖畔の殺人」後日譚

私神村律子は、群馬県の榛名湖畔で起こった連続殺人事件に遭遇した。

私の大親友となった中津法子の名推理で無事事件は解決し、法子は一躍警察関係者の間で有名人になった。

私はその事が自分の事のように誇らしく、周囲の人々に吹聴して回った。

とにかく得意だったのだ。自分の親友が、殺人事件を解決したのだから。

彼女は控え目な性格なので、決して驕らないし、偉そうではない。

そこがまた彼女の魅力なのだ。

法子のファンクラブは日に日に会員を増やし、今や他の大学にまで広がっている。

美人で、頭が良くて、その上性格も良いとなれば、もうこれ以上望む事はないだろう。

少し分けて欲しいくらいだ。

私はどうしようもなく浮かれていた。

法子の気持ちなど全く考えもせずに。

そんなある日。

法子から携帯にメールが入った。

「何だろ？」

普段はあまりメールをしない法子だったので、私は不思議に思っ
てすぐに開封した。

すると恐ろしい事にタイトルは「絶交します」だった。

「ヒイイッ！」

私は震える指先で本文をスクロールさせた。

「律子へ。私が事件の事を公にしたいのを知っているはずなのに、貴女は誰彼構わずに話して回りました。非常に困惑しています。貴女のようなおしゃべりな人とは今後お付き合いできそうにありません。このメールを最後に、絶交とさせていただきます」

私は涙も出ないくらいショックだった。

どうしよう？

でももう取り返しがつかない。

全部私が悪いのだから、何も言えない。」

推理小説同好会の誰かに相談しようと思ったが、多分誰も私に同情してくれないだろう。

法子の存在は、それくらい会にとって大きいものなのだから。

ああ。

それでも私は、何とか言い訳をしたくて、大学に行くと、法子を探した。

同じ英語クラスの子に尋ねたが、法子を見かけた人がいない。

途方に暮れて、学部棟のロビーの長椅子に座った。

「はア……」

溜息ばかりが出る。

何てバカなんだろう、私は。

あんな事をして、法子が喜ぶ訳がないのに。

そんな事もわからないなんて、何が親友だ。

友達の資格すらないよ。

頂垂れた。誰かに顔を見られるのが嫌だった。

その時だった。

「反省した、律子？」

法子の声。

遂に幻聴が聞こえるようになったのか？

ふと顔を上げる。

するとそこには、幻覚でも何でもなく、法子が立っていた。

「法子……」

私はもう顔をグチャグチャにして泣いていた。

「泣かないでよ、律子。ちょっと脅かし過ぎたかしら？」

「へっ？」

私はキョトンとして泣くのをやめた。

「絶交はウソよ。貴女にしっかりと反省して欲しかったから」

「ええっ？」

法子はニッコリして、

「ごめんね、こんな事して。はい」

と綺麗にラッピングされた箱を手渡した。

「えっ？ 何これ？」

「お誕生日おめでとう、律子」

法子は更にレベルアップした微笑みで言った。

「お誕生日ドキリなの。だから、法学部の皆にも手伝ってもらって、私を見ていないって言ってもらったのよ」

「……」

何が起っているのか理解するのに時間がかかりそうだ。

「あ、ありがとう、法子。う、嬉しい……」

また洪水のように涙が溢れる。

「これに懲りて、お喋りも程々にね」

「うん」

「私のファンクラブなんて存在しないのだから、いろいろ尾ひれを付けて話すのやめてね」

「うん。でも、ファンクラブはホントにあるんだってば……」

「それ以上言うとホントに絶交よ」

「わわ、もう言わない」

私はようやく笑えた。

法子、本当にごめんなさい。

お喋りは慎みます。

多分……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7902e/>

湖畔の殺人

2011年8月30日15時08分発行